

赤ちゃんから
おとなまで

聖書教育

2021年

4

5

6

月号

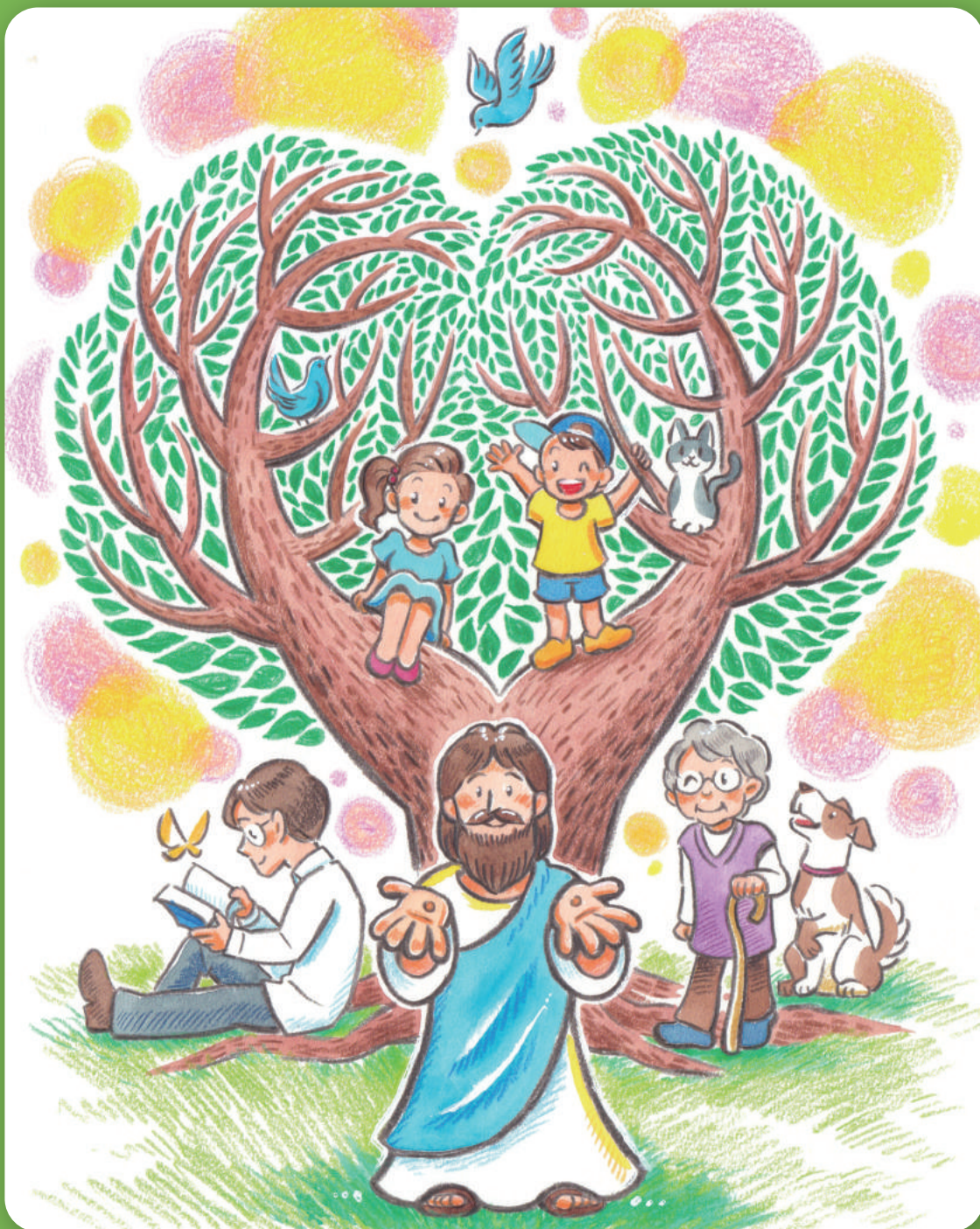
マタイ・使徒・一ヨハネ

絵主題

時代を生きる教会

テーマ

永遠の命を生きる



どう使ったらいいの、 新しい『聖書教育』？



みなさんの教会では、どのように教会学校の時間を過ごしていますか？
これからスタートしてみようという教会もあるかもしれませんね。
「新プログラムが始まった『聖書教育』をどのように用いたらいいの？」
という方のために参考になればとお届けします。

クラスの準備には

教会学校の準備は、日々の15分のみ重ねから！
「準備のための聖書日課」には、日曜日の聖書箇所に向けての関連箇所がリストアップされているからクラスの準備には最適です。「概論」も読んでおくと、時代背景や書簡の特徴もつかみやすいですよ。



クラスでは

伝えたいメッセージがわかりやすい言葉で書かれている「みんなで聴く聖書のおはなし」は、大人にも子どもにも活用していただきたいページです。そして、メッセージのポイントやテーマを幅広い釈義で紹介しているのが「聖書の学び」です。合わせて読んでおきたいですね。

「成人科」や「青少年科」では、私たちの日常と重ねて分かち合うポイントを具体的に取り上げています。「幼小科」では、メッセージのポイントを賛美やゲーム、ワークシートなどの活動を通して気づいたり、深めていくことができます。ときには、大人のクラスでもワークシートにチャレンジしてみてください。

各科の区別にとらわれず、他の科のページも活用してみると、分かりやすくなったり、新しい視点が見つかったりするかもしれませんよ。

記事は

イースター、ペンテコステ、クリスマスなどのメッセージはもちろん、「時代を生きる教会」という総主題を意識しながら、今私たちが大切にしていきたいテーマにも触れていきます。記事を読みながら、教会の中で意見を交わしていただくことを期待しています。



テーマ 永遠の命を生きる

教会学校の目的

教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人々がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、教会を形づくり、生の中において主に聞き、主を証しする生活を確立していくことにある。

日本バプテスト連盟 1971年制定、1999年改訂

聖書教育ホームページ <https://www.bapren.com/>

1	目次	
2	プログラム表	
3	準備のための聖書日課	川上敏夫
特集・連載		
4~	特集 ペンテコステ・メッセージ	塩山宗満
6~	特集 神のかたちである人間	渡辺政友
8~	連載 神学校週間をおぼえて	濱野道雄
10~	連載 とともに分かち、ともに生きる	松藤一作
12	執筆者紹介	
13	概論 この時代に「使徒言行録」を読む	藤井秀一
今号の展開例 ● 第1課~第13課		
14~	聖書の学び・成人科	藤井秀一
16~	みんなで聴く聖書のおはなし	藤井秀一
17~	青少年科	山下真実
18~	幼小科	明上山美樹
92~	暗唱聖句手話	塩山幸子
94~	暗唱聖句カード 新共同訳・口語訳	
99	「聖書教育」読者アンケート	
100	次号予告	

2021年度 聖書教育 2020~2022年度プログラム

総主題 時代を生きる教会

課	月日			週題	聖書箇所
1	4月4日	イースター	マタイ・使徒・ヨハネ	行く手に立つイエス	マタイ28:1~15
2	4月11日			世の終わりまで、主と共に	マタイ28:16~20
3	4月18日			幸いである	マタイ5:1~12
4	4月25日			わたしもその中にある	マタイ18:15~20
5	5月2日			「サウル、サウル」	使徒9:1~19前半
6	5月9日			キリスト者と呼ばれて	使徒11:19~26(参照11:1~18)
7	5月16日			ただ主イエスの恵みによって	使徒15:1~21
8	5月23日	ペンテコステ		この幻を見るまでに	使徒16:6~15(参照15:36~16:5)
9	5月30日			真夜中の賛美	使徒16:25~40(参照16:16~24)
10	6月6日			光の中を歩む	Ⅰヨハネ1:1~10
11	6月13日			イエスが歩まれたように	Ⅰヨハネ2:1~17
12	6月20日	沖縄命どう宝の日		互いに愛し合う	Ⅰヨハネ4:7~21
13	6月27日	神学校週間		永遠の命 イエス・キリスト	Ⅰヨハネ5:6~15
14	7月4日		ヤコブ・エゼキエル	聞くだけでは終わらない	ヤコブ1:19~27
15	7月11日			人を分け隔てせず	ヤコブ2:1~13
16	7月18日			上から出た知恵	ヤコブ3:13~18
17	7月25日			主が来られるときまで	ヤコブ5:7~20
18	8月1日			エゼキエルの召命	エゼキエル2:1~10(参照1:1~3)
19	8月8日			主の聖所を背にし	エゼキエル8:1~18
20	8月15日	平和		もはやむなししい幻を見ることもなく	エゼキエル13:8~16(参照13:1~7,17~23)
21	8月22日			主に立ち帰って、生きよ	エゼキエル18:21~32
22	8月29日			立ち帰れ、立ち帰れ	エゼキエル33:10~20
23	9月5日			主こそ <small>まこと</small> 眞の牧者	エゼキエル34:1~16
24	9月12日	教会学校月間		主が建て直す日	エゼキエル36:25~38
25	9月19日			枯れた骨よ、主の言葉を聞け	エゼキエル37:1~14
26	9月26日			<small>まこと</small> 眞の神殿の幻	エゼキエル43:1~12
27	10月3日			あの空はどうして青い	詩編19:1~15
28	10月10日		誇らない世界	詩編23:1~6	
29	10月17日		すべては主のもの	詩編24:1~6	
30	10月24日		豊かな平和に	詩編72:1~14	
31	10月31日		御手の業を喜び歌う	詩編92:1~16	
32	11月7日		無知な者にも	詩編119:129~136	
33	11月14日		大き過ぎることを求めません	詩編131:1~3	
34	11月21日		主が望まれるのは	詩編147:4~14	
35	11月28日	世界祈禱週間	平和の主よ来てください、この世界に	イザヤ11:1~10	
36	12月5日		もはや戦うことを学ばない	ミカ4:1~4	
37	12月12日		彼こそ、まさしく平和	ミカ5:1~5	
38	12月19日	クリスマス	すべての人を照らすいのちの光	ヨハネ1:1~18	
39	12月26日		見よ、世の罪を取り除く神の小羊	ヨハネ1:29~34	
40	1月2日		マルコ	福音のスタート	マルコ1:14~20
41	1月9日			罪人を招くために	マルコ2:13~17
42	1月16日			ここにわたしの家族がいる	マルコ3:31~35
43	1月23日			五つのパンと二匹の魚	マルコ6:30~44
44	1月30日	協力伝道週間		シリア・フェニキアで	マルコ7:24~30
45	2月6日	信教の自由		目を覚ましていなさい	マルコ13:32~37
46	2月13日			メシアと告白しつつも	マルコ8:27~38
47	2月20日			信仰のない時代に	マルコ9:14~29
48	2月27日			神殿といちじくの木	マルコ11:12~26
49	3月6日			生きている者と共に	マルコ12:18~27
50	3月13日			裏切る者と共に	マルコ14:10~26
51	3月20日			心は燃えていても	マルコ14:27~42
52	3月27日			ペトロの離反	マルコ14:66~72

2021年4月

準備のための聖書日課

1日㊥ ヨハネ20:11~18	復活の主にお会いして	17日㊥ マタイ4:23~25	主イエスに従う人々
2日㊥ マタイ4:12~17	異邦人のガリラヤから始まる	18日㊥ マタイ5:1~12	幸いである
3日㊥ マタイ27:62~66	墓を見張る番兵	19日㊥ ダニエル9:1~9	憐れみと赦しは主のもの
4日㊥ マタイ28:1~15	行く手に立つイエス	20日㊥ マタイ18:1~5	ここに天の国の入り口がある
5日㊥ マタイ4:8~11	ただ主に仕えよ	21日㊥ マタイ18:10~14	天の父の御心を求めて
6日㊥ マタイ4:18~22	ガリラヤ湖のほとりで	22日㊥ マタイ16:13~20	つなぐことと解くこと
7日㊥ マタイ26:31~35	主につまずく弟子たち	23日㊥ ヨハネ20:19~23	赦すことと赦されないこと
8日㊥ マタイ27:3~10	主イエスを裏切ったユダ	24日㊥ フィリピ2:1~11	心を合わせ、思いをひとつにして
9日㊥ ヨハネ20:24~29	信じない者ではなく	25日㊥ マタイ18:15~20	わたしもその中にいる
10日㊥ 使徒言行録1:6~11	地の果てに至るまで	26日㊥ 使徒言行録7:54~8:3	教会を荒らす者サウル
11日㊥ マタイ28:16~20	世の終わりまで、主と共に	27日㊥ 使徒言行録22:6~16	わたしたちの先祖の神による選び
12日㊥ ルカ6:20~26	主イエスの約束	28日㊥ 使徒言行録26:12~18	主の証人パウロ
13日㊥ 詩編33:12~22	いかに幸いなことが	29日㊥ ローマ9:19~24	憐れみの器として
14日㊥ イザヤ30:18~19	なんと幸いなことが	30日㊥ コリント二4:1~7	福音の光を納めた土の器
15日㊥ 詩編96:10~13	地よ、喜び躍れ		
16日㊥ フィリピ4:4~7	主において喜べ		

2021年5月

準備のための聖書日課

1日㊥ 使徒言行録8:26~40	手引きしてくれる人がなければ	17日㊥ ヨハネ3:1~15	風は思いのままに吹く
2日㊥ 使徒言行録9:1~19前半	「サウル、サウル」	18日㊥ ヨハネ20:19~23	聖霊を受けよ
3日㊥ 使徒言行録2:37~42	信仰の交わりの中	19日㊥ ローマ8:1~11	霊に従って歩む
4日㊥ 使徒言行録4:32~37	バルナバと呼ばれたヨセフ	20日㊥ ルカ24:44~49	心の目が開かれて
5日㊥ 使徒言行録9:26~31	バルナバの献身	21日㊥ 使徒言行録15:36~41	別々の道へ
6日㊥ ペトロー4:12~19	キリスト者の中で呼ばれる幸い	22日㊥ 使徒言行録16:1~5	テモテを同行させるために
7日㊥ ヨハネ7:32~36	ギリシア人に教えるつもりか	23日㊥ 使徒言行録16:6~15	この幻を見るまでに
8日㊥ 使徒言行録11:1~18	命を与えてくださる神	24日㊥ イザヤ61:1~3	賛美の衣をまとって
9日㊥ 使徒言行録11:19~26	キリスト者と呼ばれて	25日㊥ エフェソ5:15~20	主に向かって心からほめ歌う
10日㊥ ガラテヤ2:1~10	福音の真理に立つ	26日㊥ 使徒言行録18:5~11	一家をあげて主を信じる
11日㊥ 使徒言行録13:38~39	信仰義認	27日㊥ 使徒言行録22:22~29	生まれながらのローマ帝国の市民
12日㊥ アモス9:11~15	見よ、その日が来れば	28日㊥ 使徒言行録28:30~31	全く自由に何の妨げもなく
13日㊥ ローマ15:7~13	互いに受け入れるために	29日㊥ 使徒言行録16:16~24	投獄されたパウロとシラス
14日㊥ 使徒言行録14:21~28	異邦人に開かれた信仰の門	30日㊥ 使徒言行録16:25~40	真夜中の賛美
15日㊥ 使徒言行録15:22~29	重荷を負わせることなく	31日㊥ ヨハネ1:1~5	暗闇の中で輝く光
16日㊥ 使徒言行録15:1~21	ただ主イエスの恵みによって		

2021年6月

準備のための聖書日課

1日㊥ イザヤ2:1~5	主の光の中を歩もう	16日㊥ ローマ5:1~11	御子の命による救い
2日㊥ ヨハネ3:16~21	永遠の命を得るために	17日㊥ コリント一12:31後半~13:13	愛は忍耐強い
3日㊥ ルカ24:36~43	触ってよく見よ	18日㊥ ヨハネ15:11~17	主の選びを信じて
4日㊥ コリント一1:4~9	主の交わりに招き入れられて	19日㊥ ヨハネ4:1~6	世に属する偽預言者
5日㊥ ヨハネ8:12~20	命の光を与えられて	20日㊥ ヨハネ4:7~21	互いに愛し合う
6日㊥ ヨハネ1:1~10	光の中を歩む	21日㊥ ヨハネ5:1~5	世に打ち勝つ信仰
7日㊥ ヨハネ14:15~24	共におられる弁護者	22日㊥ ヨハネ16:25~33	主の勝利にあずかる
8日㊥ ヨハネ14:25~31	心を騒がせるな	23日㊥ ヨハネ1:29~34	世の罪を取り除く神の小羊
9日㊥ ヨハネ13:31~35	新しい掟に生きる	24日㊥ ヨハネ19:31~37	流れ出た血と水
10日㊥ ヨハネ3:11~18	わたしたちは愛を知っている	25日㊥ ヨハネ14:7~14	主の名によって願う
11日㊥ ヨハネ15:1~10	主イエスにつながる	26日㊥ ヨハネ5:16~21	主こそ真実の神、永遠の命
12日㊥ ヨハネ2:18~27	御子の内にとどまる	27日㊥ ヨハネ5:6~15	永遠の命 イエス・キリスト
13日㊥ ヨハネ2:1~17	イエスが歩まれたように	28日㊥ マタイ13:53~58	主イエスの兄弟ヤコブ
14日㊥ ヨハネ2:28~3:10	神の子と呼ばれて	29日㊥ ガラテヤ1:18~24	主の兄弟ヤコブとの出会い
15日㊥ ヨハネ3:19~24	神の御前にある安心さ	30日㊥ ローマ3:21~31	信仰による神の義



ペンテコステ メッセージ

福音のためなら、
わたしはどんなことでもします

コリントの信徒への手紙一 9章19〜23節



茂原バプテスト教会
牧師 塩山宗満

多国語看板

十数年前、私たちの教会では集会案内の裏面を何か活用しようと話し合いました。そこで、「神は愛です」という聖書の言葉をいろいろな国の言葉で描こうということになりました。子どもたちの手形をとって愛を受け取るイメージのデザインにし、それを看板にしました。かつて、天にまで届く塔を建てようとする人間に、神は言葉を乱してそれを妨げられました。その混乱が、ペンテコステの日に聖霊が降り、言葉は違っても、同じ神の愛を語り続ける事によって一つにされたということをこの看板で表したかったのです。



だれに対しても自由

パウロは相手は何ものであろうとも、誰によっても奴隷にはならず、自由に生きてきました。さらにその自由によって、たとえ相手の奴隷となってもその相手に付き合っ、自分を変化させて生きていくというさらなる自由を持っていました。それはできるだけ多くの人を主に導き、共に福音にあずかるためでした。

パウロは、ユダヤ人に対しては「ユダヤ人を得るためにユダヤ人のようになる」と言います。パウロ自身ユダヤ人として育てられたのですが、ユダヤ人としてのしがらみから離れて自由になっていたけれども、ユダヤ人のためには敢えてユ

ダヤ人らしく律法に従って生きることもあるということでしょう。

律法を持たない人とは異邦人のことですが、パウロ自身は「キリストの律法を持っているが、あえて律法を持っていない人ようになった」と言います。異邦人への宣教はパウロが主から与えられた使命ですから、ユダヤ教の人たちが語る律法からは自由になって、キリストの律法という新しい掟、「互いに愛し合いなさい」という主イエスが語られた言葉に従って生きていくように導かれていくのです。「弱い人には弱い人のように」というように、律法やそれまでの習慣から自由になれない弱さ、新しい生活様式に踏み出すことを恐れる弱さへ寄り添いました。

そしてパウロはこう宣言します。「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです」(1コリ9:23)

私たちにできることは

共に礼拝し、聖書を読み、祈り続けること、そして「自分がどのように生きていこうとしているのか」を周りの人たちに伝えること、そのことならできるでしょうか。そのように生かされている自分の姿を見てもらうことによって、主イエスの愛を理解してもらえるのではないのでしょうか。

私たちの教会では「誰もが集まれる教会、地域に仕える教会」となるように願い、祈ってきました。そのためには、何をしたらよいか、みんなでいろいろ工夫してきました。はじめは英語とスペイン語のホームページです。それから、大きな看板を教会の近くの四つ角に建て、教会の入り口には多国語看板を立てました。礼拝では、聞こえない人たちのために手話通訳者を立て、週報英語版をつくり、聖書、賛美歌をプロジェクターで表示し、時には英語の歌詞を加えたりしました。難病で礼拝に出席できない方のために2014年からは礼拝をインターネットで配信しています。

いろいろな仲間と共に

集会に集われる外国からの方たちに、私たちの教会は教会員になって共に信仰生活を送るよう勧め、いまでは礼拝に韓国、マレーシア、フィリピン、ジャマイカ、台湾、アメリカ、ネパールの人たちが加わってくださっています。そのうちの一人は執事に選ばれました。

でも、英語を使う人たちが増えるに従って、これだけでは十分ではありませんでした。そこで、2019年から教会学校の英語クラスを『聖書教育』誌英語版を用いて開始し、さらに毎月第4日曜日午後に英語での礼拝をスタートさせました。また、2020年4月から毎週の説教のある方が英訳してくださっています。私の説教の英語版をスマホで見ながら聞いている人もいます。

2019年には多目的ホール「憩いの場」を献堂し、様々な活動に用いられるように準備しました。納骨施設を用意して、文字通り赤ちゃんからお年寄りまで、教会が人々に寄り添うことをめざしています。この納骨施設は、茂原市と交渉して正式な納骨堂として認可を得ました。最近、天に召された中国籍の教会員を、ここに迎えることができました。課題はたくさんあります。さらに言葉を磨くこと、外国の方たちの生活面の支援ができるように、知識を蓄え、行政とのチャンネルをつくることなどが求められています。

私たちの教会は礼拝出席がこの15年ほど、25～30人ぐらいですが、地方都市の宿命である若い人たちが都会の学校や職場へ移っていきます。けれども主が不思議なみ手で新しい方たちや外国から来られた方たちを加えてくださいます。

コロナウイルス感染症の騒ぎの中で、なかなか福音を外に向けて伝えることが難しい時ですが、そのような中で私たちの教会も、皆さんの教会も「誰もが集まれる教会、地域に仕える教会」となるようご一緒に祈り続けていきましょう。

東日本大震災と 原発事故から10年 神のかたちである人間

聖書

創世記1章26節

出エジプト記20章4節

震災と震災直後

福島市にいる私は、東日本大震災が起こった時、教会の定期総会資料の作成中でした。信じられないような恐ろしい揺れが来たので、外に逃げたいと思いました。資料データを保存してから逃げようとしたのですが、無理でした。あっと言う間に停電になってしまったからです。なるべく広い場所に逃げようとしたのですが、それも無理でした。揺れが強すぎて簡単に移動できません。東北の太平洋側の大多数の地区では、電気や水道などのライフラインが使えなくなりました。私の情報源も、三日間ぐらいは乾電池式のラジオと新聞だけになり、それらを通して津波で多くの方が亡くなられたことと、福島第一原発で何かが起こっていることを知りました。電気が使えるようになった頃には、テレビニュースで津波の話題は少なくなり原発事故一色になっていました。テレビではいつも福島県各地の放射線量が報道されていましたが、その数値の意味がわかりませんでした。今聞いたら、びっくりするような数値だったのですが、当時は平常時の数値すらわからなかったので、数値を聞いても何とも思いませんでした。また政府もわかりやすく情報を提供しませんでした。海外では放射能雲が、北西に向かって流れた

ことが報道されていましたが、なぜか日本では全く報道されませんでした。浪江町の方たちは福島原発から北西にある福島市の避難所に避難されました。浪江町長へ情報があれば、北西には避難させなかったと思います。私も、油断して生活していました。水道が三週間ぐらい使えなかったのでバケツを持って近所の親切な方たちから水をいただくために、マスクもつけないで外を歩いていました。放射性物質が降り注いでいることも知らずに、自転車をこいだこともあります。

連盟の取り組み

日本バプテスト連盟災害対策本部に原発課題班が設置され、担当者の方たちが福島県内にある連盟の三つの教会を訪ねていただきました。またガイガーカウンターがこの三つの教会に届けられ、放射能学習会が開催されました。原発課題班の働きは今も続いています。

放射線量

0.6 マイクロシーベルト以上の区域を「放射線管理区域」と呼びます。私の記憶では震災から二年ぐらいは、福島市の放射線量は0.6 マイクロシーベルトを超えていたと記憶しています。0.6 マイクロシーベルト未満の地域も含めて福島県各地で除染がなされました。

渡辺政友

あゆみの家キリスト教会 牧師



何が問題なのか

その後、福島県各地の放射線量は大きく下がりました。福島市の放射線量も0.6マイクロシーベルト未満になりました。しかし、外で遊びたい子どもたちにとっては問題がなくなっただけではありません。子どもたちも除染が終わった公園や運動場であれば、比較的安心して遊ぶことができます。また福島県各地には、行政や民間団体が設立した屋内子ども遊び場が存在します。しかし、除染がなされていない野原等で遊ぶことは避けなければなりません。子どもの頃を思い出してみましよう。子どもの頃、どんな所で遊びたかったですか。人工的な運動場や公園だけで子どもたちは満足できるでしょうか。むしろ人工的でない野原のような場所で、泥んこになって遊ぶことが最高の楽しみではなかったでしょうか。私は、屋内砂場で遊ぶ子どもたちの姿を見ると、「この子たちが何か悪いことをしたのか」と怒りが込み上げて来ます。

土は汚染されたかもしれませんが、福島に住む私たちの心は汚染されていません。権力によって懐柔^{かいじょう}なんてされていません。むしろ残念だと感じるのは、福島県民差別を行った人たちの心です。

1990年代にチェルノブイリ写真展を訪ねたことがあります。チェルノブイリ原発事故によって汚染された地域の様子を知るための写真展でした。悲惨な光景の写真を見せられ

ると予想して訪ねたのですが全く意外でした。そこで見たのは美しい自然の中で、のどかに幸せそうに生きている人々の写真でした。私は何が何だかわからなくなりました。福島で放射能汚染を経験してやっとわかりました。チェルノブイリと福島では、何が問題なのでしょう。ずばり言います。土が問題なのです。

パラダイムの転換へ

原発事故を経験した私たちに求められていることはパラダイムの転換です。人間中心のキリスト教信仰を悔い改めて方向転換しなければなりません。大地は人間だけのものではなくすべての造られた物のためにあります。人間の都合だけで神さまが造られた大地を汚してはいけません。

神さまはなぜ人間だけに偶像を作り拝むなと言う戒めを与えたのでしょうか。人間だけが偶像を作り拝もうとするからではないでしょうか。人間だけが自己を絶対化して原子力のような制御不能なエネルギーを使おうとします。自己を絶対化して自分を守らなければならないと頑張る私たちに対して、神さまはそんな無茶なこととして頑張らなくてよろしい。私が人間のかたちではなく、あなたたち人間が神である私のかたちなのだと言語かけてくださっているのではないのでしょうか。



神学校週間をおぼえて

● 曲がり角の ところで ●

現在、日本バプテスト連盟において私たちの協力伝道の働きである「伝道者養成」も一つの曲がり角に来ているのかもしれない。思ったより早く、いえ予想はしていたけどどうとう。

2020年12月に開催された連盟の「神学教育に関する委員会」で、中田常務理事は伝道者養成について6つの課題をあげました。「西南神学部神学コース入学者の減少」「奨学資金の取扱に関する課題」「教会の献身者輩出力と牧師を支える経済状況の課題」「多様化する神学、宣教論を包括するという課題」「会衆主義教会としての醸成と伝道者養成」、そしてその結果として「2014年理事会承認の伝道者養成の基本理念の見直し」です。



最初の「西南神学部神学コース入学者の減少」をとっても、その色々な要因と対策について1年以上分析、検討して来ました。一つ言えるのは、このような傾向は連盟だけではなく他派でも、また世界的に、特に北半球の教会では起こっているということです。世界中で宣教のあり方が変わりつつあり、その結果、教会も、求められる牧師像も、そのための神学教育のあり方も曲がり角に立っているということです。

しかし、そもそもなぜ私たちは伝道者養成の

働きをしているのでしょうか。それは神が神の国へと導かれるこの世界の歴史のただ中で、教会という神の民を集め、この世界とは異なる「もう一つの世界」をつくられたためだと思います。その神の民は色々な個性を持ち（それで良いのです）、色々な聖書の読み方をするので、私たちはその人々をつなぎあわせる働き人として「牧師」を立てるという方法を選びました。その「牧師」は、色々な人の聖書の読み方を受け止め理解するために、広く学ぶ必要があるのです。協力伝道の働きとして立てられた神学校で、一つの教会だけで学べるよりもっと広く学んでもらおうと考えました。そのように私たちは「もう一つの世界」=教会を形作り続けて来たのでしよう。



ところが神はもう一歩先へと、今、私たちを導かれようとしているようです。私たちはこれまで「もう一つの世界」のつもりで形作って来た教会に、この世界の国や企業同様に「大きくなり」「成果を上げること」を求め、この世界の政治家やリーダーと同様に「強い」「権威を持った」牧師を求めてきたのかもしれない。それが故にかえって「牧師は特別だから給与や休暇についてあまり配慮しなくても良い」とい



った考えも教会にあったでしょう。それももう、終わりです。この5年でそのような牧師像、リーダー像が明確に通用しなくなって来た例を散見します。それと共に神学教育でも、従来の「徒弟制度」的教育や、旧来の「神学的正解」を上から教えるスタイルの教員のあり方は、終わりを迎えているのでしょうか。



この曲がり角、どちらに一歩あゆみだしましょうか。教会も恐らく地域に溶け込むスタイルになっていくと思いますが、例えば教会が行政の下請けになるようなNPOを作っても「もう一つの世界」にはなれません。その一方で牧師は人々の声をつなぎ合わせる役目をこれまで以上に負うでしょうが、自らの立ち位置が曖昧で流されるだけでは「神の国」という方向の一歩を歩み出す事は難しいでしょう。どのような神学教育を今、すべきでしょうか。その為に今年の神学校週間、いえいつでも広く声を聞かせていただきたいのです。「今、神はどのような働きに私たちを招き、どのような教会や共同体を作り、どのようなリーダーが必要か、必要でないか」。



具体的に今考えている事をいくつか申します。西南学院大学神学部では神学コース生が少なくなりました。しかし同じ神学部のキリスト教人文学コースは人気で、連盟加盟教会の教会員も

含めクリスチャンの数も増えています。この学生たちは学びを通し、教会でより豊かな働きをしてくれるでしょうし、それぞれ就職先等の人生の場で、教会の枠を超えた神の国の広がりにおけるキリスト教の可能性を形にしてくれることでしょう。また神学部では現在、カリキュラムの大幅な見直しをしています。色々なことを考えていますが、従来「教会の中」の働きに関する科目に集中していたものを、「教会の外」の世界を理解し、そこでキリスト者として生きるための科目も増やす必要も感じています。またいくつかの科目をセットで学ぶ「モジュール制」を導入する事で、自分の専門や興味のある神学しか知らない牧師にならないよう、総合的な広がりで学べるように考えています。



しかし牧師になるために何をいかに学ぶかは、まず神がこの世界でどのような働きに私たちを、教会を、牧師を招いていらっしゃるかを真摯に求めていかなければ決められないので、お互いの声を聴きあっていきましょう。どの神学校や伝道者養成の取り組みも、得意分野や不得意な点があります。ですから協力せず、自分の方が優れていると小さな「勢力争い」ばかりして建設的な議論ができないなら、その時代的使命も早晚終わります。でも一緒に聴きあいながら、一歩踏み出せば、きっと大丈夫。その道は神の国へと招かれているはずですよ。

「ともに分かち、ともに生きる」 時代の中で聖書を読む

2021年度連載「ともに分かち、ともに生きる」では、2020年度後期に東京バプテスト神学校「教会学校論」において『聖書教育』の編集に携わる者たちが担当し、「この時代にみことばをどう分かち合うか」をポイントに、分かち合われた内容を紹介いたします。

バプテストのアイデンティティ

約400年前、当時のイギリス国教会から信教の自由を求めて離脱したバプテスト。聖書に向き合う主体、告白に生きる主体となっていくために、既成の制度や枠組みを振り切って「個人」であることを選び取ったバプテスト。あらゆる権威や権力、そして伝統や歴史的遺産を排斥し、キリストにのみ集中しようとしたバプテスト。迫害を受けてもなおバプテストは、そこにこそダイナミックな信仰と恵みの豊かさを見出していこうとしたのではないのでしょうか。バプテストが否定してきたもの、そしてバプテストが選び取ってきたものは一体何だったのでしょうか。こうしたバプテストのアイデンティティを今日的に捉え直すことを通して、今、私たちが直面している様々な課題に取り組む糸口やヒント、そして可能性が与えられるのではないかと思えてなりません。

今という時代

社会は常に変化し続け、さらに今、大きな時代の転換期を迎えようとしています。そうした中で人々の価値観や物事の見方も変化し、これまでの教会の在り方、伝道方策、宣教の言葉などにも行き詰まりがおきているのではないのでしょうか。数年前に日本バプテスト連盟の加盟教会が全国各地で実施した協力伝道会議において、諸教会の新たな取り組みや地域における働きが共有されました。そこでは、私たちがこれまで持っていた枠組みから自由になって、教会が出会っている一人ひとりと向き合っていくことを通して、教会の新たな可能性や、宣教の拡がりのあることが分かち合われました。私たちが聴くべきキリストの福音は決して変わることはありませんが、それは私たち自身が変わらなくて良いということではありません。こうした新たな取り組みや、これまでの「教会」や「伝道」の概念から自由になっていく中で、福音はさらに豊かに私たちに語りかけ、拡がっていくのだと考えさせられました。だからこそバプテストは、既存の枠組みに執着することなく、日々新たに生まれ変わり続けることを選び取ったのではないのでしょうか。変えられ、新たにされることを通して、生き生きと働かれる主のみ業に、私たちも与ることができる、それがバプテストなのだと思うのです。



日本バプテスト連盟 宣教部部长

松藤一作

(大宮バプテスト教会 教会員)



少子高齢化、グローバル社会における世界規模での人との出会いや行き来、それに伴う経済格差の固定化、多様な価値観の受容など、私たちの周囲にあるものは、日本で教会が全国に広がってきた戦後社会の時代様相とは著しく異なってきています。私たちはこうした大きな変化の中で、「福音宣教」の働きを主から託されています。私たちが出会っている一人ひとりの背景にあるものを捉えながら、今に語りかける神さまのメッセージを受け取っていききたいものです。その時に大切にしたいことは、「これまで聞いてきた福音」ではなく、「今、ここで新たに示され、聞こえてくる福音」なのではないでしょうか。

バプテストの教会学校

『聖書教育』をはじめ、日本バプテスト連盟宣教部が推進してきた教会学校は、「共同学習」でした。共同学習は、ある一人の人が持っている知識や知恵を伝授し、学習者たちがそれを受け取っていくという、いわば方向性・矢印が一方通行のものではなく、相互的かつ有機的なものです。教会学校のクラスメンバーの一人ひとりが聖書と向き合い、そこから聞き取ったものを分かち合い、互いに聞き合うことを通して、福音がさらに豊かに拡がり、一人ひとりに響いていくこと、また深められていくことが期待されています。ここ

にはバプテストらしいあり方が含まれていると私は感じています。一つの答えを巡って学ぶのではなく、あるいは一つのめあてに向かって学ぶのではなく、一人ひとりを神さまの前に等しく立つ者として理解し、また主体的に聖書と向き合い、互いの個を尊重し合い、学び合う。こうした分かち合いや対話の中で自分自身の中に起こされる変化や新たな発見が、「今、ここで新たに示され、聞こえてくる福音」となって、主を証しする生活へと押し出してくれるのだと思います。

時代を生きる教会

『聖書教育』は、「時代を生きる教会」という総主題になって二年目に入ります。この時代を生きている一人ひとりの喜びや痛み、悲しみといったものを肌感覚で捉えつつ、その背後に広がり、またその一人ひとりに直に繋がっている世界の諸課題をも俯瞰しながら、そうした中で聖書と向き合うということ、告白に生きるということと共に考えていきたいと願っています。教会は、この時代やこの世界と無関係に立っているのではありません。だからこそ、これまでの価値観や既成の概念から自由にされて、今という時代の中に新たに示され、聞こえてくる福音を共に分かち合っていきたいと願っています。

この時代に 「使徒言行録」を読む

花小金井キリスト教会
牧師 藤井秀一

「使徒言行録」は「ルカによる福音書」を書いた同一の人物によって、AD70年から100年の地中海世界のどこかの場所で書かれました。伝承では著者は「ルカ」と言われます。

福音がエルサレムから ユダヤ、サマリアへ

使徒言行録の構成をあえて二分するなら、前半はエルサレムに生まれた原始教会とその宣教の働き、後半はパウロによる世界宣教の働きに区分できるでしょう。

まず、ペンテコステの日にエルサレムにいた弟子たちに聖霊が降ります。その場にはあらゆる国からエルサレムに帰ってきていたユダヤ人たちがいました。聖霊が降った弟子たちは、そこにいた人々の生まれ故郷の言葉で福音を語り、エルサレムに教会が生まれ活動が始まります。この前半部分に主に登場する人物はペトロとヨハネです。特にペトロは、ユダヤ人が十字架につけたイエスこそがメシアであるとユダヤ人に力強く語り続けます。そのメッセージに反発する人々によって教会は迫害を受け、使徒たち以外の者は、エルサレムから散らされるという事態になります。しかし散らされた人々はその場所でなおキリストを伝え続け、福音はエルサレムから広がり、サマリア地方へ届くことになります。やがてサウロの回心、異邦人の百人隊長コルネリウスの入信の出来事を経ると、ペトロの口から「神は人を分け隔てなさないことが、よくわかりま

した」(10:34)「この方(イエス・キリスト)こそ、すべての人の主です」(10:36)という告白がなされるようになります。

さらに福音がローマに至るまで

後半は、アンティオキアの教会からバルナバとサウロが異邦人世界に伝道旅行に出発する13章からです。サウロはパウロと呼ばれるようになり、物語の中心人物はペトロからパウロへとバトンタッチしていきます。15章ではパウロとエルサレム教会との対話の様子が記され、彼の激しい手紙のイメージとは違うパウロの姿が描かれていきます。その後、第二、第三の伝道旅行において、迫害を受けながらも、各地に異邦人を中心とする教会を生んでいくパウロの働きを中心に物語は進展し、エルサレム教会を訪問したパウロが、ユダヤ人の暴徒から守られつつ、囚人の立場でローマに護送され、最後はローマで「神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」と告げることで使徒言行録は終わります。

分断と対立の進む現代社会に、さらにコロナ危機が到来したことで、他者と出合い共に生きることがますます難しくさせられた気がします。この時代に「神は人を分け隔てなさないことが、よくわかりました」とペトロに言わせた「聖霊の働き」の証人に、私たちもならせていただけますように。

番兵の配備

主イエスが葬られた墓を、番兵が見張っていたと記すのは、マタイ福音書だけです。この番兵は祭司長らの指揮に属する神殿警備隊の兵と思われ（『新共同訳 新約聖書略解』日本基督教団出版局）。マタイ福音書が執筆された当時、イエスの復活を信じる教会に対して「弟子たちがひそかにイエスの遺体を盗み出し、復活したと言いつらしている」とユダヤ教の側から批判されていたと思われます。その批判に対してマタイ福音書は、墓は大きな石で封印され番兵が置かれていたので、弟子たちが遺体を盗み出すことは不可能であったこと、むしろ祭司長たちが兵士を買収し、そのような嘘を広めたのだと告げていきます。

主イエスの墓において、地震や天使との遭遇という、神の出来事を経験した番兵と女性たちでしたが、兵士は恐ろしさのあまり震え上がって死人のようになってしまうのに対し、女性たちは「恐れることはない」との天の声を聞きとり「恐れながらも大いに喜び」復活の主と出会うこととなります。番兵と女性たちを分けたのは、目に見える事象に震えあがるのではなく、天からの声を聞きわけたことにありました。

復活させられた

女性たちに天使は、イエスは「復活なされたのだ」（28：6）と告げます。その言葉は、ギリシア語では受動態で「よみがえらされた」

という意味です。主イエスは自力で復活したのではなく、神がイエスを復活させたということに、大切なメッセージがあります。

遺体の置いてあった場所を見なさい

4つの福音書のすべてが、イエスが葬られた墓に遺体なかったことを告げています。ヨハネ福音書は、遺体がないことをマリアの深い悲しみと結び付け、マリアの瞬間的な恐れやとまどいを描くのに対し、マタイ福音書では、遺体がないことを喜びの根拠として結び付け、墓から復活の証し流れ出していくように描いていくのです。

「おはよう」と言われた

墓から立ち去り、走り出した女性たちの行く手に、イエスが立ち「おはよう」と言われたと告げています。口語訳では「平安あれ」と訳されますが、ヘブライ語のシャロームに対応する言葉ではなく、ギリシア語のカイローの命令形で「喜べ」「喜びがあるように」と訳すことができる、日常的な挨拶の言葉が使われています。番兵たちには死ぬほど恐ろしい出来事としか理解できなかった同じ現場が、イエスを愛する女性たちには、その行く手に愛する方が立たれ「おはよう」「喜びがあるように」と声をかけてくださる、忘れ難い現場となったのでした。女性たちは、そのお方の足を抱き、その前にひれ伏します。「ひれ伏す」はギリシア語のプロスクネオーで、

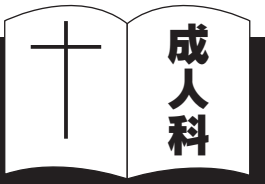
拜む、礼拝するという意味の言葉です。女性たちはイエスの幻や幽霊と出会っているのではなく、その前にひれ伏すべきお方と、出会っているのです

ガリラヤに行きなさい

「わたしの兄弟たち」(28:10)とは、7節で言われている弟子たちのことでしょう。復活のイエスは、ご自分を見捨てて逃げ去った弟子たちを「わたしの兄弟たち」とさえ呼んでくださいます。そしてガリラヤとはイエスと弟子たちの出会いと宣教活動の原点であるとともに、預言者イザヤが「…異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見」と預言し、その成就としてマタイ福音書4章から始まったイエスと弟子たちの宣教活動が、

準備のための聖書日課			
29日	㊦	マタイ27:57~66	茫然と座り込む女たち
30日	㊦	コリントー15:1~11	キリストは葬られた
31日	㊦	マタイ20:17~19	人の子は三日目に復活する
1日	㊦	ヨハネ20:11~18	復活の主にお会いして
2日	㊦	マタイ4:12~17	異邦人のガリラヤから始まる
3日	㊦	マタイ27:62~66	墓を見張る番兵

十字架と復活を経て、さらに全世界の異邦人へ向かって展開していく原点となります。その新たな宣教活動の原点としてのガリラヤに、弟子たちは招かれていくのです。



成人科

● 教会は特にイースター、ペンテコステ、クリスマス覚えて毎年祝っています。どの祝いも大切な信仰的な意味がありますが、クリスマスに比べるとイースターを祝う賛美歌の数が少ないと思いませんか？ 死の絶望を打ち破り、神はイエスを復活させられた。このイースターのメッセージは、行き詰まりと失望を経験する時代に、教会が語ることのできる希望と喜びのメッセージです。このイースターの喜びを、身近な人に、社会に、世界に証しする大切な時として、イースターの祝い方は今のままでよいでしょうか。さらに工夫することができるでしょうか？

● 墓に遺体がないことを見た女性たちは、すぐにイエスさまが復活したと信じたのではありませんでした。復活を告げる天使の語りかけに心を開き、弟子たちに伝えよと命じる言葉に従って、まず彼女たちは走り始めたのです。その行動の先に、復活のイエスさまとの出会いの経験があったのだと、マタイは告げます。復活は、簡単に信じられるようなものではなく、むしろ聖書の約束の言葉に従い、歩み始めたその人生のどこかで、復活のイエスさまの方から、出会ってくださる体験ではないでしょうか。それぞれに、復活のイエスさまとの出会いの経験を、分かち合ってみましょう。

行く手に立つイエス

聖書 マタイによる福音書28章1～15節

暗唱 聖句 イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われた
マタイ 28 : 9

1課

4月4日

イエスさまが十字架の上で亡くなったのは金曜日の午後3時頃でした。十字架刑に処せられた人は、死ぬと犯罪人が投げ込まれる穴に放り込まれるのです。しかしアリマタヤのヨセフというお金持ちの弟子が、イエスさまの遺体を引き取りたいとピラトに願い、ゆるされて、新しい墓にイエスさまを葬り、大きな石で入り口を塞ぎました。さらにイエスさまを信じる人々が遺体を盗み、復活したなどと言い出して、民衆を惑わさないようにと、墓には番兵が立てられたのです。

さて安息日が明けた日曜日の朝早く、マグダラのマリアともう一人のマリアが、イエスさまが葬られた墓に向かいます。しかし墓は大きな石で塞がれ、番兵もいるので、イエスさまのお体に近づくことができそうにありません。ところが思いもしない出来事が次々に起こります。突然の大きな地震。墓を塞いでいた大きな石は転がり、その上に天使が座ったのです。生まれて初めての出来事に、番兵は恐ろしさのあまり死人のようになってしまいました。だれも考えもしなかった神さまによる出来事が起こったのです。さらに天使は神さまからのメッセージを語ります。「あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなた



がたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる』と。二人のマリアは、死んでいたイエスさまが起き上がった瞬間を見たわけではないのに、あの方は復活したと告げる天使の言葉を信じて、恐れと喜びを感じつつ、弟子たちにこの知らせを伝えなければと、走り始めます。二人のマリアは、まだ復活のイエスさまを自分の目で見てはいないのです。ただ天使が告げたメッセージを信じて走ったのです。その二人の行く手に、復活のイエスさまは現れて「おはよう」と声をかけてくださいました。すでに復活を信じ始めた二人は、目の前の人を幽霊だとは思いません。その方の足を抱きしめ、喜びひれ伏したのです。二人のマリアには、目の前に立っているお方がだれなのか、よくわかっていたからです。

さっきまでいただいていた「どうしよう」という気持ちやこわかった思いは、イエスさまにお会いすることができて吹き飛んでしまいました。そして久しぶりに、うれしくて心から笑うことができたのです。

行く手に立つイエス

青少年科



聖書

マタイによる福音書28章1～15節

暗唱
聖句

イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われた
マタイ 28 : 9

1課

4月4日

聖書から…

次々と、信じられないような出来事に遭遇したマリアたちの心境を想像します。そもそも、彼女たちが愛してやまなかったイエスさまが死んでしまわれた、そのこと自体が、彼女たちにとっては信じられないような、信じたくないような出来事だったでしょう。その上さらに大きな地震とともに天使と遭遇し、お墓の中からイエスさまの遺体が無くなっているという現実を目の前にして、彼女たちは何を思っていたのでしょうか。

復活されたことを「自分の目で見てはいない」のに信じたマリアたちの心には、天使の言葉を通して、不思議な「希望」が浮かびあがってきていたのではないのでしょうか。信じられないような出来事が、次々と向こうからやってくる…、一体何が起きているのか、よくわからない…、だから恐ろしい。けれども、彼女たちはそこに留まりませんでした。なぜならそこには、彼女たちが思いを向けるイエスさまはおられなかったからです。彼女たちの心に生まれた「希望」は、かすかな願いのようなものであったかもしれません。それでも、まだ見ぬ「希望」に向かって走り出した彼女たち…その先に、イエスさまは立っておられたのです。

分かち合おう

- 新しい年度の始まりに、不安な気持ちになることがあるかもしれません。まだ見ぬ将来や未来に向かって歩き始めるとき、私たちはどうして不安を感じるのでしょうか。私たちはどうしたら、そのようななかでも希望をもって歩き出すことができるのでしょうか。今日の物語において、天使の声を聞いたとき、またイエスさまと出会ったときのマリアたちの心境を想像しながら、それぞれのこれまでの経験、いまの状況について分かち合ってみましょう。
- 人のお別れ（特に死別）において感じる悲しみを受け入れ、そこから立ち直っていくための行動を「グリーンワーク」といいます。マリアたちが「墓を見に行った」ことは、イエスさまの「死」という現実を受け入れるということだったかもしれません。しかし、私たちが経験する日々の出来事というのは、こちらから「行く」よりも、突然向こうから「やってくる」ことのほうが多いのではないのでしょうか。天使が現れたことも、遺体がなくなっていたことも、彼女たちにとっては予想もしない出来事でした。私たちの前にやってくる様々な現実を、受け入れるということの難しさについて考え、分かち合ってみましょう。

行く手に立つイエス

聖書 マタイによる福音書28章1～15節

暗唱聖句 イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われた
マタイ 28：9

1課

4月4日

聖書から…

誰かに「おはよう」と挨拶をされたらどんな気持ちになりますか？ ちょっとうれしくてほっとする気持ちになるかもしれませんね。聖書の「おはよう」はギリシア語でよく使われる挨拶「喜べ」「喜びがあるように」という意味のある言葉です。女の人たちの行く手に立っていたイエスさまは、「喜べ」「喜びがあるように」と言われたのです。

今日はイースター。私たちの罪のために十字架で死なれたイエス・キリストが復活されたことをお祝いする日です。いつもどんなときにも、私たちの行く手に立って「おはよう」と言ってくださるイエスさま。私たちを喜びで満たし励ましてくれる、なんとうれしいイエスさまの挨拶でしょう。

活動①

「挨拶をしよう」

- ①今年度初めの教会学校です。教会学校のリーダー、メンバーと、はじめましての挨拶を交わしましょう。
「おはよう！」「名前は〇〇です」「よろしくね！」きっとみんなうれしい気持ちになりますね。教会の中を歩いて、いろんな人たちと挨拶するのもいいですね。
- ②みんなの知っている挨拶、方言やいろんな国の挨拶には、どんな挨拶があるでし

ょうか？ 教えてもらったり調べてみたりして、いろんな挨拶を覚えてみましょう。言葉だけじゃなく、手話でももちろん挨拶ができますね。

活動②

ワークシート

「おはようイースターエッグ」

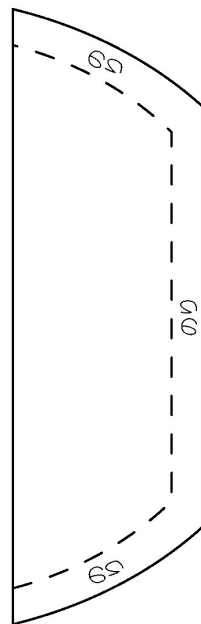
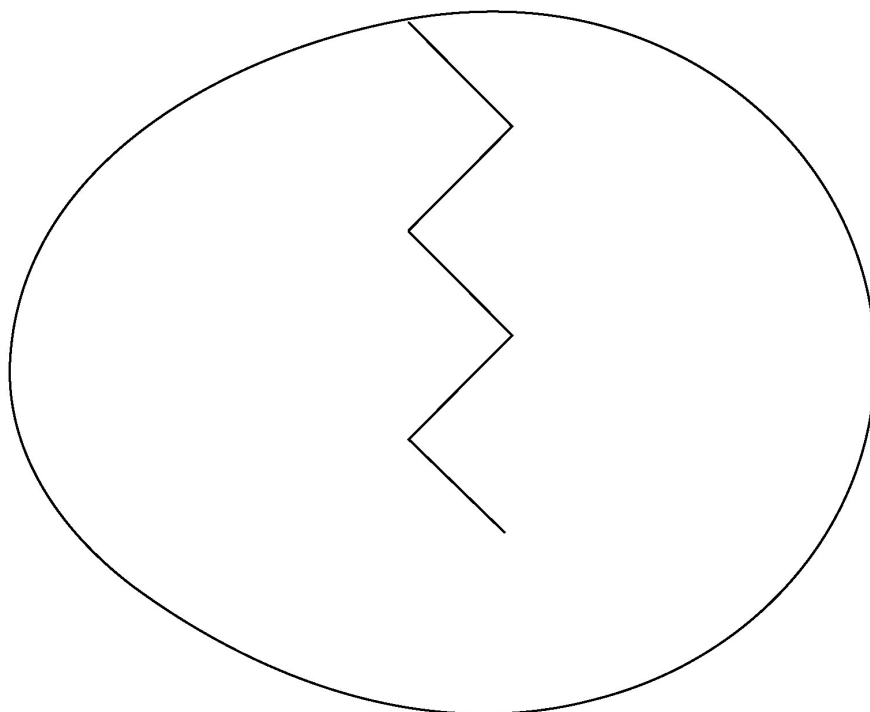
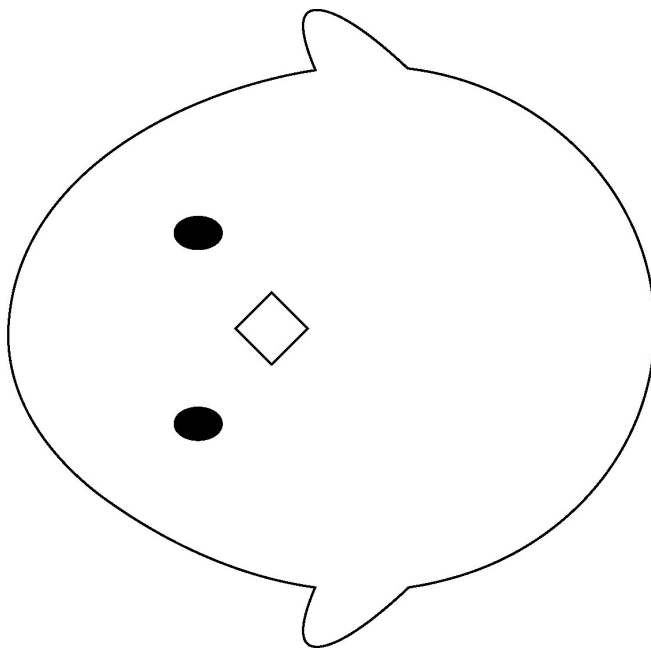
●準備●ワークシート人数分、色えんぴつ、はさみ、のり

- ①ひよこの下部分に、イエスさまが言われた「おはよう」の挨拶と暗唱聖句のマタイ 28 章 9 節を書きましょう。小さいメンバーには、リーダーが文字を書き入れたワークシートを準備しておくといいですね。
- ②たまごとひよこを好きな色で塗ったら、はさみで切ります。たまごの割れ目を端まで切り落とさないように注意して切りましょう。
- ③ひよこポケットの「のり」部分にのりをつけ、たまごの裏側下部分に貼りつけます。
- ④ひよこポケットにひよこを入れたら、暗唱聖句のおはようイースターエッグのでき上がり。時間に余裕があれば、もう一枚作って、だれかにプレゼントしてもいいですね。



1課

4月4日



十一人の弟子たち

つい読み過ぎてしまいがちですが、「十一人の弟子たちは」とマタイがここに書かなければならなかったのは、仲間だったイスカリオテのユダが、主イエスを裏切ったことを悔い「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」（マタイ 27：4）と、自分で自分の命を絶ってしまったからでした。しかし残りの十一人も、主イエスが捕らえられた夜、皆が主を見捨てて逃げてしまったのです。その直前、主イエスは「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく」（26：31）と弟子たちの裏切りを予告すると同時に「しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」（26：32）と、弟子たちを救済再会することはすでに告げられていたのです。

ガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った

「ガリラヤ」は、主イエスの宣教活動が始められた土地であり、ペトロをはじめとする数名の弟子たちの故郷です。かつてこのガリラヤで弟子たちは主イエスと出会い、今までの仕事をやめ、新しい希望を抱きつつ、主イエスの後についていきました。しかしやがて弟子たちが抱いた希望は破れ、自らの罪と限界を知った彼らは、再度ガリラヤにおいて、復活のイエスと出会い、新たな使命を受けることとなります。

マタイ福音書で弟子たちは、山の上におい

て主イエスからの教えを受け（マタイ 5 章～）、山の上において主イエスの姿が変わる体験をし、そして山の上で復活の主イエスから、新しい使命を受ける大切な経験をしています。思えば旧約聖書の出エジプト記において、シナイ山頂でモーセは主と出会い、また十戒を授かったのも山の上でした。山の上で主イエスと出会う出来事は、旧約聖書にある、神と人との出会いのイメージと不思議に重なっています。

疑う者もいた

弟子たちが主イエスの前に「ひれ伏した」と記されるのはここが初めてです。「礼拝した」と翻訳する聖書もあります（新改訳）。ユダヤ人が神以外のものに「ひれ伏す」「礼拝する」ことは偶像礼拝を意味し、簡単には記し得ない表現です。ですから主イエスに対してこの言葉が使われていることは、驚くべきことですし、特別な意味が込められています。一方で弟子たちのなかには、「疑う者もいた」と書かれています。「復活」とは人間の経験、理性を越えた神の出来事です。逆を言えば、疑う者がいない出来事は、人間が説明して納得できる小さな出来事と言えるでしょう。

神が引き起こした出来事を、人間は説明などできず、ただ信じるのか、疑うのか、どちらかしかできません。むしろ、疑う者がいたからこそ、「復活」は、人間による作り話ではなく、神による出来事であるとさえ言えるのです。むやみやたらに信じるのではなく、

疑いつつも信じる。それが神の出来事の前に立つ人間のあり様ではないでしょうか。

天と地の一切の権能を授かっている

復活のイエスが弟子たちを伝道へと派遣する根拠は「天と地の一切の権能を授かった」ことにありました。それは4章8～9節で悪魔が約束したような力による支配ではなく、受難と死を通して、この世に仕えた方のもつ権能なのです。

すべての民をわたしの弟子にしなさい

「すべての民を弟子にしなさい」という目的のために、「行って」「父と子と聖霊の名によってバプテスマを受け」「教えなさい」と主イエスは弟子たちに命じました。かつて主イエスを見捨てて逃げただけでなく、そもそも異邦人を救うことなど考えたことさえなかつ

準備のための聖書日課			
5日	㊦	マタイ4:8～11	ただ主に仕えよ
6日	㊧	マタイ4:18～22	ガリラヤ湖のほとりで
7日	㊨	マタイ26:31～35	主につまずく弟子たち
8日	㊩	マタイ27:3～10	主イエスを裏切ったユダ
9日	㊪	ヨハネ20:24～29	信じない者ではなく
10日	㊫	使徒言行録1:6～11	地の果てに至るまで

たはずの弟子たちに、主は驚くべきことを命じたのです。果たして、11人の弟子たちにそのような働きが可能なのでしょうか？主イエスは約束します「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と。この約束があるからこそ、弟子たちそしてすべての教会は、世の終わりに至るまでこの主の教えに喜んで生きていけるのです。



成人科

●復活のイエスさまと出会った女性たちは、恐れながらも大いに喜びました。イエスさまを見捨てて逃げ去った弟子たちと、復活のイエスさまとの出会いにおいては「疑う者もいた」という姿とは対照的です。かつてイエスさまを見捨てて逃げ去り、今もなお「疑う者」として、複雑な気持ちで山の上にいる弟子たちの姿と、私たちの姿は重なるところがあるのでしょうか？復活を信じることの「喜び」と「とまどい」について、語り合ってみましょう。

●弟子たちは、山の上で復活のイエスさまから「すべての民を弟子にしなさい」との使命を受けます。その使命を告げられた弟子たちとは、「疑う者」であり「逃げ去った」人々です。また「すべての民」のことに関心もない人々です。その弟子失格のような彼らに、あえて「弟子にしなさい」という使命が託されたことは驚きです。その意味でこの使命は、先輩の「弟子」が後輩の「弟子」を生み出し訓練するという意味での、弟子訓練のイメージとはだいぶ違う気がします。「弟子にしなさい」という使命について語り合ってみましょう。

世の終わりまで、主と共に

聖書

マタイによる福音書28章16～20節

暗唱
聖句

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。
マタイ 28 : 20

2課

4月11日

イエスさまの11人の弟子たちは、故郷ガリラヤにある山の頂上を目指して歩いています。そこに弟子のユダの姿はありません。イエスさまを裏切ってしまったユダは、自分の罪の重さに耐えかねて、自分で自分の命を絶っていたからです。しかし、実はほかの弟子たちも、全員がイエスさまを見捨てて逃げてしまいました。その間にイエスさまは十字架につけられて死なれ、墓に葬られたのです。そのような弟子たちが、なぜか今、かつてイエスさまと過ごしたガリラヤに舞い戻り、山の頂上を目指して登っています。その理由は、そこでイエスさまに会えるからでした。女性たちは、イエスさまが葬られて三日目の朝、葬られた墓に出かけたところ、復活したイエスさまと出会ったと言っています。そして「あの方は生きておられます。『兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる』」と告げたのです。

さて11人の弟子たちは、この女性たちの言葉を信じて山を登っているのです。いや、信じているから登っているのか、実は、嘘か真か確かめたいから登っているのか、本当のところはわかりません。それぞれが違う気持ちのまま、黙々と山を登っています。

するとなんということか、弟子たちから少し離れたところに、イエスさまが立っておられたのです。ある弟子たちは驚きの声



をあげ、恐れつつイエスさまの前にひれ伏しました。しかしある弟子は、「こんなことがあるのだろうか」と疑いつつ、イエスさまを見つめています。

イエスさまはそんな弟子たちに近づいてきて言われます。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」と。ある弟子は聞きながら心の中で思いました。「こんな大それたことを言う方を、わたしは他に知らない」。さらにイエスさまは言われます「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」と。「え、すべての民。まさか異邦人も含めるのか?」と、ある弟子は心の中で驚きました。さらにイエスさまは言われます。「彼らに父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、あなたがたに命じておいたすべてのことを守るように教えなさい」。そう言われて、弟子たちは悲しみつつ「かつて主から逃げ出し、主から離れてしまうような私たちに、そんなことができるのだろうか?」と思います。そんな弟子たちにイエスさまは最後に約束してくださいます。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と。

世の終わりまで、主と共に

聖書から…

イエスさまに会うためにガリラヤの山に登った弟子たち…本当であれば12人で歩いていたはずのその道を、イスカリオテのユダがない11人で歩くそのなかで、彼らはユダの裏切りを思い出すだけでなく、自分自身がイエスさまを裏切り見捨てて逃げたことをも思い出していたことでしょうか。イエスさまと再会した弟子たちは、墓の前でのマリアたちのように自分からイエスさまに近づくことはできませんでした。しかし、イエスさまの方から彼らに「近寄って来て」（18節）語りかけてくださったのです。11人というユダを思い出させる数字、またご自身から近寄って来てくださったイエスさまの様子から、ここでは弟子たちの間にあった疑いや恐れのおも、大切に許容されているように感じられます。

大切な仲間に裏切られ、自分自身も逃げ出してしまい、そうして愛する先生を失った悲しみに打ちひしがれていた彼らには、未来に向かって再び歩み出す、希望も自信も無かったです。そんな彼らに、復活のイエスさまは近寄り、「天と地の一切の権能を授かっている」（18節）ご自身が「世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」（20節）と言われたのです。彼らにとって、これ以上の慰めと励ましがあったのでしょうか。

分かち合おう

- イエスさまは、「わたしは世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」（20節）という言葉で弟子たちに語られました。しかしその後、イエスさまは天に昇られ、彼らを離れて行かれました。「神さま・イエスさまはわたしたちと共におられる」（ヘブライ語では「インマヌエル」といい、イエスさまの呼び名でもあります。参考：マタイ1：23）とはどういうことでしょうか。イエスさまが弟子たちに語られた18～20節の言葉から（特に18、19節は教会においていわゆる「大宣教命令」と呼ばれ大切にされてきました）、また、イエスさまと弟子たちが再び出会った今日の聖書の物語から、そのことを考えてみましょう。
- 過去に経験した出来事が理由で、いま、向き合うことが難しいと感じている人や出来事はあるのでしょうか。11人の弟子たちにとっては、お互いと顔を合わせることも、イエスさまのところへ向かって行くことも、彼ら自身に過去の経験を思い出させる苦しいことであったと思います。と同時に彼らには、彼ら同士でしか分かち合うことのできない思いや心境もあっただろうと想像します。向き合うことが難しいことがらに向かって行く道のりにおいて、一緒に歩くことができる仲間について考え、自由に話し合ってみましょう。

世の終わりまで、主が共に

聖書

マタイによる福音書28章16～20節

暗唱
聖句

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。
マタイ 28：20

2課

4月11日

聖書から…

大好きな人に裏切られたり疑われたりしたとき、どう思うでしょう。とっても悲しくて、その人と話すこともつらく思うかもしれません。「もう信じない」「一緒にいたくない」そうやってしまうかもしれませんね。

イエスさまが十字架につけられたときに見捨てて逃げた弟子たち。そんな弟子たちに、イエスさまは「わたしは世の終わりまで、あなたがたと共にいる」と言われたのです。裏切ってしまったのに。逃げてしまったのに。今も疑いながらイエスさまのところに向かったのに。

イエスさまはそんな私たちの弱いところもすべて受け入れて、それでも「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と言ってくださるのです。いつもどんなときでも、主が共にいてくださる。なんて力強い、なんて励まされるイエスさまからの約束なのでしょう。

活動①

「一緒にいるから大丈夫」

●準備●荷造りテープ、ガムテープなど

①いろいろな道を歩いてみましょう。クラスを行っている場所に、荷造りテープをはったり、しるしをつけて歩くコースを作ります（クラスの状況やメンバーに充分配慮をしてください）。道は、まっすぐで歩きやすいものだけではありません。

ときに前に進むことが困難なこともあるでしょう。だけど、誰かが一緒に歩いてくれることで、安心して歩けます。リーダーは、危なくないよう安心できるように、声をかけたり両手を引いたりして、メンバーを支えて歩きましょう。

②平均台やロープなど細いところを両手で支えられて歩くのも楽しいですね。ちょっと離れている台から台へのジャンプもおもしろいです。

* イエスさまは、「いつも共にいる」と言ってくださいました。イエスさまと一緒にいてくださる約束は心強いですね。

活動②

ワークシート

「あなたがたと共に」

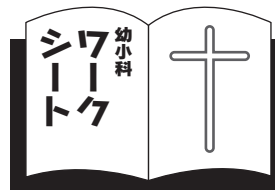
●準備●ワークシート人数分、えんぴつ、消しゴム、色えんぴつ

①今週の聖書を読んで、暗唱聖句を確認します。暗唱聖句「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる（マタイ 28：20）」

②ワークシートには、たくさんの文字の中に暗唱聖句が2回隠れています。暗唱聖句を言いながらたどっていき、暗唱聖句の文字だけ色えんぴつで塗りつぶしていきましょう。何かの言葉が浮かび上がってきます。

* どんな言葉が浮かび上がってきましたか？ 意味をリーダーに聞いてみてもいいですね。

11イコ△△△：△△△



を	む	コ	を	フ	三	す	ろ	又	0	ぎ	ね	む	か
み	ウ	3	を	ネ	ゆ	ぬ	力	ケ	2	そ	ら	づ	を
せん	ふ	ん	て	マ	タ	イ	2	8	:	て	ほ	6	
ふ	ノ	コ	ぎ	せ	ペ	ツ	ハ	サ	て	ふ	ぼ	ぬ	ふ
そ	5	み	ち	ヲ	と	と	も	に	い	ウ	ち	ね	才
ウ	ゆ	す	カ	ヤ	テ	シ	せ	び	才	る	ヤ	シ	ほ
や	へ	、	て	そ	じ	た	ほ	ね	ね	。	か	へ	て
ろ	か	で	を	ソ	す	が	き	メ	ゆ	ネ	そ	ほ	せ
づ	ア	ま	い	つ	も	た	ゆ	く	シ	ク	4	9	ネ
サ	て	り	う	を	ケ	な	口	ヤ	二	へ	ね	テ	ん
セ	5	わ	ぢ	せ	か	あ	ウ	そ	づ	ほ	メ	フ	ヲ
す	を	二	め	9	ほ	さ	ぬ	ホ	又	3	せ	ヤ	ん
か	ダ	む	4	ち	2	0	ん	ヨ	て	お	ル	ネ	そ
む	さ	づ	ぬ	ぼ	:	ち	わ	才	の	き	け	才	9
ノ	ヤ	7	せ	へ	8	を	ん	た	か	ト	又	こ	7
カ	ぬ	ヤ	み	ウ	2	工	よ	け	し	コ	5	そ	さ
ソ	カ	ノ	ね	カ	イ	え	ヤ	そ	ヒ	は	ヨ	9	す
め	ち	に	い	ね	を	カ	き	ほ	フ	コ	れ	へ	5
ネ	と	す	て	る	て	タ	そ	ち	れ	7	ず	ぬ	け
ぬ	と	て	ず	う	マ	7	ふ	ヤ	め	ぢ	せ	ほ	ム
ク	た	ヤ	れ	。	せ	ら	ひ	ダ	そ	ゆ	カ	ず	ヤ
ア	が	そ	ツ	3	み	た	な	あ	ち	三	ふ	モ	だ
こ	7	6	を	フ	ゆ	す	ヨ	て	ふ	つ	み	3	ぴ
へ	4	え	ウ	む	9	め	カ	ち	ウ	5	い	さ	ね
ヤ	ア	じ	ぼ	て	ほ	シ	ま	じ	く	二	、	ほ	を
は	ゆ	こ	ぬ	せ	づ	ん	り	ク	ぼ	え	で	7	か
ふ	し	よ	の	お	わ	二	み	さ	7	ぼ	二	ず	こ
か	そ	た	へ	7	ほ	6	だ	き	ず	れ	き	こ	ん
ア	ず	す	わ	ね	み	モ	シ	ほ	す	じ	づ	5	カ
う	か	ぬ	ね	ぐ	3	ひ	ヤ	ひ	め	三	も	ゆ	う

わ た し は よ い つ の お わ り ま で 、
 い つ も あ な た が た と と も に い る 。

マ タ イ 2 8 : 2 0

幸いである

聖書

マタイによる福音書5章1～12節

暗唱
聖句

心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
マタイ5：3

3課

4月18日

「山上の説教」について

マタイ福音書は、主イエスから弟子たちに、大切な教えや使命が告げられたのは「山上」であったと記します（28：16、17：1等）。またモーセを通して律法が与えられたのも山の上でした。主イエスはこの「山上の説教」において、その律法の決定的な解釈を、律法学者やファリサイ派の解釈と対立させつつ、語られます。また「山上の説教」に記されている教えは、ルカ福音書にもいくつかの個所に記されていることから、実際は様々な状況のなかで語られた主イエスの教えを、著者マタイがここに意図をもって編集したと考えられています。1節では、主がご自分を求めて集まってきた群衆をご覧になり、この説教を語り始めたという状況説明がありますが、一方で11節以下の内容は、明らかに主イエスのために迫害されることになる人々に向けて語られています。ですから様々なところで教えられた主イエスの教えから、特に弟子たちへの教えとして、マタイがここにまとめたものと考えたいと思います。

幸いである

「幸いである」と8回（11節も含めると9回）もの宣言が入念に配列されている教えは、聖書の中でここにしかない大変印象的な「至福の教え」です。原文のギリシア語の語順では8つ（9つ）のすべてが、「マカリオイ（幸い）」という宣言から始まり、文学的によく整っている詩文的な宣言です。さて聖書の信仰にお

ける「幸い」は、たとえば詩編33編12節に「いかに幸いなことか／主を神とする国／主が嗣業として選ばれた民は」とあるように、主との正しい関係における「幸い」といえます。そうであるからこそ、主イエスが「心の貧しい人々」「悲しむ人々」のような、いわゆるこの世の繁栄や成功を「幸い」と考える価値観からは出てこない「幸い」を告げるのです。その意味で、この「幸い」の教えを「このように生きるなら幸いになる」という道徳として読むのではなく、私たちが信じる主とはどのようなお方であり、今、どのような人々と共にいてくださるのかという、神と人との関係をイメージして聞き取りたいと思います。

主イエスが告げる祝福

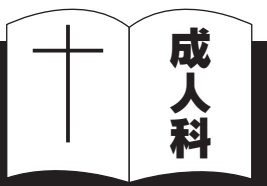
この「幸い」の教えを通して、主イエスが宣言される祝福とは「天の国」^{なごさ}「慰め」^{なぐさ}「地を受け継ぐ」^{あわれ}「義に満たされる」^{あわれ}「憐み」^{あわれ}「神を見る」^{あわれ}「神の子と呼ばれる」^{あわれ}「天における報い」^{あわれ}です。一方「願い事がかなう」「豊かになる」「病が癒される」^{いや}「人間関係がよくなる」のような目の前の祝福を主イエスは「幸い」としてここで語ってはいません。主イエスはたくさんの病気の人々を癒され、それゆえに群衆は主イエスについてきたのですが、この「至福の教え」を通して聞こえてくるのは、主イエスに従う人々が求めるべきもの、求めるべき祝福とは何なのかという問いかけではないでしょうか？

復活の主が弟子たちに命じたこと

マタイ福音書の最後は、復活の主が弟子たちに「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」(28:20)と告げて終わります。その弟子たちが主イエスから受けた教えの中心には、当然この「山上の説教」があります。そういう意味で、この「山上の説教」や「至福の教え」のような、天の国の価値観や幸いをマタイがここに記しているのは、そもそも「すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」(28:19)と、復活の主に命じられた弟子たち、すなわち教会が、主イエスに命じられたとおり、後の世代に伝えようとして、ここに「山上の説教」を記したと理解できます。

準備のための聖書日課			
12日	㊦	ルカ6:20~26	主イエスの約束
13日	㊧	詩編33:12~22	いかに幸いなことか
14日	㊨	イザヤ30:18~19	なんと幸いなことか
15日	㊩	詩編96:10~13	地よ、喜び躍れ
16日	㊪	フィリピ4:4~7	主において喜べ
17日	㊫	マタイ4:23~25	主イエスに従う人々

そうであるならば、私たちもこの伝えられ、教えられた主イエスの言葉に生き、さらに次の世代に向けて、この天の国の価値観に生きることを語り続けることは、主イエスに従う教会の大切な使命ではないでしょうか？



成人科

- イエスさまの十字架と復活以降、イエスをキリストと信じる人々がユダ

ヤから異邦人世界へと広がっていくなかで、地上を生きたイエスさまの姿とその教えを知らない人々に、それを語り伝えていく必要が生じて福音書は記されたと思われます。その意図からすれば「8つの幸い」も、イエスさまが時々語られたことを、伝えやすく整理したものかもしれません。さて、私たちも、初めて聖書を読む方々に、イエスさまのことを伝える難しさを感じることがあると思います。もし、今日教会に初めてこられた方に、

あなたならどのようにイエスさまのことを語り伝えるでしょうか？

- 「8つの幸い」は、信仰生活の中で何度も触れてきた教えだと思います。初めて触れた時に率直に感じた気持ちや、今に至る人生の中で、この「8つの幸い」の教えに何度も立ち戻るたびに、深まっていった「幸い」への理解や、気づきがあれば語り合しましょう。また、この「8つの幸い」の教える「幸い」を、実感させられた体験の証しがあれば分かち合ってみましょう。

幸いである

聖書 マタイによる福音書5章1～12節

暗唱聖句 心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
マタイ5：3

3課

4月18日

復活のイエスさまから「父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、あなたがたに命じておいたすべてのことを守るように教えなさい」と命じられた弟子たちは、イエスさまが話された様々な教えを、思い出しては語り合い、忘れないように書き留めました。イエスさまを信じる新しい仲間が増えるたびに、イエスさまの教えを伝え続けてきました。しかし時が過ぎ、イエスさまから直接教えを聞いた人々が少なくなってきたので、次の世代の人々にもその教えを伝えるために、イエスさまのことやその教えを、一つの物語にまとめることにしたのです。

イエスさまから直接お話しを聞いた弟子たちの証言をもとに、書き留められた教えの数々は、復活のイエスさまが命じられたとおりに、新しく仲間になった人に伝えやすいように、まず「8つの幸い」として整えて記されました。すでに自分たちが「幸い」であると、気づいていなかった新しい仲間たちに、最初にイエスさまが教えてくださいました天の国の「幸い」とはどういうものかを、伝えることが大切だったからです。

でも、ペトロたち最初の弟子たちは、イエスさまから直接聞いた、「心の貧しい人は幸いである」「悲しむ人は幸いである」という教えを思い出すたびに「あのとき、自分たちはイエスさまの言われていることが、何もわかっていなかったな」と振り返るのです。なぜなら、不思議な力で病の人



を癒し、悪霊を追い出すイエスさまのその力に期待してたくさんの方が集まりました。そして弟子たちも得意になって、一緒に山の上に登り、イエスさまから教えを聞いていたけれど、あの時はだれも「心の貧しい人」や「悲しむ人」が幸いなんて、本当にはわかっていなかったからです。ペトロは思い起こします。本当の意味でそれがわかったのは、やがて自分たちが、イエスさまを見捨てて逃げてしまった後だったと。こんな卑怯者ひきょうものの自分自身に心底失望して初めて、あの時イエスさまが言われた「心の貧しい人」や「悲しむ人」とは、実は自分たちのことだったと気が付きました。そして、こんな私たちと、復活したイエスさまは出会ってくださり、いつまでもあなた方と一緒にいると言ってくくださったのです。これこそ「天の国はあなたがたのものだ」という「幸い」を知ったペトロたちは、この喜びの教えを、次の世代のために、書き残して伝えないではいられなかったのです。

幸いである

聖書

マタイによる福音書5章1～12節

暗唱
聖句

心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
マタイ5：3

青少年科



3課

4月18日

聖書から…

ガリラヤの山で復活のイエスさまと再会し、その後天に昇られるイエスさまを見送った弟子たちは、イエスさまがかつて彼らに「命じておいた」（28：20）と言われたことを振り返り、それらを伝えるようになりました。何かを人に伝えよう、教えようとするなかで、自分自身のなかでもそのことが深く理解されていくということは、私たちも経験したことがあるかもしれません。「あなたがたは幸いである」と言われたイエスさまの言葉、神さまからのよい知らせ「福音」の言葉の数々を誰かに語ろうとして出ていったとき、弟子たちはそれらの言葉の一つひとつが、自分自身に語られた言葉であったことに気づかされていったのではないのでしょうか。イエスさまが、苦しみや涙のなかにある者、ほかでもないこの私と「共におられる」ことがわかったからです。十字架と死という悲惨な光景を目の当たりにし、自分たちの弱さに絶望しつつも、イエスさまの復活という出来事を通して、もう一度新しく生きることを始めた弟子たちの心に、イエスさまが語られた「幸いである」という言葉は、以前より実感をともなって響いていたことでしょう。私たちもいま、それぞれの置かれた状況のただ中であって、この言葉を聴いていきたいと思います。

分かち合おう

- 苦しみのただ中にある人（私／あなた）にとって、「あなたがたは幸いである」という言葉はどのように聞こえるのでしょうか。どうしてそんなことが言えるのだろうかと驚きを覚えたり、そんな風には思えないと嫌悪感を抱くのかもかもしれません。しかしそれでも語られ、宣べ伝えられ続けてきたこの言葉を、どのように受けとめるのでしょうか。また、苦しみのただ中にある人に対して、この言葉を、どのように伝えることができるのでしょうか。
- 「幸い」という日本語は、古語では「さきはひ」といい、「さき」は花が咲くこと、「はひ」は地を這うことを表し、ものごとが地を這うように広がっていく様子を表しているといえます。それは、一瞬にしてすべてが変わってしまうような、劇的な出来事ではないのかもしれませんが。空から降り注ぐ光を葉が吸収し、雨を根が吸い上げる…そのような毎日を繰り返すなかで季節はめぐり、時期が来て、つぼみは花を咲かせます。イエスさまが言われた「幸い」という言葉について思うことを、自由に分かち合いましょ（「聖書の学び」も参考にしてみてください）。

幸いである

聖書

マタイによる福音書5章1～12節

暗唱
聖句

心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
マタイ5：3

3課

4月18日

聖書から…

うれしいとき、楽しいとき、誰かにやさしくしたとき、たくさんほめられたとき…そんなときに「幸いである」と言われたら、きっと心から喜んでありがたいと思えるでしょう。

でも、悲しいとき、さみしいとき、失敗してしまったとき、ひとりぼっちのとき…「幸いである」と言われたらどうでしょう。わたしなんて…そんなことない…と、まっすぐ素直に喜べないかもしれません。

イエスさまは、なんとそんなときにも「幸いである」と言ってくださっています。私たちにはそうは思えないかもしれない。でも、イエスさまは「幸いである」とはっきりと宣言してくださるのです。イエスさまとの関係を大切に歩むそのときに、そのままの一人ひとりの存在を「幸いである」と祝福してくださるイエスさま。とっても励まされ勇気づけられる、イエスさまの大切な教えですね。

活動①

「さいわいであるのカード探し」

●準備●人数分の「さいわいである」と書かれたカード、色えんぴつ

- ①部屋のいろいろなところに「さいわいである」カードをはって、みんなで探しましょう。
- ②全員見つけられたら、カードをそれぞれ

が持って「〇〇（名前）はさいわいである」とみんなで言います。リーダーに言ってもらうのもいいでしょう。一人ひとりがイエスさまに祝福されていることを、みんなで喜びましょう。



- ③カードに自分の名前を書いて、色を塗って飾れるようにしてもいいですね。

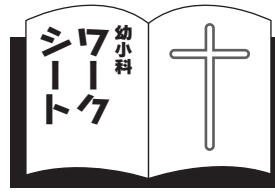
活動②

ワークシート

「山上の説教を覚えよう」

●準備●ワークシートのコピー、はさみ

- ①今日の聖書をよく読みます。
- ②ワークシートを切ってカードにします。厚紙などに貼って固めにしておくと遊びやすいです。
- ③「なかま合わせ（カード絵合わせ）ゲーム」の要領でめくって遊びます。どのカードの組み合わせが正解か、よく暗唱聖句を読んで覚えてみましょう！文字の下にあるマークを見ても合わせられます。聖句かるたのようにして、リーダーが前半（上の句）を読んで、メンバーがそれに続くカード（下の句）をとって遊んでも楽しめます。
- ④自分で持って帰れるように、一人ひと組ずつ作ってもいいですね。



義に飢え渴く
人々は
幸いである

その人たちは
満たされる

義のために
迫害される人々は
幸いである

天の国は
その人たちの
ものである

柔和な人々は
幸いである

その人たちは
地を受け継ぐ

平和を実現する
人々は
幸いである

その人たちは
神の子と呼ばれる

悲しむ人々は
幸いである

その人たちは
慰められる

心の清い人々は
幸いである

その人たちは
神を見る

心のまじしい
人々は
幸いである

天の国は
その人たちの
ものである

憐れみ深い
人々は
幸いである

その人たちは
憐れみを受ける

共同体の課題について

18章は、主イエスを信じる弟子たち共同体の課題について語られている個所といえます。主イエスは弟子たちの中でだれが一番偉いのかと問う彼らには「自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国で一番偉いのだ」（18：4）と教え、また主イエスを信じる一人の人さえ踏か^{つまず}せてはいけないことと、迷わない九十九匹を置いてさえ、一匹の迷い出た羊を探す人の譬えを通して、主イエスを信じる共同体の価値観を教えられました。その話の流れの中で、共同体にとって一番難しい課題である、罪と和解の問題がここで語られていきます。

教会に申し出なさい

4つの福音書のなかで「教会」という言葉はマタイにしかありません（16：18、18：17）。また弟子たちの共同体のことを「教会」と言い表すようになるのは後のことです。ゆえにこの部分はこれを記した著者マタイとその共同体の状況が背景にあるのかもしれませんが。そういう意味で、弟子たちだけに語られたイエスさまの教えというより、すべての時代の主を信じる信仰の共同体に向けて語られている教えと理解したいと思います。

異邦人が徴税人と同様に 見なしなさい

キリスト者の共同体の対人関係における訓

戒について、主イエスはいくつかの段階を教えています。最初は当事者同士で話し合うこと。それで解決しなければ、ほかに一人か二人の証人を一緒に連れていくこと。それでもだめなら、教会に申し入れ、その段階で解決しなければ、「異邦人が徴税人と同様に見なしなさい」（18：17）と言われていました。これは教会からの除名を意味すると理解されてきました。しかしそうであるとしても、この丁寧なプロセス自体が「言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる」（18：15）とあるように、また迷い出た羊を探す人の譬えを通して語られていたように、共同体から失われようとしている一人の人をどこまでも捜し求めるプロセスであることは大切なことです。

天上とつながる共同体

ここで主イエスは、16章19節でペトロに言われたのと同じことを、キリスト者の共同体に向かって語られます。「つなぐ」とこと、「解く」とことは、「許される」とこと、「許されない」とことを指すラビの専門用語です（「つなぐ」は禁止する、「解く」は許可する）。ある人がしてはならない罪を行ったことに対し、教会がそれをうやむやにせず、対峙しようとするのは、教会は人間中心のサークルではなく、天上につながる共同体であると信じるからであり、そして同時に、その罪を犯した人をさえゆるし、和解して共に生きることが実現するの、教会が天上における、神の愛と赦しにつながる共同体だからです。

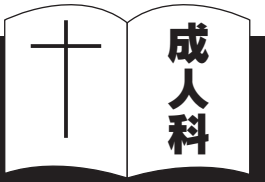
二人または三人がわたしの名によって

二人または三人がイエス・キリストの名によって集まっているところに、主イエスはいてくださる。この約束に励まされた小さな群れは数多いことでしょう。また「あなたがたのうち二人が地上で心一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる」という約束も、小さな群れに、祈る力と励ましを与えてくれます。

教会の人間関係において、さまざまな問題を抱えることがあるとしても、この主イエスの約束があるからこそ、関係の回復をあきらめずに、共に祈りつづけることができます。主イエスを信じる私たちを、つないでいるの

準備のための聖書日課			
19日	㊦	ダニエル9:1~9	憐れみと赦しは主のもの
20日	㊧	マタイ18:1~5	ここに天の国の入り口がある
21日	㊨	マタイ18:10~14	天の父の御心を求めて
22日	㊩	マタイ16:13~20	つなぐことと解くこと
23日	㊪	ヨハネ20:19~23	赦すことと赦されないこと
24日	㊫	フィリピ2:1~11	心を合わせ、思いをひとつにして

は、私たちの配慮とか人間関係構築のための努力をさえ超えた、私たちの間にいてくださる主イエスご自身であることこそ、教会の希望なのです。



成人科

●もし教会の人間関係のなかで、言葉や行いによって、互いに傷つけたり

傷つけられたりということが起こってしまった時、マタイ福音書が教えるような、当事者同士での話し合いや、第三者に入ってもらい話し合い、そして教会全体で語り合うというプロセスを持ったことがあるでしょうか？このようなプロセスを持つことが難しいとすれば、その理由として考えられることはなんでしょうか？

●このプロセスは、いわゆる紛争解決のためのマニュアルではありません。なぜなら、むしろ当事者の間に入る人が、増え

れば増えるほど、対立や混乱が広がることも考えられるからです。にもかかわらず、マタイ福音書がこのようなプロセスを教えているのは、「あなたがたのうち二人が地上で心一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(19節、20節)とされている、主イエスのおられる教会と、心一つにして祈る、祈りの力への信頼ゆえではないでしょうか？和解と祈りに関わる体験、証しがあれば、分かち合ってみましょう。

わたしもその中にいる

聖書

マタイによる福音書18章15～20節

暗唱
聖句

二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。マタイ 18 : 20

4課

4月25日

イエスさまに従ってきた弟子たちは、お互いにいつも仲良くしていたわけではないのです。むしろお互いにだれが一番偉いかと、心の中で競い合うこともありました。ですからお互いの間でぶつかりあうこともあったでしょう。弟子たちは人数の少ない仲間ですから、協力し合あわなければバラバラになってしまいます。お互いの人間関係はとても大切です。

さてあるときイエスさまは、弟子たちに教えました。誰かがあなたに罪を犯したなら、最初は二人だけで話をするようにと。これは難しいことだと弟子たちは思ったでしょう。でも勇気をもってお互いが語り合うなら、素直に自分のいけなかったことを認めて、仲直りできるかもしれません。でも話してみたけれども、自分の間違いを認めないこともあります。その時には仲間を一人か二人一緒に連れて行って、何が悪かったのか証言してもらいなさいと、イエスさまは言われます。それでも聞き入れない時には仲間みんなで語りあうこと。そして仲間みんなの忠告さえも聞き入れられないほど、心がかたくなになってしまっているのなら、イエスさまの弟子として一緒に歩むのは難しいから、異邦人や徴税人のようにその人の自由にさせればいい。でもその人がまた、イエスさまに従う仲間として戻ってくるようにと、心をあわせて祈りなさいと、イエスさまは教えられました。

イエスさまの弟子たちは、自分の願いや



力ではなく、天の父である神さまが集め、つないでくださった仲間たち。だから心をあわせて祈るなら、たとえ人数がすくなくとも、神さまはきっとかなえてくださると仲間から離れてしまったあの人のことも、あきらめないで祈り続けるなら、きっとかなえられる。そしてイエスさまは、二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいると教えてくださいました。イエスさまが十字架で死なれ、三日目に復活し、天に昇られて、目には見えないお姿として、弟子たちの間にいてくださるようになるのは、まさにこの約束の実現でもありました。やがてそのような弟子たちの集まりのことを「教会」と呼ぶようになります。教会とはたとえ人数が少なくても、イエスさまの名によって集まるようにと、神さまがつないでくださった集まり。この集まりに招かれ、つながれているなら、ちゃんと天においてもつながれているのです。

わたしもその中にいる



聖書

マタイによる福音書18章15～20節

暗唱
聖句

二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。マタイ 18：20

聖書から…

イエスさまを信じる弟子たちの集まりが、少しずつ広がっていき、違う考え方や感覚をもった新しい人たちがそこに加わっていく中で、一緒にいることの難しさも生まれてきたのだらうと想像します。私たち、教会においてもそうかもしれません。違いをもった者同士と一緒に生きようとする時、もし間違いを犯してそれを指摘されたならば、素直に聞き入れること…それぞれが大切にしていることに違いがあるからこそ、うまくいかないこともありますし、そこで大切になってくるのは、お互いの話に耳を傾けることです。それは、「互いに愛し合いなさい」と命じられたイエスさまの弟子として、私たちが一緒に生きていく上で大切なことなのです。さらにイエスさまは、そうして一緒に生きていくことの難しさに対する理解をもって、決して無理をしないように、聞き入れない人、イエスさまに従う道を一緒に歩くことが難しい者同士が離れる自由についてもお話してくださいました。この難しい現実を心に留めながら、いま「わたしたち」のなかにいない人のことを覚えながら、そこに集められた二人、三人が心を合わせて祈る時、イエスさまもそこにいて、とりなし祈ってくださるのです。

分かち合おう

- 「二人が地上で心をつにして求める（祈る）」（18：19）「二人または三人がわたし（イエス）の名によって集まる」（18：20）とは一体どういうことなのでしょう。教会では、一人ではなく、誰かと一緒に祈る時をもつことがあります。そのことにはどんな意味があるのでしょうか。イエスさまが弟子たちに語られた「教会」とは、どのようなものなのでしょう。また、自分自身がこれまでに経験したり感じたりしてきた「教会」について、思うことを自由に話し合ってみましょう。
- 教会での出会いやかかわりの中で、この人と一緒にいることは難しいと感じた経験はありますか。教会こそ、世代や立場を超えて、様々な違いをもった人たちが集まる可能性のある場所ですから、そこで難しさを感じるのは当然のことかもしれません。違いがあることは当然のこととして、ではその違いのある人と一緒にいることが難しいと感じる背景には、何があるのでしょうか。今日の聖書の箇所でも繰り返されている「聞き入れる」（15～17節）という言葉にも心を留めつつ、あらためて考えてみましょう。

わたしもその中にいる

聖書

マタイによる福音書18章15～20節

暗唱
聖句

二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。マタイ 18：20

4課

4月25日

聖書から…

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」とイエスさまは言われました。イエス・キリストの名によって集まるところ、それは教会です。2人でも3人でも、私たちが誰かと一緒に神さまに心を向け、思いをひとつにして祈るとき、そこはイエスさまが共にいてくださる教会となるのです。

みなさんが今いるところは、どんな教会ですか？どんな場所で、どんな人たちと、みことばを聴いて、お祈りしていますか？一人ひとりを大切に思ってください。イエスさまが、その中にいてくださる。神さまが一人ひとりをつなげてくださった集まり。だから安心して、喜んでその輪につながっていただけるのですね。

活動①

「真ん中にイエスさま」

●準備●風船

- ①風船をいくつか膨らませて、みんなで追いかけて遊びます。
- ②次に「ふたり！」「さんにん！」とリーダーがいう人数で集まり、必ず一つの風船を真ん中において、輪になって座ります。風船はイエスさま。必ず真ん中に風船がくるように輪になりましょう。
- ③クラスのメンバーによって、どんどん人数を増やしていてもいいですね。ま

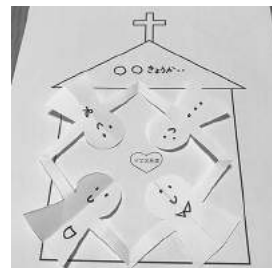
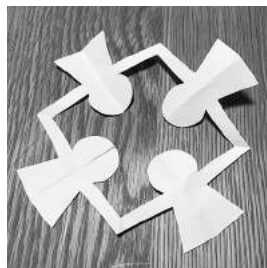
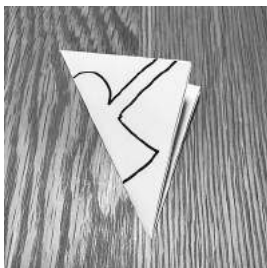
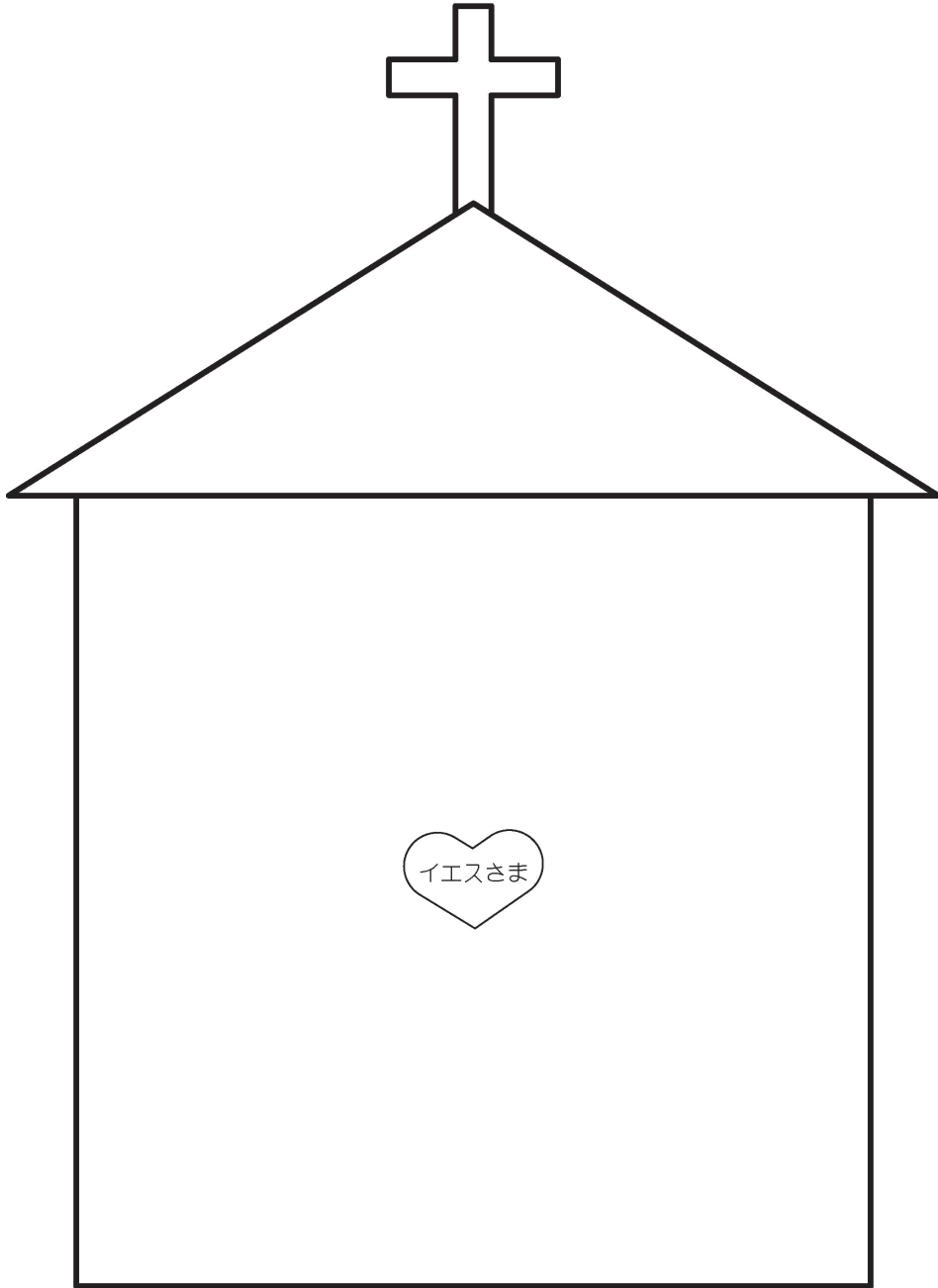
た、メンバーとリーダー一人ずつの場合も、イエスさまを真ん中にして、今日の暗唱聖句のように、つながっていることを喜びましょう。最後にイエスさま（風船）を真ん中にして、リーダーがお祈りします。

活動②

ワークシート

「教会の輪」

- 準備●ワークシート人数分、折り紙、えんぴつ、消しゴム、はさみ
- ①ワークシートの教会の屋根に、自分の教会の名前を書きましょう。
 - ②折り紙を用意して折っていきます。四角に折る→さらに半分に折って三角にする。※もう半分に折ってもできます。その場合はさみで切るときにかたいので十分に気をつけてください。中心になる頂点がずれないように折りましょう。
 - ③頂点を上にして、そこに半分の身体を書きます。手がつながるように、端まで手を伸ばして書くことがポイントです。
 - ④描いた線にそってはさみで切り抜いていきます。
 - ⑤そーっと開いていくと、手をつないだ輪のでき上がり。ワークシートの「イエスさま」を真ん中にして切った折り紙を貼りましょう。イエスさまを真ん中につながる、教会の輪のでき上がりです。



「サウル、サウル」

聖書

使徒言行録9章1～19節前半

暗唱
聖句

「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。
使徒 9：5

5課

5月2日

回心の物語

使徒言行録はルカ福音書と同じ著者（以下「ルカ」と記す）によって記されました。そこには復活の主イエスと出会い、生きる方向性が変わる回心を経て、教会に加えられていった人々の姿が、実にダイナミックに描かれていきます。その意味で「回心」とは「サウル」に起こった劇的な出来事だけを指すのではなく、ペンテコステの後にペトロの説教を聞いた大勢の人々も、また8章ではサマリアの人々やエチオピアの高官にも起こっているといえます。復活の主イエスを証しする人へと変えられていく回心の出来事が、ユダヤから始まり、サマリアそして地の果てにまで広がっていく教会の物語。それが使徒言行録です。

かつて教会の敵であった サウル

サウルはすでに7章58節において、ステファノに石を投げつけるユダヤの人々の衣服を見張っている若者として登場します。「サウルはステファノの殺害に賛成していた」（8：1）だけでなく、「家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた」（8：3）のです。サウルがここまで教会を憎む理由を、ルカは何も語りません。ルカはサウルの心理状態に関心はないのです。むしろルカは、かつて確かに彼は教会の迫害者で敵であったことをこそ伝えようとしています。

「サウル、サウル、なぜ、 わたしを迫害するのか」

ルカは、天からの光がサウルの周りを照らし、彼が倒れたと記すことで、この出来事がサウルの心の中での出来事ではなく、彼の外側から与えられた神の介入であったことを証ししています。「サウル、サウル」という神の二重の呼びかけは、旧約聖書の重要人物においても「アブラハム、アブラハム」（創世記22：11）、「ヤコブ、ヤコブ」（創世記46：2）、「モーセ、モーセ」（出エジプト3：4）と起こっています。

サウルは神を信じるユダヤ人として、神ではなくイエスを信じる人々を神の敵とみなして迫害したのです。その彼に「なぜ、わたしを迫害するのか」と問う声の主はいったい誰なのか。ゆえにサウルは「主よ、あなたはどなたですか」と問います。そして「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」との声聞いたサウルの驚き。今まで神の敵としてイエスを迫害していたはずなのに、神の敵となっていたのはイエスではなく、自分自身であったということをサウルは知らされるのです。

「あなたのなすべきことが 知らされる」

光の中から迫害者サウルを告発した声は、次の瞬間、サウルに新たな使命を告げる声となります。サウルにとって主イエスとの出会いは、罪の告発と新たな使命への招きの出来

事として、天からの光の中で一瞬にして起こりました。そしてサウ口の周りにいた人々には、サウ口が見たものは見えず、サウ口と同じようには感じなかったのです。回心という出来事は、自分の外側から有無を言わさないほどの力で引き起こされる出来事であると同時に、その人の人生に180度ともいえる変化を与える内面的な経験だと言えます。

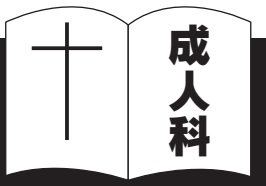
サウ口に手を置き祈る アナニア

天からの光に照らされたあと、三日間目が見えず、食べも飲みもしなかったサウ口のところに、アナニアという主の弟子が遣わされます。アナニアは幻の中で、サウ口のところを訪ねて、彼に手を置いて祈るようにとの声を聞いたのです。しかし当初アナニアは、サウ口が仲間に行ってきた悪事のゆえに、主の声に異議を唱えます。しかし主はアナニアに、ただ「行け」と言い、サウ口は「わたしが選んだ器である」と驚くべきことを告げるので

準備のための聖書日課			
26日	㊦	使徒言行録7:54 ～8:3	教会を荒らす者 サウル
27日	㊧	使徒言行録22:6 ～16	わたしたちの先祖の 神による選び
28日	㊨	使徒言行録26:12 ～18	主の証人パウロ
29日	㊩	ローマ9:19～24	憐れみの器として
30日	㊪	コリント二4:1～7	福音の光を納めた 土の器
1日	㊫	使徒言行録8:26 ～40	手引きしてくれる 人がなければ

す。アナニアは自分の感情を乗り越え、主の声に聴き従いサウ口のところにいて、手を置いて祈りました。するとサウ口の目からうろこのようなものが落ち、サウ口の目は見えるようになったのです。

このサウ口の回心の出来事には、徹頭徹尾、人間の感情や心理を越えて、言葉をもって語りかけ働かれる、主の業があったことをルカは物語っているのです。



成人科

● サウ口の回心の出来事は、特別で劇的な復活のイエスさまとの出会いの体験といえます。しかし同時に、サウ口は復活の主との出会いによって、罪ある本当の自分に気付きました。私たちもそのような気づきの体験をしてきたのでしょうか？ 逆の言い方をすれば、聖書の言葉に触れ、罪ある自分の本当の姿に気付かされるとき、私たちは復活の主との出会いを経験しているのでしょうか？

● 主を信じたサウ口は、これまでの自分が主の敵になっていたことがショックで、死んだようになって祈っていました。主はサウ口のもとにアナニアを遣わします。この時のアナニアにとってサウ口は明らかに敵でしたが、アナニアは主の言葉に従って、サウ口のもとに出かけ、祈りました。主はアナニアを用いて、サウ口がイエスのことを宣べ伝える者となるようにされました。あなたも、この人のために自分が祈るようになるとは思わなかった、という経験があるのでしょうか？

「サウル、サウル」

聖書

使徒言行録9章1～19節前半

暗唱
聖句

「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。
使徒 9：5

5課

5月2日

「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」。突然、天からのまばゆい光に目がくらんで、倒れてしまったサウロの耳元に響き渡る声。サウロは一瞬で主の呼びかけだとわかり、思わず質問したのです。「主よ、あなたはどなたですか」と。そして聞こえて来た答えは、彼が予想もしないものでした。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」。

サウロはこの名前を知っていました。最近エルサレムの周辺に、このイエスという十字架につけられて死んだ男が、復活したのだといい、このイエスこそメシアであるなどと、神をけがす教えが広まり、信じる人々が増えつづけていたからです。そのことを誰よりも嫌がって、この教えを無くしてしまおうとして、大祭司の許可をとり、まさに信者を捕まえにダマスコの町に向かっていた途中の出来事だったのです。

「起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」。地に倒れたサウロに、光の中から声は告げます。サウロの周りにいた人々にはその姿が見えず声だけが聞こえました。サウロはショックのせいなのか目が見えなくなってしまう、人々に支えられてやっとダマスコの町に入りました。そして3日の間、サウロは見ることも食べることも飲むこともできず、まるで死んだような時を過ごしたのです。

かつてイエスの名を信じるステファノという男に向かって、同じユダヤ人が石を投げつけ殺した現場で、サウロは石を投げる



人の服の番をしたことがありました。そしてこの名を信じる人々の家に押し入り、牢に送り込んだこともありました。サウロは明らかに、イエスの名を信じる者たちの敵でした。サウロは主を信じ、従うがゆえに、主をけがす敵を迫害していたのです。なのに、その主がこともあろうに「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」とは。

主を信じる私が実は主の敵になっていた。そのことがショックで、死んだようになって祈っているサウロのもとに、主はアナニアを遣わします。しかしアナニアは、サウロは自分たちの敵であることを理由に、主の招きに抵抗します。当然です。サウロによってどれほど仲間が傷つき苦しんだことでしょうか。あの男は明らかに敵なのです。しかし結局アナニアは主の命令に従い、サウロの目が元に戻るようにと、手を置いて祈り、そしてサウロは新しい出発をします。サウロを新しい人にしたのは、ただただ、人の思いを越えて語りかける、主のみ声であったのです。

「サウル、サウル」

聖書

使徒言行録9章1～19節前半

暗唱
聖句

「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。
使徒 9：5

聖書から…

イエスさまを信じる人たちを迫害し、その命を傷つけてしまうほどのサウロの熱心は、イエスさまを十字架へと追いやった祭司長、律法学者たちの熱心と重なるような気がします。それがたとえ神さまを信じる熱心であったとしても、そのために誰かを傷つけてしまうのは、恐ろしいことだと思います。

そのサウロを、イエスさまを信じ伝える人に変えてしまった出来事…「突然の天からの光」と「呼びかける声」(4節)、「目を開けたが、何も見えなかった」(8節)こと、また「目からうろこのようなものが落ち…元どおり見えるようになった」(18節)という彼の体験は、それが彼の人生においてどれほど衝撃的な出来事だったのでしょうか。突然「サウル、サウル」と名前を呼ばれ、自分こそが神さまの敵となっていた、そのことに気づかされた彼は、衝撃のあまり地に倒れ、これまでの歩みをそこで一度止めるほかありませんでした。再び立ち上がるも、もはや進む方向も歩き方もわからなくなってしまった彼に、神さまは「あなたのなすべきこと」(6節)があると語りかけられたのです。出会いという出来事、その衝撃によって変えられていくひとりの人の姿が、鮮やかに描かれた場面です。

分かち合おう

- 「あの出来事を経験して私は変わった」と思い返すような出来事がこれまでにあるでしょうか。サウロほどに劇的な経験ではないかもしれませんが、私自身もいくつかの経験を思い出します。それまで気がつかなかったことに気がつかされる出来事…モヤモヤしていたことが形を帯びてくるような経験…それによってすっきりしたり、かえってモヤモヤしたり…。そこにあったのはいつも、自分以外の誰かの存在、誰かの言葉だったように思います。皆さんにはそんな出来事、経験があるでしょうか。
- 人は誰でも失敗をしますし、間違いを犯します。そのことによって、誰かを傷つけてしまうということも残念ながらあるでしょう。心から信じて進んできたのに、全く意図せずに反対の方向に進んでいたということもあるかもしれません。しかし、そこから方向転換をして、新しく生き始めることができることを、サウロの物語から教えられます。それは復活の物語です。はじめは神に反対しながらも、サウロを受け入れ支えたアナニヤの姿、そのアナニヤの祈りによって再び立ち上がっていくサウロの姿から、私たちが「共に生きていく」ということについて自由に語り合しましょう。

5課

5月2日

「サウル、サウル」

聖書

使徒言行録9章1～19節前半

暗唱
聖句

「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。
使徒 9：5

聖書から…

今日の聖書箇所には「パウロの回心」という見出しがあります。心を回すと書いて「回心」。今まで自分の心が向いていた方から、くるっと180度正反対に心が向けられ、新しい歩みが始まること。それが「回心」です。

イエスさまは「サウル、サウル…」と親しく名前を呼んで、パウロに呼びかけてくださいました。サウルとは、パウロという名のヘブライ読みです。パウロはその呼びかけに従い、心の向きをくるっと180度かえられました。イエスさまの方に心を向け、イエスさまと共に歩む道が始まっていたのです。今も、イエスさまは私たちの名前を呼んで、自分の方に心をくるっと向けて歩むようにと、呼びかけてくださっています。

活動①

「呼びかけに答えよう！」

パウロがイエスさまに呼びかけられたように、呼びかけられて立ち上がるゲームです。

- ①メンバーが下を向いて屈みます。
- ②リーダーはその周りをそっと動いて立ち止まり、そこから「〇〇さん、〇〇さん」とメンバーの名前を呼びかけます。
- ③メンバーは声がした方に体を向け、「はい！」と顔を上げて立ち上がります。呼

びかけた人と向かい合えば成功です！

*リーダーは親しみを込め、メンバーが自分の方を向けるように優しく呼びかけましょう。何人かで囲んで、誰が呼んだのか当てながら行っても、楽しめますね。

活動②

ワークシート

「パウロの回心」

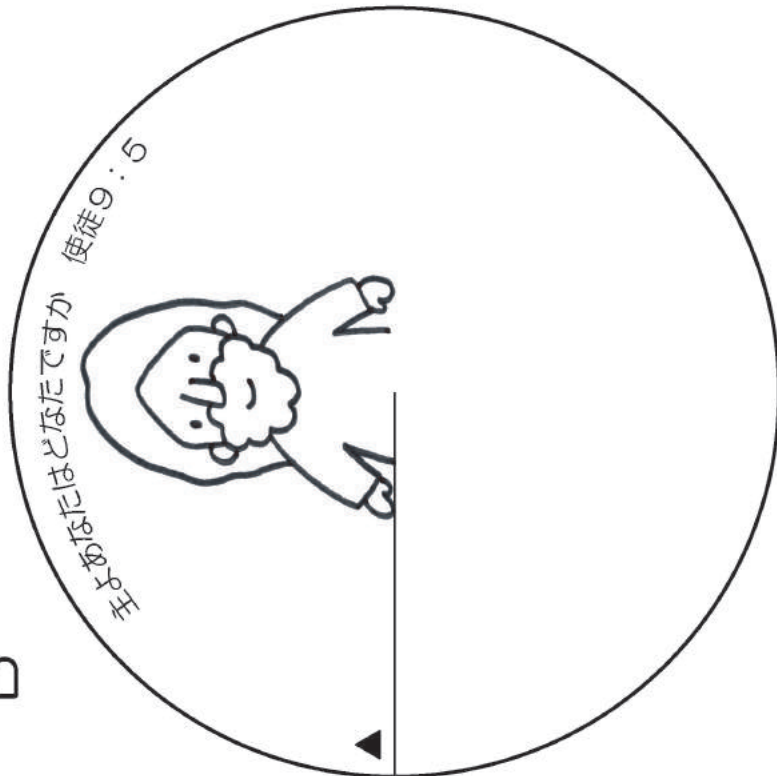
●準備●ワークシート人数分、はさみ、色鉛筆

- ①ワークシートに色を塗り、線に沿ってはさみで切り取ります。
- ②AがBの上になるように重ねます。
- ③Bを押さえながら、★マークが▲マークの下を通るように、Aのまるをくるっと回します。

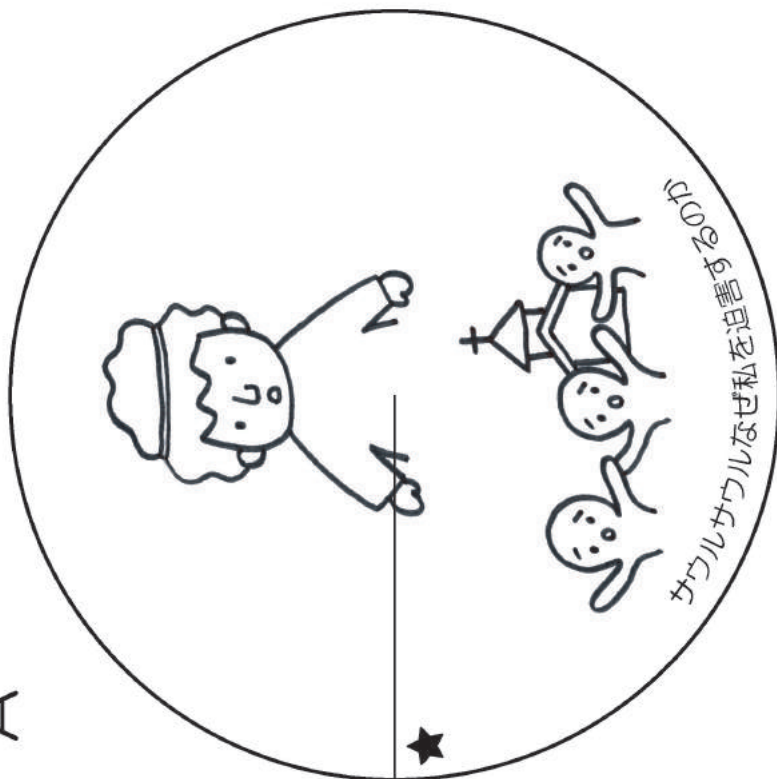
「サウル、サウル…」とイエスさまが呼びかけると、くるっと180度回ってイエスさまと共に歩みだすパウロに変わります。暗唱聖句を読みながら、作ってみましょう。



B



A





キリスト者と呼ばれて

聖書

使徒言行録11章19～26節(参照11:1～18)

暗唱
聖句

このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。使徒 11:26

6課

5月9日

迫害のために散らされた人々

8章において「エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散っていった」とあります。その散らされたイエスを信じる人々の群れは、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで広がっていきます。彼らは迫害を恐れて福音を語らなかつたわけではなく、当初は出会ったユダヤ人に、後には異邦人に福音を語り広めていき、異邦人から「主に立ち返った者の数は多かった」(11:21)のだとルカは証言します。この迫害により散らされた人々によって、異邦人にも福音が広げられた背後に、ルカは「主がこの人々を助けられた」(11:21)と記すことで、聖霊がこの一連の出来事を導いていることを証しているのです。

教会はバルナバをアンティオケアに派遣した

神はユダヤ人も異邦人も分け隔てなく救ってくださる。このことを幻を通して知ったペトロ。そしてそのペトロの証言を聞いたエルサレム教会の人々は、「神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」(11:18)とそれまでの考えを改めます。そのエルサレム教会に、アンティオキアにおいて異邦人が主に立ち返っているとのうわさが伝わります。教会はそこで起こっていることの真意を確かめるために、「立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていた」バルナバをアンティ

オキアへと派遣するのです。まだこの時点においては、異邦人への宣教とその結果について、エルサレム教会が指導し確認していたことがここから読み取れます。8章においてエルサレム教会が迫害されたとき、12使徒だけはエルサレム教会にとどまったとあります。使徒たちとは、イエスさまとずっと一緒にいた人々であり、信仰の歴史的伝承の担い手です。初期の教会は、新しい地と異邦人への宣教に開かれていくと同時に、イエスさまから伝えられた教えから離れていくことのないように、心を配っていたのです。

サウロを探すバルナバ

アンティオキアに来て、異邦人の回心を喜ぶバルナバは、かつて出会ったことのあるサウロを探しにタルソスに向かい、彼を見つけ出して、アンティオキアに連れ帰ります。なんのためにバルナバはサウロを探しにいったのでしょうか？ サウロを連れ帰ったバルナバは、アンティオキアに一年留まり、サウロと共に新しくこの道に入った人々を教えたとあります。バルナバはアンティオキアに生まれた新しいたくさんの信者たちを、教え養う必要を感じて、サウロを連れて来たのでしょうか。そうであるならば、サウロはこのとき、エルサレムの12使徒から、教会の正当な教師として承認されたと考えることができます。

キリスト者と 呼ばれるようになった

使徒言行録において、ある人がイエスをメシアと信じ、従う人に回心するのは、人間の信心によるものではありません。宣教の言葉の背後に聖霊が働いて、復活のイエス・キリストとの出会いと回心が起こっています。しかし同時に、イエスを信じるようになった人々は、その体験にとどまらず、信仰を生活において体得^{たいとく}していくために、注意深く教えられ、長い間養い育てられる必要があったことがわかります。「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(2:42)

「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者(クリスチャン)と呼ばれるようになった」のも、イエスを信じた人々の信仰

準備のための聖書日課

3日	㊦	使徒言行録2:37 ~42	信仰の交わりのなかで
4日	㊧	使徒言行録4:32 ~37	バルナバと呼ばれたヨセフ
5日	㊨	使徒言行録9:26 ~31	バルナバの献身
6日	㊩	ペテロ-4:12~19	キリスト者の名で呼ばれる幸い
7日	㊪	ヨハネ7:32~36	ギリシア人に教えるつもりか
8日	㊫	使徒言行録11:1 ~18	命を与えてくださる神

理解が深まっていき、彼らの信仰生活の変化を見ていた周りの人々から、あなたたちは「キリスト者」「キリストに属する者」ですねと、あだ名されるような明らかなる生き方の変化が表れたからなのでしょう。



成人科

●エルサレム教会に対する迫害により散らされていった人々によって、結果的に福音は異邦人の世界にまで広がっていきことになりました。教会への迫害は悲しくつらい出来事です。そのようなことはないに越したことはないのですが、そのような危機的状況に立ち至ったからこそ、エルサレム教会は異邦人世界にまで福音を伝えることになったのです。皆さんの教会の歴史の中で、また一人ひとりの人生の中で、悲しくつらい出来事がそれで終わらず、そこから新しい歩みが始まっていった経験はあるでしょうか？

●バプテスマを受けてから、今に至るまでの信仰生活を振り返り、最初の頃と今とでは、生き方や価値観、考え方において変化や自分自身の成長を感じることがあるでしょうか？ 周りの人々が、あなたのことをクリスチャンとして意識することがありますか？ また、あなたの日常の場でクリスチャンであることを証しできる機会はどのような場合でしょうか。そしてクリスチャンとして成長していくとは、どのようなこととイメージしていますか？自由に話し合ってみましょう。

キリスト者と呼ばれて

聖書

使徒言行録11章19～26節(参照11:1～18)

暗唱
聖句

このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。使徒 11:26

6課

NEW

ペトロをはじめとする使徒たちの最初のころの宣教によって、イエスこそメシアであると信じるようになった人々は、エルサレム周辺のユダヤ人でした。彼らは主が選んで律法を与えたユダヤ人だけが、イエスさまを信じて救われると思っていたので、異邦人には福音を語りませんでした。ところが同じユダヤ人からイエスを信じる人々への大迫害が起こり、エルサレムの教会は、使徒たちだけを残して信徒たちはエルサレムを離れて、遠くフェニキア、キプロス、アンティオキアまで逃げ去り散り散りになってしまったのです。それでも彼らは行く所々で、聖霊に助けられながら福音を語り続けました。最初はユダヤ人だけに語っていましたが、福音を信じて仲間に加わる人々の中には、ギリシア語で異邦人にも福音を語り始める人が現れ、アンティオキアには、主に立ち返ったたくさんの異邦人が集まるようになったのです。聖霊がこれらすべてを導いておられたのです。

そして、このうわさがエルサレム教会にも伝わりました。ちょうどそのころのエルサレム教会でも、ペトロが主から示された幻によって、神さまがユダヤ人も異邦人も分け隔てなく救ってくださることを知ったところでした。そこで、アンティオキアに、エルサレム教会のバルナバが遣わされることになったのです。それはまず、アンティオキアに集まっている人々がどういう状態なのかを確認するためでした。バルナバは



アンティオキアに集う人々を一目見て、まさしく神さまの恵みが与えられたことがわかり喜びました。同時に、アンティオキアの人々が主から離れないようにと教える必要を感じたのです。しかしバルナバ一人では手が足りません。そこでバルナバはサウロを探しにタルソスへ出かけ、アンティオキアに連れ帰り、二人で丸一年間、アンティオキアの教会の人々にみ言葉を教え養いました。それは、その昔、天地を造られた主が、イスラエルの民を選び、律法を与えて導かれたことや、律法と預言者を通して、罪から救うキリストの到来は預言され、そのキリストとは、ナザレのイエスであることなど、律法と預言者を知らなかった異邦人のクリスチャンたちに、バルナバとサウロは丁寧に教えていったのです。その長い時間をかけた信仰の導きと指導により、彼らの生き方と生活は変化していき、やがて周りの人々から彼らは「キリスト者」とあだ名にされるほどになったのです。

キリスト者と呼ばれて

青少年科



聖書

使徒言行録11章19～26節(参照11:1～18)

暗唱
聖句

このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。使徒 11:26

聖書から…

ある人たちを受け入れ、その人たちと仲間になって一緒に過ごすということは、別の人たちから後ろ指をさされたり、悪口を言われたり、仲間外れにされたりすることかもしれません。当時の教会、特にユダヤ人たちの間においては、「異邦人」と呼ばれる人々を受け入れることについて、慎重な意見が強かったようです。それでも聖書には、「異邦人」たちを受け入れたペトロの姿、アンティオキアの教会の姿をそのままに喜んだバルナバの姿、またこのバルナバが、かつて教会で弟子たちに受け入れられなかったサウロを受け入れ(9:27)、アンティオキアでも彼と一緒に働いた姿を描いています。

そんなバルナバは、アンティオキアで「神の恵みが与えられた有様を見」(23節)たとあります。その様子はおそらく、教会の人たちの間だけではなく、アンティオキアの地方の人々にもよく見えていたのでしょう。そうして彼らは「キリスト者と呼ばれるようになった」(26節)…「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたし(イエス・キリスト)の弟子であることを、皆が知るようになる」(ヨハネ13:35)と言われたイエスさまの言葉を思い出します。

分かち合おう

- エルサレム教会からアンティオキア教会にバルナバが派遣されたのは、アンティオキア教会の様子を確認し、そこにいる人々(特に「異邦人」たち)がイエスさまから伝えられた教えから離れないように教え、勧めるためでした。(23～26節)様子を見られること、心を配られることは、ありがたいと思うこともあれば、うっとうしいと感じることもあるかもしれません。皆さんがこれまでに、教会やそのほかの場面で経験した、してもらってありがたかったこと、うれしかったこと、逆にうれしくなかった経験などがあれば、自由に分かち合ってみてください。

- 「すべての人を招く教会」という言葉が使われたりします。その背景には、神さまが「すべての人」を愛しておられ、招いておられるという聖書のメッセージがあります。しかし、私(たち)自身が「すべての人」を受け入れるということを具体的に考えるとき、その言葉の重さを感じます。受け入れることの難しさ、その人の「仲間」と呼ばれることの難しさについて、かつてイエスさまの弟子であることを3度否定してしまったペトロの姿も思い出しながら、自由に話し合ってみましょう。

6課

5月9日

キリスト者と呼ばれて

聖書

使徒言行録11章19～26節(参照11:1～18)

暗唱
聖句

このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。使徒 11:26

聖書から…

♪どんどこどんどこ歩いていけば…『こどもさんびか 改訂版』106番(日本キリスト教団出版局)、この賛美歌を知っていますか?この歌の2番3番は、友だちが2人から4人、4人から8人とどんどん増えていきます。

バルナバは、イエスさまのこともっと多くの人に伝えられたらと願い、パウロを探し、一緒に伝えていきました。そうしてアンティオキアの教会には、イエスさまにつながって歩む神さまのこどもが、どんどんどん増えていきました。私たちも、イエスさまの話をいっぱい聞いて、きみもぼくもわらって神さまのこどもだということを喜んで歩いていきましょう!

活動①

「パウロを探そう!」

- ①バルナバがパウロを探して一緒に宣教を始めたように、パウロ役になったメンバーが隠れ、リーダーはバルナバ役になってパウロを探します。
 - ②見つけたら、どんどこどんどこの賛美歌を歌いながら、みんなで一緒に歩きましょう。
- *パウロ役とバルナバ役を交代しても、楽しいですね。

活動②

ワークシート

「パウロはどこにいる?」

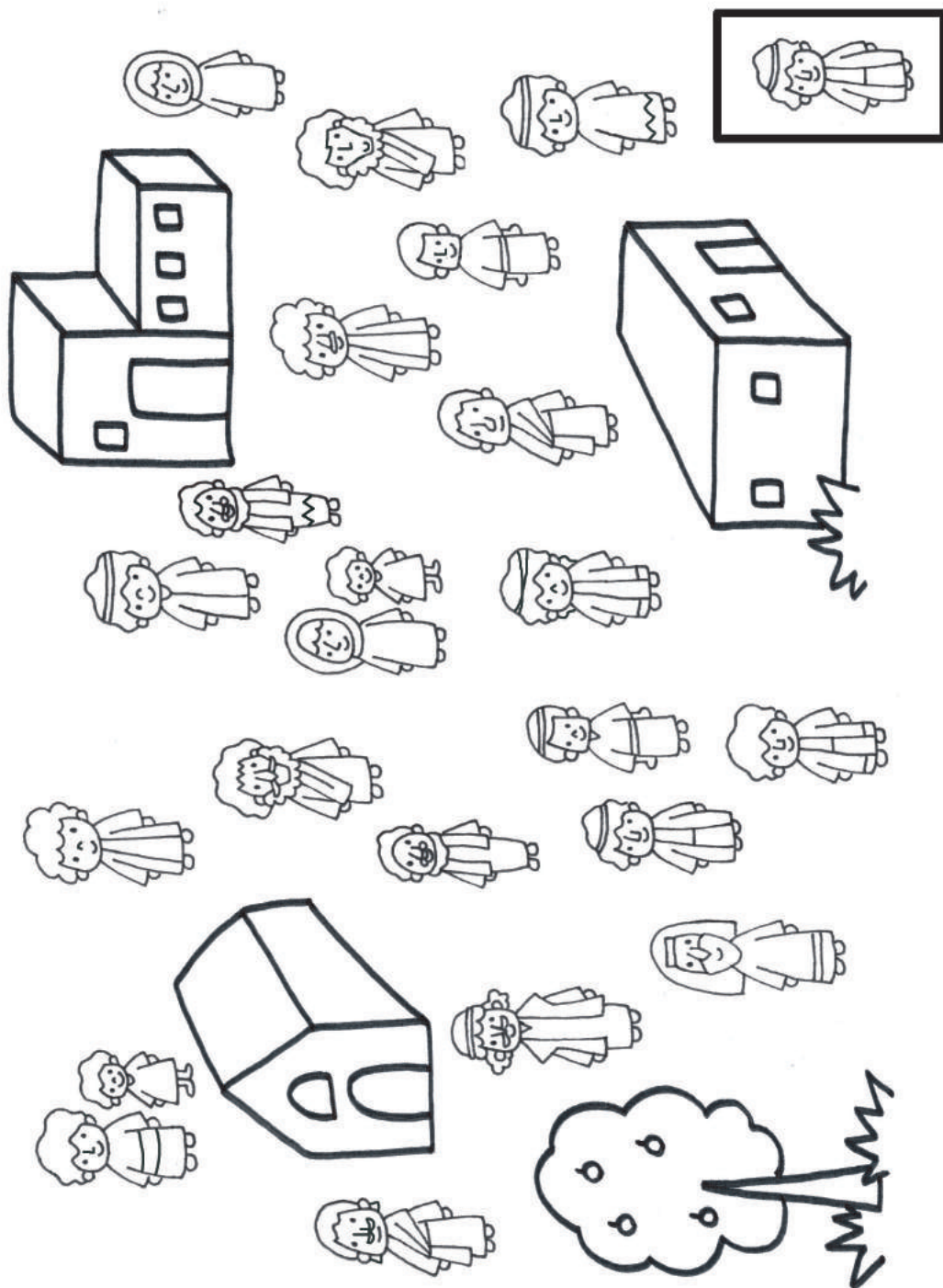
●準備●ワークシート人数分、色鉛筆

バルナバはタルソスへ行き、一緒にイエスさまのことを伝えるために、パウロを探しています。絵の中から、四角の中にあるパウロと同じパウロを見つけ出しましょう。色を塗っても楽しいですね。

活動③

「どんどんつながろう!」

- ①追いかける人を決めます。10数えたら、みんなを追いかけてタッチしていきます。
- ②タッチされた人は追いかけている人と手をつなぎ、一緒に他の人を追いかけます。
- ③どんどんみんなをタッチして手をつないでいき、全員つながったらおしまい。最初においかけている人は、バルナバやパウロです。タッチされてつながっていくゲームを楽しみながら、イエスさまに従う人がどんどん増えていったことを覚えましょう。手をつないで走るので、リーダーは危なくならないように気をつけて見てください。つながる人数が多くなった場合は、途中で二つに分けて追いかけても良いですね。



これと同じ人を探してみてね！

ある人々がユダヤから 下ってきて

アンティオキア教会から送り出されたパウロとバルナバによる異邦人伝道の目覚ましい働きは、アンティオキア教会に「ある人々」がやってくることで転換を強いられることとなります。「ある人々」とは、異邦人からクリスチャンになった人々に対し、「割礼」と「モーセの律法」の順守を要求するユダヤ主義のクリスチャンです。パウロはガラテヤの信徒への手紙において、異邦人に割礼を強いる彼らを「偽の兄弟たち」（ガラテヤ 2：4）とさえ言いました。しかし彼らは、エルサレム教会の指示を受けてそのような活動をしていたのではなく、独自の判断で行動していたようです（15：24 参照）。

使徒や長老たちと 協議するために

異邦人からクリスチャンになった人々に「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教える彼らと、パウロたちの間に、激しい対立と論争が生じます。パウロは、第一回伝道旅行で立ち寄ったユダヤ人の会堂ではっきりこう宣言します。「…モーセの律法では義とされえなかったのに、信じる者は皆、この方によって義とされるのです」（13：38～39）。パウロはこの救いの道への確信から「割礼を受けなければ、救われない」と告げる彼らの考え方に激しく対立し、論争したのでしょうか。そこで解決し

なければ、ユダヤ主義の教会から分離し、独自の道を歩む選択もあったのかもしれませんが。しかしパウロたちは分離ではなく教会のルートであるエルサレム教会の使徒や長老たちとの対話を選んだのです。

神に立ち返る異邦人を 悩ませてはなりません

パウロとバルナバとアンティオキア教会の数名のものはエルサレムに上ります。使徒と長老たちによる協議の席では、パウロたちの働きを通して、神が異邦人の間で行われた素晴らしい業が証しされ、使徒ペトロ自身も、主から示された幻、異邦人クリスチャンとの出会いを通して「…わたしたちに与えてくださったように異邦人にも聖霊を与えて、彼らをも受け入れられたことを証明なさったのです…わたしたちと彼らとの間に何の差別もなさいませんでした」（15：8～9）「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです」（15：11）と力強い証言を行いました。その結果、会議の裁定者であるヤコブは、預言者アモスの言葉を引用しつつ（アモス 9：11～12）、「神に立ち返る異邦人を悩ませてはなりません」と異邦人クリスチャンを受け入れる裁定を下すのです。

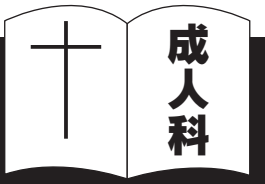
ただ、…を避けるように

異邦人のクリスチャンを受け入れることを決めたエルサレム会議は、同時に異邦人から

クリスチャンになった人々に対して「偶像に備えて汚れた肉と、みだらな行いと、絞殺した動物の肉と、血とを避ける」ことを伝えることも合意しています。レビ記 17 章、18 章には、これらの規則をユダヤ人と寄留者に適応していますので、ヤコブはここで、異邦人をこの「寄留者」に対応するものと考えたのかもしれませんが。しかしいずれにしろ、この規則は異邦人を教会に受け入れるための条件などではなく、主を信じて仲間となる人々への生活に対する勧めとして、言われているものと理解します。なぜならその後、アンティオキアの教会の人々に「偶像に備えて汚れた肉と、みだらな行いと、絞殺した動物の肉と、血とを避けてほしい」と伝える使徒の手紙が届いたとき、それを読んだ彼らは、この

準備のための聖書日課			
10日	㊦	ガラテヤ2:1~10	福音の真理に立つ
11日	㊧	使徒言行録13:38~39	信仰義認
12日	㊨	アモス9:11~15	見よ、その日が来れば
13日	㊩	ローマ15:7~13	互いに受け入れるために
14日	㊪	使徒言行録14:21~28	異邦人に開かれた信仰の門
15日	㊫	使徒言行録15:22~29	重荷を負わせることなく

内容を「励ましに満ちた決定」と受け止め喜んでいるからです。



成人科

●異邦人からの改宗者が主だったメンバーのアンティオキア教会を、「割礼を受けよ」とユダヤ主義のクリスチャンが混乱させたとき、当初パウロやバルナバは激しい論争で、ユダヤ主義のクリスチャンからアンティオキア教会を守ろうとしました。しかし、パウロはそのような論争をいつまでも続けるのではなく、むしろ、エルサレム教会との対話の道へと進むことで、結果的にアンティオキア教会は混乱から守られ、エルサレム教会との繋がりをも得ることができました。この対話に開かれたパウロの行動から、現代の教会、教派、また私たち個人として、学ぶべきことはなんでしょうか？

●ユダヤ主義のクリスチャンが大切にしていた「割礼」にあたるものは、今も手を変え品を変え教会生活のなかに現れ、議論と対立を生み出すことがあります。たとえばコロナ危機において、リモートによる礼拝や晚餐式をどう考えるかということも、論争に発展するテーマかもしれません。相手を論破するための議論の力より、共に生きるための対話の力を、今私たちは持っているのでしょうか？ お互いが聞き合おうとする関係を築いているのでしょうか。

ただ主イエスの恵みによって

聖書 使徒言行録15章1～21節

暗唱聖句 わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのです
使徒 15：11

7課

5月16日

聖霊の豊かな働きによって、異邦人からクリスチャンになった人々で溢れていたアンティオキア教会。その教会からバルナバとサウロは伝道旅行に出発し、各地でユダヤ人からの迫害を受けつつも、たくさんの異邦人がクリスチャンになっていきました。やがてアンティオキア教会に戻った彼らは、神さまが自分たちと共に働いて、異邦人がイエスさまを信じるようにくださった素晴らしい出来事の数々を報告して、互いに喜び合いました。

ところがある日、アンティオキア教会にユダヤ人でクリスチャンになったある人々がやってきました。そして異邦人でクリスチャンになった人々に「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教え始めたのです。その教えに教会の人々は混乱しました。パウロやバルナバは、「モーセの律法ではなく、イエスキリストによって救われる」と教えていたからです。当然その人たちと激しい議論となりました。しかし決着がつきません。パウロとバルナバとアンティオキア教会の数名で、エルサレム教会の使徒や長老たちとこの件で話をするために出かけることになりました。

バルナバはもともとエルサレム教会からアンティオキア教会に派遣された人でしたから、エルサレムに到着すると使徒や長老たちから、大歓迎です。また彼らが体験した神の働きの報告も喜んで聞いてくれました。



た。しかし中には「異邦人にも割礼を受けさせるべきだ」と強く主張する人々もいて、エルサレム教会も混乱してきたのです。そこで使徒や長老たちは、この問題についてちゃんと話し合いを持つことにしました。一方的に断罪するのではなく、互いの意見を出し合い、議論を重ねることが大切だと考えたからです。話し合いが尽くされた末に、ペトロは自分自身が目撃し、体験した、異邦人を救う神の働きを踏まえて、重要な一言を語りました。「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです」。この一言で全会衆は静かになり、パウロとバルナバが話し出した、異邦人を救う神の不思議なわざの証しにも耳を傾けたのです。話し合いを取り仕切っていたヤコブは「神に立ち返る異邦人を悩ませてはなりません」といいました。ただ主を信じるものにふさわしい生活をしてほしいとだけ願いつつ、お互いに仲間であることを手紙にして書き送ったのです。

ただ主イエスの恵みによって

青少年科



聖書

使徒言行録15章1～21節

暗唱
聖句

わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのです
使徒 15：11

聖書から…

「割礼」という儀式は、神さまを信じその教えに従って生きることを表す方法として、モーセの時代からユダヤ人たちが大切に守ってきた慣習かんじゅうでした。それが大切にされないということは、彼らにとって許し難いことだったのでしょ。またそれは、大きな身体的苦痛を伴うものでもありました。自分たちが経験した苦勞を思うとき、相手の幸せを純粋に喜べない気持ちが湧いてきてしまう…それぞれの人生を生き、異なる経験を重ねてきた私たちの間でも、時にこれと似たようなことが起きているかもしれません。

そんななか、アンティオキアの教会の人々とエルサレムの教会の人々は、それぞれが大切にしていることをじっくりと分かち合う時間をもちました。「協議」(6節)「議論」(7節)と書かれてはいますが、それはお互いの経験したこと、神さまから与えられた「恵み」の出来事を共有する時間となりました。何が正しいことなのかを議論するのではなく、そのようにしてお互いの「物語」を分かち合うことは、異なる背景をもった「わたしたち」(わたしとあなた/教会)と一緒に生きていくため、一緒にいることを喜ぶことができるために、必要な時間であるのだと気づかされます。

分かち合おう

- 「私にあんなに苦勞くるわうしたのだから、あの人が苦勞しないのは許せない」そんな理屈は無いのですが、そんなふうになってしまうことがあるかもしれません。自分以外の誰かと「苦勞」を比較するのではなく、今日の聖書の物語のように、「神さまから与えられた『恵み』の出来事を共有する」ことができると思います。「放蕩息子」の物語(ルカ15：11～32)におけるお兄さんの姿も思い出されます。比較ではなく共有…そのことがなかなかできないのはどうしてなのでしょう。
- 相手に対して、「どうしてなのか理解できない」と感じるとき、もう一歩進んで「理解してみよう」とするところから対話が始まります。私自身の湧き上がる思いや感情の背景に、何かしらの経験やそれに基づく理由があるのと同じように、相手の言動の背景にもまた、その人なりの経験や理由があるのです。埼玉大学准教授の宇田川元一さんは「私たちの間にある溝に気づき、それを埋めようとするのではなく、溝に橋を架けること」と言われています。(参考：著書『他者と働く』NewsPicksパブリッシング)今日の聖書の物語や、それぞれの今までの経験から、私たちが互いに対話し理解し合うことについて、自由に話し合ってみましょう。

7課

5月16日

ただ主イエスの恵みによって

聖書 使徒言行録15章1～21節

暗唱聖句 わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのです
使徒 15：11

聖書から…

7課

5月16日

「一緒に遊ぼう!」「うん遊ぼう!」「おま
まごとね!」「かくれんぼがいい!」「やだ
絶対おままごと!!」

一緒に遊びたい気持ちは同じなのに、ど
うしたらいいでしょう。

今日の聖書でも、イエスさまのことをた
くさんの人に伝えたい思いは同じなのに、
言い争いがおきています。でもそのときに、
「もう知らない!」と知らんぷりしたり、「そ
れは絶対ダメ」と決めつけたりするのでは
なく、どうすれば良いか一緒に話し合いま
した。相手の話をよく聴いて、自分の思い
を伝えて、何が最善かをみんなで考えたの
です。

「どうする?」「じゃあかけっこは?」「い
いね、そうしよう!」

どうしたら良いか話しあって考えて一緒
に過ごせた方が、うれしい気持ちが広がり
ますね。

活動①

「一緒にやってみよう!」

●準備●コピー用紙（新聞紙やチラシ）、
セロハンテープ

①紙とセロハンテープを使って高くつなげ
ていきます。紙を丸めたり、土台をしっ
かりさせたり、より早く確実に高くする
にはどうしたら良いか、メンバーやリー
ダーと話し合いながら考え合って、一緒
にやってみましょう。

②手を離して3秒間倒れなかったら成功!
③倒れてしまったら、もう一度チャレン
ジ! どうすれば良いか話し合っ
て考えながら、もう一度挑戦してみま
しょう。チームに分かれて時間内にど
ちらが最高可できるか、ゲームに
しても楽しめます。



活動②

ワークシート

「エルサレム使徒会議 間違い探し」

●準備●ワークシート人数分、鉛筆、色鉛
筆

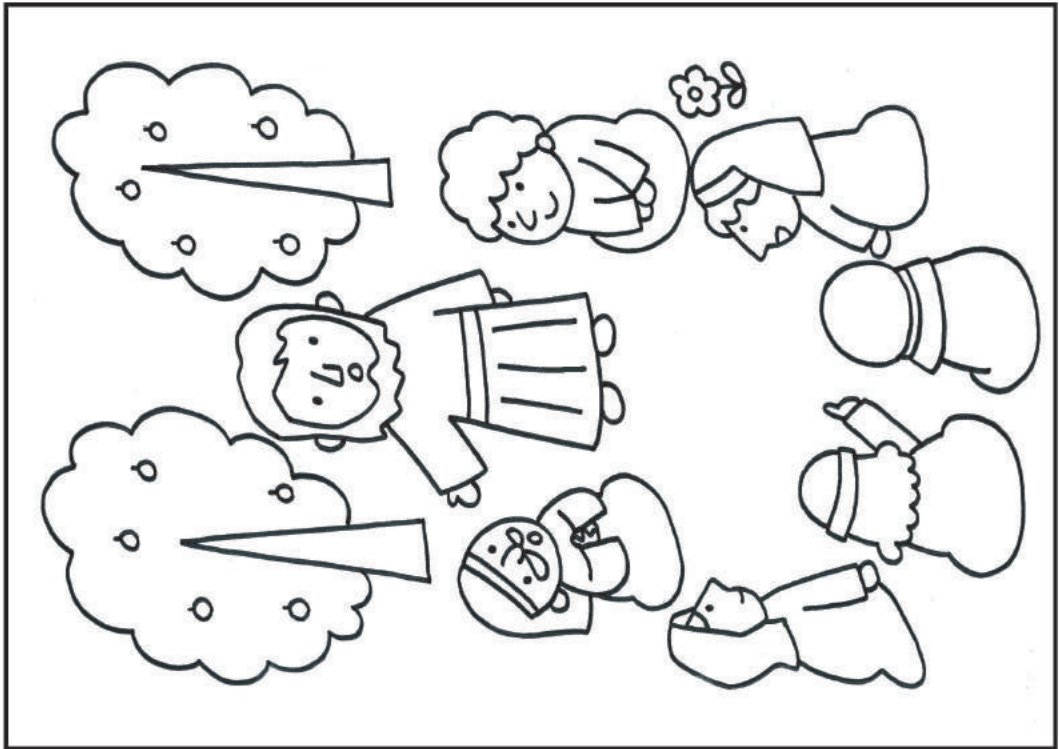
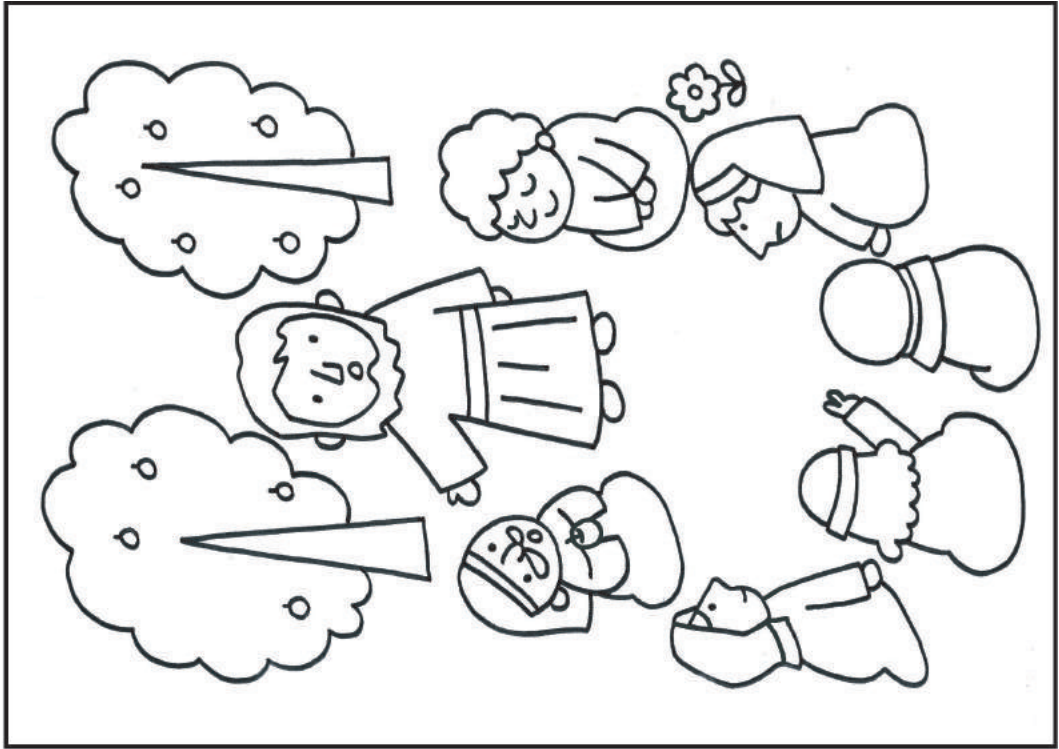
エルサレムで使徒たちが話し合っ
ています。左の絵を見ながら、右の絵の間違いを
8つ探しましょう。

- ①左の本の上の窓の数が一つ右の人が眠っている
②右の人が窓の数が二つ左の人が二つ
③左の女の子の服の色の線が多い
④左の人が口を持っていない
⑤真ん中の人の服の色の線の中
⑥右の人の服の色の線が二つ左の人の服の色の線が一つ
⑦左の人の服の色の線が二つ右の人の服の色の線が一つ
⑧右の人の服の色の線が二つ左の人の服の色の線が一つ



7課

5月16日



この幻を見るまでに

聖書

使徒言行録16章6～15節(参照15:36～16:5)

暗唱
聖句

主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話の注意深く聞いた。
使徒 16 : 14

8課

5月23日

第二回宣教旅行の開始

「さあ、前に主の言葉を宣べ伝えたすべての町へもう一度行って兄弟たちを訪問し、どのようにしているかを見て来ようではないか」(15:36) というパウロの言葉から始まることになる第二回宣教旅行。当初パウロは、第一回宣教旅行で廻った教会を再訪する計画だったことがわかります。しかしこの旅行は、その最初から大きく躓きます。まず盟友であったバルナバと意見の衝突によって喧嘩別れとなり、それぞれに別々の同行者と行動を取らざるを得なくなりました。一見最悪のスタートでしたが、見方によっては宣教の働きは二倍になったとも言えます。パウロはシラスという弟子を連れてシリア州、キリキア州の教会を回り、デルベ、リストラを訪れたときに、ギリシャ人の父をもつテモテという弟子を同行者に迎えます。テモテはユダヤ人の手前、割礼を受けることとなりますが、ユダヤ人と異邦人とを結びつけるテモテの存在は、パウロの異邦人宣教の働きにおいて大変重要な位置をしめることになるのです。

み言葉を語ることを 聖霊から禁じられた

かつて訪れた教会を廻り励ましたパウロ一行は、それ以上そのアジア州のみ言葉を語ることを聖霊から禁じられるという不可解な体験をします。そこで彼らは、恐らく行く予定のなかったフリギア・ガラテヤ地方を通り抜け、ミシア地方から北上してビティニア州に

入ろうとしますが、ここでまたイエスの霊がそれを許さないという不可解な体験をしたパウロたちは、ミシア地方からさらに西に向かうことにし、エーゲ海岸にあるトロアスの港町にたどり着くことになるのです。この出来事において聖霊の働きとは、パウロの計画と行動を支え、力を与える働きとしてではなく、むしろパウロの行く先々に立ちはだかる壁となり、彼の計画を「阻害」する霊として働いています。しかしそのことによって、パウロたちが海を越えてマケドニアにまで向かうことになるところに、自由に吹き渡る風のように働かれる聖霊の導きの不思議さを感じさせられるのです。

パウロは幻を見た

トロアスに着いた夜「マケドニア州に渡ってきて、わたしたちを助けてください」と叫ぶ幻をパウロは夢に見ます。使徒言行録において「幻」は、人を重要な決断へとつながりきっかけとしてたびたび現れています。敵であったサウロのもとにアナニアが遣わされる時(9:10)、ペトロがユダヤ人も異邦人も分け隔てなく主が救ってくださることを知った時(10:9～16)、そしてここでパウロの見た幻は、福音が最初にヨーロッパに渡るきっかけとなりました。「私たちが福音を伝えるのだ」と、自らの強い信念で進んでいたパウロの行く道が、聖霊によって2度も断念させられたからこそ、今パウロの心の耳に聴こえる「わたしたちを助けてください」と福音を求めて叫ぶその声こそ、主のみ心に違

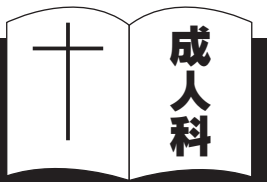
いないとパウロは確信していくことができたのです。

主が彼女の心を開かれたので

トロアスからマケドニアに渡ったパウロは、マケドニア州第一区の都市、フィリピに入ります。そのフィリピで、安息日に祈りの場所で福音を語っていたパウロの話や、注意深く聞いていたリディアという女性がいました。彼女は裕福な紫布の商人です。初めて訪れたマケドニア州の大都市フィリピにおいて、たまたま通りかかった裕福な女性実業家が、パウロが語るイエスの復活などの不思議な話に耳を傾け、しかも信じて、彼女も彼女の家族もみんなバプテスマを受けるといって、驚くべ

準備のための聖書日課			
17日	㊦	ヨハネ3:1~15	風は思いのままに吹く
18日	㊦	ヨハネ20:19~23	聖霊を受けよ
19日	㊦	ローマ8:1~11	霊に従って歩む
20日	㊦	ルカ24:44~49	心の目が開かれて
21日	㊦	使徒言行録15:36~41	別々の道へ
22日	㊦	使徒言行録16:1~5	テモテを同行させるために

きことが起こったのです。その発端^{ほったん}は「主が彼女の心を開かれた」からだとしてルカは語りまします。まさに聖霊の働きです。



成人科

● かつて主イエスは弟子たちに聖霊の働きについて「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(1:8)と語られました。この主の言葉からすると「御言葉を語ることを聖霊から禁じられた」(16:6)という経験は、一見矛盾しているように思われます。しかし、アジア州でのパウロの働きを聖霊が妨げたのは、実は遠くマケドニアにまでみ言葉を伝えるためであったのだとすれば、み言葉を告げ広めようとする聖霊の働きは

一貫しているといえるでしょう。そうであるなら今、コロナ危機において思うように宣教の働きが進まないときでも、なお聖霊の導きのもとにあると信じることができるのではないのでしょうか？ 妨げによって、むしろ新たな宣教の働きが始まることはあるのではないのでしょうか？

● フィリピの町の裕福な紫布の商人リディアが、パウロの語る福音の言葉を信じるに至ったのは、「主が彼女の心を開かれた」からでした。それまで分からなかった聖書の言葉に、ある時、心が開かれ分かるようになった体験があれば、分かち合いましょう。

この幻を見るまでに

聖書

使徒言行録16章6～15節(参照15:36～16:5)

暗唱
聖句

主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話に注意深く聞いた。
使徒 16:14

8課

5月23日

パウロとバルナバが福音を語り歩いて、方々に生まれた教会を「もう一度訪問して励まそう」とパウロはバルナバに言いました。二人は堅い約束を結んだ友人です。ところが、一緒に連れていく人をめぐって意見が衝突してしまい、喧嘩別れとなって別々に出発することになったのです。見方を変えれば、二手に分かれてより豊かに福音を伝えることとなりました。パウロはシラスという弟子と共に、かつて尋ねたデルベ、ルステラの教会を訪問します。そこにはユダヤ人の母とギリシア人の父をもつテモテという弟子がいて、パウロはこのテモテも一緒に旅に連れていくことにしました。ユダヤ人と異邦人を繋ぐテモテの存在は、異邦人宣教の大きな力となったのです。

さてパウロはアジア州でまだ廻っていないところに行って、み言葉を語る計画を立てたのですが、聖霊によって禁じられてしまいました。パウロは仕方なく、予定していなかった西に向かい、ミシア地方から北のビティニア州に入ろうとしたところ、ここでまたイエスの霊に妨げられるという不思議な経験をしたのです。計画した道の門が、次々と閉ざされるような経験をしながら、気が付いたらパウロ一行はエーゲ海のほとりのトロアスの港までたどり着いていました。当初、まったくこんなところまで来ることなど、想定していなかったトロアスの港。「さて、これからどこに向かって行けばいいのだろうか」と悩みつつ眠り



についたパウロは夢をみました。マケドニア人が現れ「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と告げる不思議な夢、幻を見たパウロは気づいたのです。「今まで自分が勝手に行こうと決めたところは、主のみ心ではなかったから、聖霊によって妨げられたのだ。しかし海の向こうから私たちの助けを必要としていると告げるこの幻は、わたしの勝手な思いではなく、主のみ心に違いない」。

主のみ心と確信し、海を渡ってマケドニア州の大都市フィリピに入ったパウロたちは、リディアという裕福な女性の商人と出会いました。リディアは神を信じてはいましたが、パウロの語るイエス・キリストの復活の話など聞いたことはありません。なのになぜかパウロの話に心が惹かれます。パウロの語る福音を信じて、リディアもその家族までもバプテスマを受けることになりました。これもパウロの熱心さや思いによるものではありません。まさに、リディアの心を開く聖霊の働きでした。

この幻を見るまでに

聖書

使徒言行録16章6～15節(参照15:36～16:5)

暗唱
聖句主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話の注意深く聞いた。
使徒 16 : 14

聖書から…

今日の物語をみると、パウロたちの宣教旅行は、まったく彼らの思った通りに進んでいません。み言葉を伝えるために街に入ろうとするのに、なぜか入ることが許されないのです。具体的な理由は書かれていません。パウロがバルナバと別れてシラスと宣教旅行に出たこと、その途中でテモテを連れて行ったことも含め、その時々起こった出来事の意味や、下した決断が正しかったかどうかということは、いつも後になってみなければわかりません。それでも彼らは、心を神さまに向けて開き、一つひとつの出来事を「聖霊」「イエスの霊」による導きであると受け止め、前に進んで行きました。そして、パウロが神さまから幻を見せられたときに、彼らは「神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至った」(10節)のでした。

彼らがフィリピで出会ったリディアという女性の心を神さまが開かれたように(14節)、パウロたちの心をご自身に向けて開かれたのもまた、聖霊なる神さまだったのでしよう。そして今日の物語の最後では、彼らの思いに反して、リディアが彼らを無理に家に招待します。パウロたちの宣教旅行には、絶えず彼らの思い通りにはならない、聖霊の風が吹き続けていたのだと感じます。

分かち合おう

- 人生の歩みのなかで、私たちは「神さまによって開かれた」と感じることもあれば「神さまによって閉ざされた」と感じることもあります。その時には意味が分からず、後になってわかることも、時間が経っても結局よくわからない、納得できないこともあります。私たちの人生が、今日のパウロたちの旅のように、思い通りにいかないことばかりなのだとなれば、私たちが神さまに祈り、神さまの導きを仰ぐことには、どのような意味があるのでしょうか。これまでわからなかったこと、納得できなかったことも含め、自由に分かち合ってみましょう。
- パウロとバルナバのように、私たちはお互いにより選択を目指す中で、別々の道を進んで行くことになることもあります。パウロたちが神さまからの幻を一緒に受け止めたように(10節)、目の前の出来事を一緒に受け止められることもあれば、同じようには受け止められないこともあります。それらすべてを見守り、働いておられる聖霊なる神さまがおられるということに、心を留めたいと思います。いま私たちが、身近な人との間で、互いに違った受け止め方をしている事柄はないでしょうか。恐れずに言葉を交わし合える私たちでありたいと願います。

8課

5月23日

この幻を見るまでに

聖書

使徒言行録16章6～15節(参照15:36～16:5)

暗唱
聖句

主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話の注意深く聞いた。
使徒 16 : 14

聖書から…

パウロはイエスさまのことを伝えるため、テモテと旅に出ます。でもその先で、聖霊によってみ言葉を語ることを禁じられたり、向かおうとしていた土地に入ることを許されなかったりすることもありました。それでもパウロはくじけることなく福音を伝えるため、前へ前へと力強く進みます。そしてある夜、幻を見て自分が進むべき道を知られました。「ここへ向かおう！」と勇気づけられ、ついに船に乗って海を渡り、そこでイエスさまのことを伝えていきました。

私たちも、自分で願ったとおりに物事が進まないときがあるかもしれません。別の方法を選ぶとき、「もしかして、これが神さまが喜んでくださることかも！」と気が付いた経験はありませんか。「聖霊の働き」である神さまの思いは、後から気づくことが多いのです。パウロも、福音を伝えるために諦めませんでした。

活動①

「船出しよう！」

●準備●布や段ボール

パウロが船に乗って海を渡り、伝道の旅をしたことを覚えましょう。

- ①布や段ボールなど、メンバーが乗っても危なくないものを用意します。
- ②その上にメンバーが乗り、リーダーが引っ張ります。

海を渡って、マケドニアへ向けて出発です！メンバーは落ちないようにしっかりとつかまります。リーダーは危なくならないように、充分気をつけて引っ張りましょう。



活動②

ワークシート

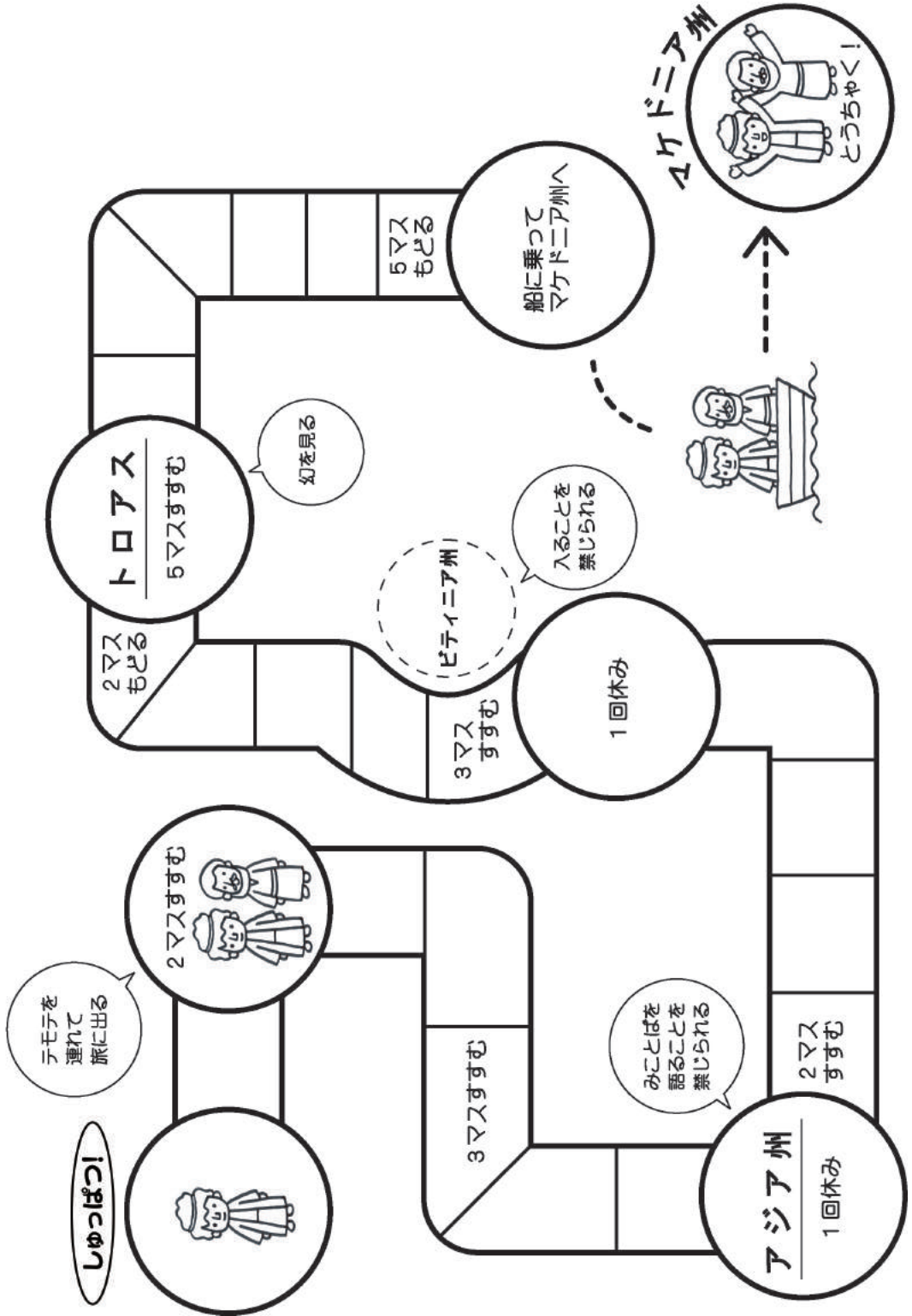
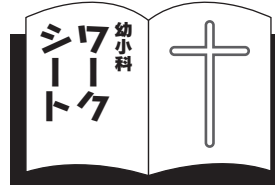
「伝道の旅すごろく」

●準備●ワークシートの拡大コピー、サイコロ、すごろくのコマ人数分

パウロの第2回伝道の旅の始まりです。

- ①すごろくのコマを左上のスタート地点に置きます。コマは、消しゴムを利用したり、手作りしたりしてもいいですね。
- ②右下のゴールへ向かって、順番にサイコロをふり、出た数だけコマを進めます。
- ③コマが進んだ場所にある指示に従います。
- ④今日の聖書を読みながら、すごろくを楽しみましょう。

伝道の旅すごろく



真夜中に賛美の歌を歌い 神に祈る

聖霊に導かれ、神のみ心と確信して、マケドニア州の都市フィリピに入っていったパウロたち一行は、祈りの場所に向かう途中で、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会い、その霊を追い出しました。彼女は占いをして主人たちに多くの利益を得させていたので、儲けのあてを失った主人は憤慨し、パウロとシラスを捕えてローマの役人に引き渡し、二人は鞭打たれた上に、牢に投げ込まれてしまうのです。

彼らは牢の一番奥に入れられ、足には木の足枷がはめられました。そのようにして二人は身動きする自由は奪われましたが、神を賛美し祈る自由は失いませんでした。真夜中に、パウロとシラスは賛美の歌を歌い、神に祈りました。その賛美と祈りの響きは、自由に空間を越えていき、他の囚人たちの場所にまで届き、彼らはこれに聞き入ったのです。ローマの役人は、パウロとシラスの身体を束縛することはできても、彼らの心を束縛することはできませんでした。

自害してはいけない。 わたしたちは皆ここにいる

パウロとシラスの賛美が響き渡る牢獄に、突然大地震が起こり、牢の扉も囚人の鎖も外れてしまう事件が起こります。牢の扉が開いていることに気付いた看守は、囚人たちは逃げ去ったものと思い込みます。その瞬間、彼

はこの責任の重大さにおののき、とっさに剣を抜いて自殺しようとするのです。逆を言えば、とっさに自殺を図るほど、彼はローマ帝国の責任追及や処罰への恐れに感情に心が縛られていたといえます。そのときパウロの言葉が彼の耳に響きます。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる」。牢の扉が開き、鎖が外れてしまったのに、パウロも囚人たちも、その場から離れませんでした。逃げることができても、あえて逃げずにいることのできる落ち着いた彼らの姿と、とっさに自殺を図るほど恐怖にしばられて生きてきた看守の姿はまさに対照的です。パウロとシラスの賛美の歌は、聞き入る者の心を、恐れる心から解き放っていたのです。

主イエスを信じなさい。 そうすればあなたも家族も 救われます

ローマの高官から裁かれることを恐れる看守は、恐れなくその場に続けたパウロとシラスの前に震えながらひれ伏し尋ねます。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」。二人は「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」と即答します。彼らの自由と迫害をも恐れぬ強さは、自分ではなく、本当に信頼すべき方を信じるゆえなのです。主イエスを信じるなら家族も救われると言われているのは、主を信頼する人を通して、人から人へと救いが広がっていくことを意味しているのでしょうか。

ローマ帝国の市民権を持つものであると聞いて恐れ

翌朝、ローマの高官は下役を通して、パウロとシラスを釈放する旨を通達します。しかしパウロは、自分たちがローマの市民権を持っていること、そのローマ市民を、裁判にもかけずに公衆の面前で鞭打って投獄しながらひそかに釈放するのはおかしいと、下役に告げました。この言葉を聞いたローマの高官たちは、恐れてパウロたちに詫びたのです。ローマの高官たちも、彼らより上の立場の人を恐れる心に縛られていたのです。一方、ローマの市民権を持ちながら、その権利を行使しないまま、主イエスの名のために投獄されて

準備のための聖書日課			
24日	㊦	イザヤ61:1~3	賛美の衣をまとって
25日	㊦	エフェソ5:15~20	主に向かって心からほめ歌う
26日	㊦	使徒言行録18:5~11	一家をあげて主を信じる
27日	㊦	使徒言行録22:22~29	生まれながらのローマ帝国の市民
28日	㊦	使徒言行録28:30~31	全く自由に何の妨げもなく
29日	㊦	使徒言行録16:16~24	投獄されたパウロとシラス

いたパウロとシラス。主イエスを信頼し、この世の力を恐れることから解放された自由な人の姿がここに 있습니다。



成人科

● 獄中においてパウロとシラスは、身動きする自由は奪われましたが、神

を賛美し祈る自由は失いませんでした。獄中の賛美で思い起こされるのは、第二次世界大戦中のドイツで、ナチスに抵抗する告白教会闘争を担ったディートリヒ・ボンヘッファーです。彼はナチスに捕らえられ処刑されるまでのおよそ二年間を収容所の獄中で過ごしました。その獄中において彼はたくさんの詩を書き残しています。その彼の賛美の歌は、『新生讃美歌』73番「善き力にわれ囲まれ」（日本バプテスト連盟発行）として、今に至るまで賛美されています。この賛美歌が獄

中において生まれ賛美されたことをイメージしながら、歌詞を味わい、与えられた思いを分かち合ってみましょう。

● 「主イエスを信じなさい。そうすればあなたも家族も救われます」とパウロが看守に告げたときの「救い」とは、どのようなイメージでしょうか？ 自ら命を絶ててしまいたいと思うほどの恐れからの救い、ローマの支配の束縛からの救い、あるいは、罪からの救い、神の裁きからの救いでしょうか？ この文脈においてパウロが宣言した「救い」を、それぞれどのようにイメージしているか語り合ってみましょう。

真夜中の賛美

聖書

使徒言行録16章25～40節(参照16:16～24)

暗唱
聖句

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。
使徒 16:31

9課

5月30日

フィリピの町に入ったパウロとシラスは、占いの霊に取りつかれていた女性から霊を追い出して、自由にしてあげました。ところが彼女を利用してお金儲けをしていた主人がパウロとシラスのしたことに腹を立てて「この人たちは、この町では許されていない風習を伝えて、町を混乱させている」と言いふらし、二人はローマの役人に捕えられて鞭打たれ、牢獄に入れられてしまったのです。

その夜、パウロとシラスは牢獄の中で賛美を歌い神さまに祈ります。二人は体の自由を奪われていても心は自由です。歌声は牢獄中に響きます。真夜中なのに、囚人たちは誰一人文句を言わず、二人の歌に聞き入っています。狭い牢獄の中で、いつも看守を恐れて心縛られていた囚人たち。パウロとシラスの賛美を聞き続けていた彼らは、不思議に心が自由になっていくのを感じたのです。

その時、牢の土台が大きく揺れました。すると不思議なことに、囚人を繋いでいた鎖は外れ、牢の扉は開いてしまいました。揺れに驚き目を覚ました看守が牢を見ると、扉が開いてしまっているではないですか。それを目撃した瞬間、看守は囚人が逃げてしまったと思いました。そして囚人を逃がしてしまった自分は、ローマの高官によって処刑されるのだと、心の中一杯に恐れが広がり、とっさに手に持っていた剣で死んでしまおうとしたのです。そのとき牢の中から声がしました。「自害してはいけない。



わたしたちは皆ここにいる」。

それはパウロの声でした。牢の扉が開いてしまったのに、パウロたちは落ち着いてそこに続けたのです。死ぬほどの恐れに取りつかれていた看守は、思わずパウロに尋ねました。「救われるためにはどうすべきでしょうか」。パウロとシラスは答えます。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」。人を恐れていた看守は、主イエスを信じることで心が自由になりました。そして看守もその家族も一緒にバプテスマを受けることになったのです。

翌朝、ローマの高官がパウロとシラスを釈放しようと下役に命じたことを知ったパウロは、「ローマの市民権をもつわたしたちを、裁判にもかけずに鞭打って投獄していいのですか?」と下役に問いかけました。下役から聞いた高官は、「これはまずい。上司に叱られる」と怖くなりパウロにあやまります。ローマの高官も人を恐れていました。牢獄に囚われていたパウロとシラスのほうが、実は心が自由だったのです。

真夜中の賛美

聖書

使徒言行録16章25～40節(参照16:16～24)

暗唱
聖句主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。
使徒 16:31

聖書から…

牢獄らうごくに入れられていたパウロとシラスたちの方が、ローマの高官たちよりも「実は心が自由だった」…そのことは、牢獄の中で賛美歌を歌う彼らの姿によく表されていると思います。彼らには、どんな人の力にも屈さない自由、状況に左右されない自由、自分たちの力を無理に行使しない自由（彼らは牢獄に入れられてもローマの市民権を行使せず、また牢の扉が開いて逃げ出すことができても逃げ出しませんでした）、そして自分たちだけでなく他の人たちをも生かすことができる自由さがありました。そんな彼らだったからこそ、主人たちによって束縛むくはくされていた女奴隷や（16～18節）、死の恐怖に捕らわれていた看守をも助けることができたのでしょう。

彼らのその自由の源は、「主イエスを信じる」信仰でした。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」（31節）と彼らが語ったイエスさまご自身が、「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」（ヨハネ 8:32）と語られていたことを思い起こします。パウロも、教会に向けた手紙の中で「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださいましたのです」と語っています（ガラテヤ 5:1）。

分かち合おう

- 「哲学対話」という取り組みを広げておられる、東京大学教授の梶谷真司さんは、「私たちは考えることによってはじめて自由になれる」（著書『考えるとはどういうことか——0歳から100歳までの哲学入門』幻冬舎）と言われています。私たちは無意識のうちに、色々なことに捕らわれ束縛されて、自分で考えていない、考えることができない状態に陥っていることがあるかもしれません。歴史を振り返ると、歌というものも時に、考える自由を奪う手段として利用されることもありました。今日の聖書の物語のように、人の心を自由にする歌とはどのようなもののでしょうか。私たちが普段歌っている賛美はどうでしょうか。
- 現代は、性別・国籍・人種・年齢など、私たちの間にある様々な違いが尊重されることを目指す「多様性の時代」と言われます。またバプテスト教会は歴史を通じて、「信条」と呼ばれるような同じ信仰の言葉を掲げることよりも、一人ひとり、また各個教会ごとの「信仰告白」というものを大切にしてきました。そのような中で、私たち・教会が同じ聖書の言葉を読んだり、同じ賛美歌を歌ったりすることにはどのような意味があるのでしょうか。改めて考えてみましょう。

9課

5月30日

真夜中の賛美

聖書

使徒言行録16章25～40節(参照16:16～24)

暗唱
聖句

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。
使徒 16:31

聖書から…

みなさんは、どんなときに賛美をしますか？もちろん、礼拝のときに賛美歌を歌いますね。自分の好きな賛美歌がある人もいると思います。

賛美とは、主をほめたたえることです。だから礼拝のときだけでなく、朝起きたとき、友だちと遊んでいるとき、困っているとき…、いつでも、どこでも、どんな方法でも、賛美できるのです。例えば、手話や踊り、楽器での賛美もありますね。そしてひとりではなく、誰かと心を合わせて賛美できることもうれしいことです。パウロとシラスは、真夜中の牢の中で賛美の歌を歌いました。私たちは、いつ、どんなとき、どんな方法で、そして誰と、主をほめたたえる賛美をささげるでしょう？

活動①

ワークシート

「自分の好きな賛美歌」

●準備●ワークシート人数分、鉛筆、消しゴム、こどもさんびかや『新生讃美歌』（日本バプテスト連盟発行）、教会で使っている賛美歌集など

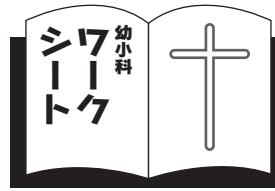
- ①色々な賛美歌集を見て歌いながら、自分の好きな賛美歌を2曲選びましょう。
- ②ワークシート♪マークのところに曲名を書き、その下に賛美歌の歌詞を書きます。
- ③点線のところで折って、自分の好きな賛美歌集のできあがりです。


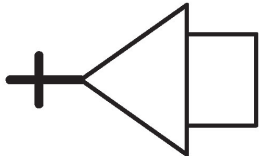

活動②

「どう賛美する？」

- ①リーダーは歌や楽器、手話や踊りなど、いろいろな賛美の方法があることを伝えます。
 - ②それぞれメンバーの好きな方法で、一緒に合わせて賛美しましょう。
手作り楽器を作って楽しんでも良いですね。
- 例)ペットボトルにビーズや木の実を入れてマラカス。
- ・牛乳パックや厚紙に、ペットボトルのフタを貼り付けてカスタネット。
 - ・空き箱に輪ゴムを張ってギター。





<p>_____</p> <p>の さんびかしゅう</p>	
	

ヨハネ福音書との関係

ヨハネの3つの手紙とヨハネによる福音書は伝統的には使徒ヨハネによって執筆されたものと理解されてきました。しかし「ヨハネ福音書記者は神の子の受肉の栄光を、他方ヨハネの手紙一の著者はイエスの十字架の血による贖いを強調しており、また、両者は終末思想と聖霊理解など主要思想を異にしている」（『新共同訳新約聖書略解』日本基督教団出版局）ことから、違う著者によるものと考える人もいます。一方「初め（アルケー）」「言（ロゴス）」「命（ゾーエー）」「証しする（マルテッレオー）」「御父（パテル）」「永遠の命（ゾーエー・アイオーニオス）」「御子（フィオス）」など、ヨハネによる福音書とヨハネの手紙一の序文には共通するキーワードが並んでいます。その意味では共通する神学思想をもつ共同体から生まれた文書と言うことができるでしょう。

聞いたもの、見たもの、触れたもの

「初めからあったもの」とはじまる手紙の序文が伝えようとしているのは、ヨハネ福音書における「初めに言（ことば）（ロゴス）があった」（ヨハネ 1：1）という永遠の神とともにあるロゴスのこととも、また主イエスによってこの世にもたらされた「命の言」とも理解できるのかもしれませんが、いずれにしろ、このヨハネの手紙の著者は、それらを観念的に捉えようとしているのではなく、聞き、見て、触れ

たものとして語っています。つまり人としてこの地上を生きた主イエスの生涯と教えに触れ、「命の言」を受け止めた信仰者として、真実に言葉を伝えようとしているのでしょう。

わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わり

人として地上を生きた主イエスを神の子キリストと信じる信仰者同士の交わりの大切さが語られています。教会の交わりに生きることは、御父と御子イエス・キリストの愛の交わりのなかに生きることと告げられています。この手紙を受け取った教会の人々の中に、聞いて、見て、触れたナザレのイエスがキリストであると、もはや信じられなくなり、離れてしまった人々が現れたことが、背景にあるようです。

光の中を、闇の中を歩む

ヨハネの手紙及びヨハネ福音書を執筆した共同体は、短い言葉で神の本質を定義することがよくあります。「神は光」「神は愛」「神は霊」などです。「闇の中を歩む」という表現は、「光の中を歩む」という描写とともによく用いられるユダヤ的な隠喩でもあります（イザヤ 2：5、9：1）。さて教会の中で、当時の霊肉二元論に影響され、伝えられてきたキリストの死による罪の贖いの教えから離れ始めた人々は、「自分には罪がない」（1：8）と言い、十字架のキリスト抜きに、光である

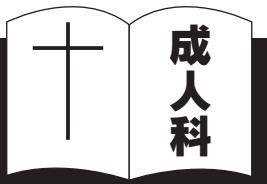
神との交わりの中を生きていると考えていたようです。その人々に向かって著者は「自分には罪がない」と言うのは「うそをついているのであり、真理を行ってはいません」(1:6)とさえ告げています。それはヨハネの共同体にとって「光の中を歩む」とは、光である神の言葉に自分の心が照らされ、自らの罪に気づいた上で「御子イエスの血によってあらゆる罪から清められ」(1:7) するという、神の恵みのなかを歩むことであつたからです。

神は真実で正しい方ですから

9節の「自分の罪を公に言い表すなら」は、原典のギリシア語には「公」という言葉はありません。罪の告白がなされるのは、罪の自覚や告白、悔い改めを個人的にではなく、交わりの中で捉えていくという共同体性(すなわち教会)を大切に考えたいからではないでしょうか。神によって罪を赦していただく条

準備のための聖書日課			
31日	㊦	ヨハネ1:1~5	暗闇の中で輝く光
1日	㊧	イザヤ2:1~5	主の光の中を歩もう
2日	㊨	ヨハネ3:16~21	永遠の命を得るために
3日	㊩	ルカ24:36~43	触ってよく見よ
4日	㊪	コリント一1:4~9	主の交わりに招き入れられて
5日	㊫	ヨハネ8:12~20	命の光を与えられて

件として「罪の告白」を理解するのではなく、むしろこの「罪の告白」というものを、「神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださる」(1:9)と言われる、神の真実と恵みに対する信頼からの「告白」として理解することは、大切なことでしょう。



●ヨハネの共同体にとって「光の中を歩む」ということは、光である神の言葉に自分の心が照らされ、自らの罪に気づいた上で「御子イエスの血によってあらゆる罪から清められ」(1:7) するという、神の恵みのなかを歩むことでした。それは「神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださる」(1:9) ことを信じて、自分の罪を告白しつつ歩むことと言えます。しかし現実には、互いに自分の罪を告白しあうということは、決して簡単なことではないように思います。語り合ってみましょう。

●教会の交わりとは、「御父と御子イエス・キリストの交わり」のなかに生きることであるとヨハネは語ります。そのことが、具体的な教会の交わりとして現れてくるのは、共に祈り、共に賛美し、共に礼拝を捧げる現場においてではないでしょうか？ このコロナ危機下における、孤独に痛む時代に生きる私たちにとって、共に捧げる礼拝は、深い交わりを体験する大切な現場です。私たちにとっての礼拝の意義や大切さについて、語り合ってみましょう。

光の中を歩む

聖書 ヨハネの手紙一1章1～10節

ことば 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。
暗唱 聖句 ヨハネ福音書 1：4

10 課

6月6日

昔、イエスさまがガリラヤの地でおはなしになった数々の命の言ことばを思い出しながら、ヨハネは教会に手紙を書き始めます。「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち命の言について」。教会に宛てて手紙を書いているヨハネの心は、少し傷ついています。なぜなら、この手紙を受け取ることになる教会には、もはやイエスさまをキリストとは信じられないと、教会の交わりから離れて行ってしまった人々がいたからです。それに動揺し、悲しみ、心を痛めている教会の仲間を励まそうと、ヨハネは手紙を書き始めます。それはヨハネ自身が、長い人生を教会の交わりの中で生き、イエスさまの命の言に触れ続け、たくさんの喜びを味わってきたからでした。ヨハネにとって教会の交わりは、まさに父なる神さまと子なるイエス・キリストとの交わりそのものでした。その喜びを伝えたい一心で、ヨハネは手紙を書き始めるのです。

ヨハネは教会から離れていった人たちが、よく語っていた言葉を思い出しています。「自分たちは神との交わりがある。だから自分たちに罪などないのだ」と、よく言っていました。その言葉を聞かされたとき、ヨハネは悲しい思いをしていました。なぜなら、この地上を確かに生きて、人々を愛し、最後には十字架につけられて血を流して死なれたイエスさまのことにその人たちは関心



がなかったからです。彼らにとってのキリストは、光り輝く神の子でした。彼らは「キリストが十字架につけられて死ぬわけがない。光の中にいるわたしたちには、そういうみじめなキリストは必要ない」とまでいいながら、イエスさまの十字架を信じる教会の仲間を馬鹿にすることが、ヨハネにはたまらなく悲しいことでした。ヨハネにとって、神は光のように自分の心の闇を照らす真実で正しいお方であり、その光に照らされて自分の罪に気づいたけれども、み子イエスの血によって罪ゆるされることを知ったことが、希望であり喜びだったからです。

ヨハネは離れていった人のことを思い、心を痛めています。それでも伝えなければならぬことは、確信をもって伝えるとヨハネは筆を取りました。その最初のころから、教会の交わりの中で聞きつづけてきた言葉。励まされてきた言葉。ヨハネ自身が初めから聞かされてきた、命の言を、彼はゆっくりと書き始めるのです。

光の中を歩む



聖書

ヨハネの手紙一1章1～10節

暗唱
聖句

ことば
言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。
ヨハネ福音書 1：4

聖書から…

「神は光であり、神には闇が全くない」(5節) そのような神さまに対して、私たちはどのような印象をもつでしょうか。それはある人にとってはもしかすると、見たくない、目をそらしたいと思うような自分自身や他人の姿を照らし出す、「恐ろしい」と感じるような光かもしれません。「キリストの十字架」は、私たちの闇を映し出したような出来事です。しかし、キリストが人として地上を生きられたのは、ご自身の命を通して私たちに神さまの愛と、罪の赦しという光を示してくださるためでした。

「交わり」という言葉が繰り返し使われています(3、6、7節)。それは、ヨハネ自身がイエスさまを信じて生きてきた中での実感や、信じる他の人たちと一緒に生きてきた中での実感がこもった言葉だったでしょう。今、そこから離れて行ってしまった人々を思いながら、彼はその「交わり」の中、神さまの「光の中」にある「喜び」(4節)を噛み締めながら、一つひとつの手紙の言葉を書いていったように思われます。ヨハネがこれらの言葉を伝えたことの背景には、彼自身がまさに教会の「交わり」を通して、この光なる神さまについて聞き、見、触れられる経験(1節)を通して救われたという実感があったのでしょう。

分かち合おう

- 「神は光であり、神には闇が全くない」(5節) という言葉を聞いて、どのように感じるでしょうか。若者言葉で、「陽キャ(陽キャラ)」「陰キャ(陰キャラ)」という言葉や(いわゆる「イケていない人」・「イケている人」のこと)、「病み(闇)」という言葉がありますが(体よりも心の不健康を指すことが多い)、「光」と言われると、何か眩しく、自分とは無縁の遠い世界のことのように聞こえる人もいるかもしれません。神さまの「光」、「光」である神さまについて、思うことを自由に分かち合ってみましょう。
- 「神には闇が全くない」(5節)そして「人間(自分)には罪がある」(8～10節) そんな私たちが神さまの光の中を歩むとは、一体どういうことでしょうか。「自分の罪を公に言い表す」(9節)とも書かれています(その意味については聖書の学びを参照)。自分(たち)の罪、内側にあるのに見えていなかったものが照らし出されて、それを見つめていくということとは、なんだか恐ろしく感じることもかもしれません。ただ同時にここでは、「交わり」という言葉が繰り返し使われています。その言葉には、どのような意味が込められていると思いますか。

光の中を歩む

聖書 ヨハネの手紙一1章1～10節

暗唱聖句 ことば 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。
ヨハネ福音書 1：4

聖書から…

私たちの心の中にはいろいろな気持ちがあります。うれしく楽しい気持ちでいっぱいになったり、友だちを大切にできなかったり、自分が一番偉くなったような気持ちになることがあるかもしれません。どきどきしたり、不安な気持ちになったりすることもあるでしょう。

今日の聖書には「神は光」とあります。光に照らされるとどうなるでしょう。真っ暗なところも明るく見えるようになります。神さまの光が輝くと、私たちのいろいろな気持ちや自分でも気づいていない自分がすべて、照らし出されます。

私たちが歩む道には、イエス・キリストが共にいてくださいます。「命の言」であるイエスさまと歩むとき、自分の明るいところも暗いところもすべて「神さまの光」に包まれていることが分かります。だから安心して、その光の中を歩むことができますのです。

活動①

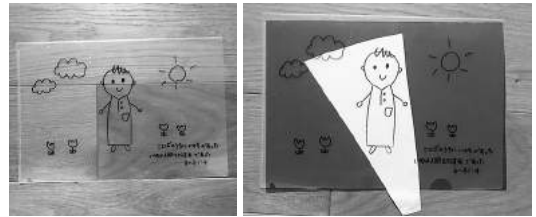
「私たちが照らす光」

●準備●クリアファイル、画用紙（白・黒）、油性マジック、

①クリアファイルを横にして、油性マジックで自分を描きます。今日の暗唱聖句も書きましょう。周りに好きな絵を描いたり、小さいメンバーは先に描いてあるところに色を塗ったりしても良いですね。その場合、ファイルの内側に絵を描いて

おいてあげると、塗るときに色がにじみません。絵が苦手なメンバーは、好きなイラストをファイルにはさんで写し描きもできます。

- ②白画用紙を写真の形のように切ります（クリアファイルより長めに切ります）。
- ③絵を描いたクリアファイルの中に、黒画用紙を入れます。
- ④クリアファイルと黒画用紙の間に、切った白画用紙を差し込んで動かすと、書いた絵が光に照らし出されます。一人ひとりが神の光に照らされていることを覚えましょう。



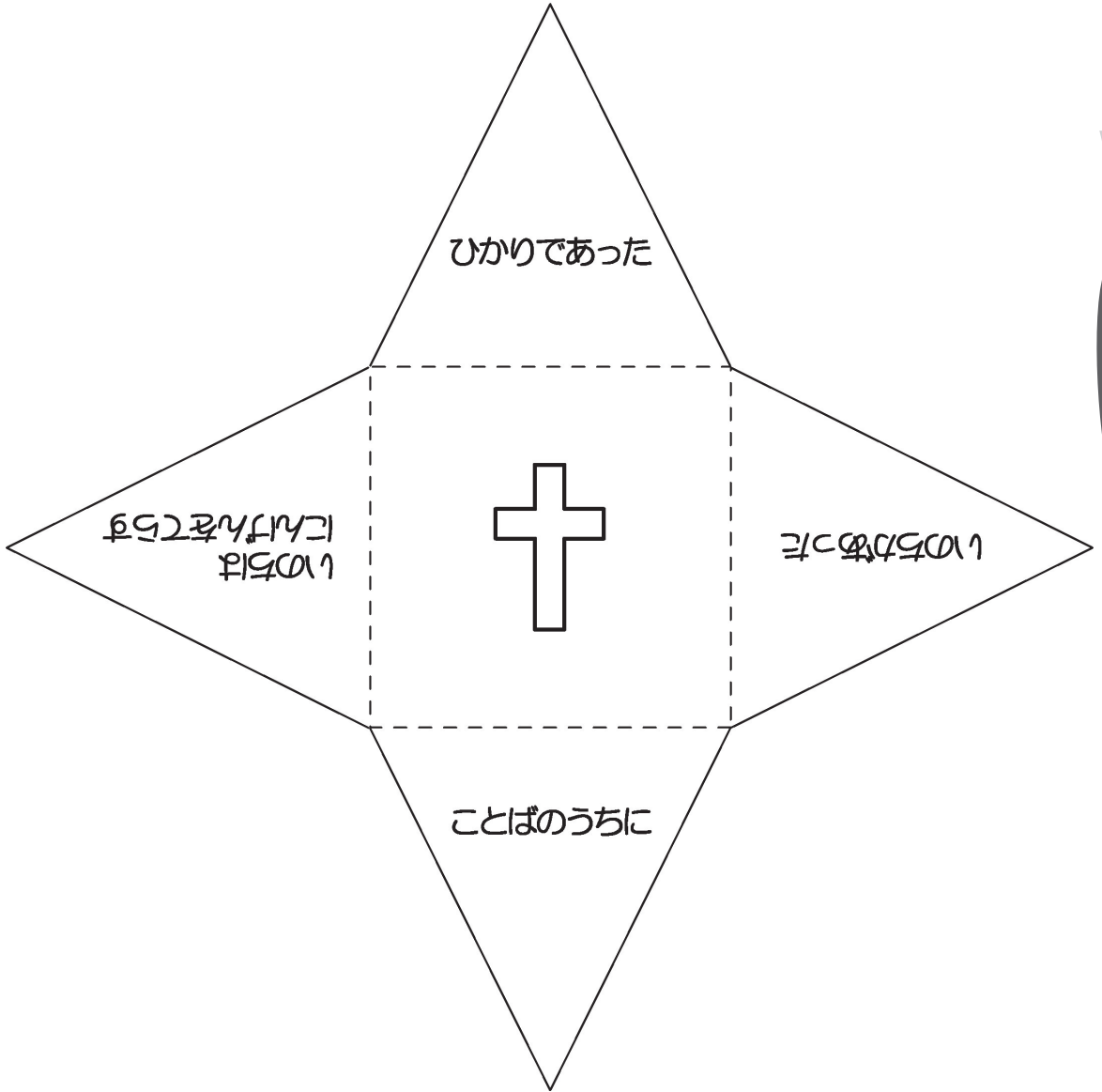
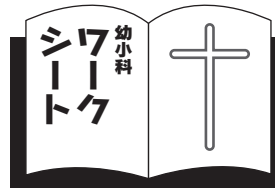
活動②

ワークシート

「暗唱聖句 神さまの光」

●準備●ワークシート、はさみ、色鉛筆

- ①ワークシートの線にそって、はさみで切り取ります。
- ②文字が書いていない面（裏）に色を塗ります。神さまの光はどんな光でしょう。考えながら好きな色で塗りましょう。
- ③一番上が「ことばのうちに」になるよう、暗唱聖句の順番に点線を山折りにして四角にしたらでき上がり！
上から順に聖句を読みながら開いていくと、光になります！光の中を歩む喜びを覚えましょう。



イエスが歩まれたように

聖書 ヨハネの手紙一2章1～17節

暗唱 聖句 神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。
1 ヨハネ 2：5

わたしの子たちよ

このヨハネの手紙一の著者は、手紙を受け取る人々に「わたしの子たちよ」と呼びかけています。我が子を守り育てる親のような思いをもって「これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです」と著者ヨハネは諭じているのでしょう。

罪を償ういけにえ

「罪を犯さないようになるため」といいながら一方で、「たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです」（2：1～2）と書かれています。「罪を償ういけにえ」を「罪のための宥め（なだ）のささげもの」と訳す聖書（新改訳2017）もありますが、ここではイエス・キリストにおける、罪の贖（あがな）いの信仰を、はっきりと宣言しています。このようにヨハネが教理を強調する背景には、このヨハネの手紙を受け取った教会における問題の本質に、イエス・キリストに対する信仰理解の混乱があったからと思われる。

イエスが歩まれたように歩む

神を知り、神の内にいる私たちは、イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりませんとヨハネは告げています。ここでヨハネが、「イエスが歩まれたように」という一言

で伝えようとしていることのすべてはわかりません。ただヨハネが教会の一人ひとりを思い起こし、憎み合うのではなく、互いに愛し合うことを願って手紙を書くこともまた、「イエスが歩まれたように」ヨハネが歩もうとしている姿であると言えるでしょう。

「光のなかにいる」と 言いながら兄弟を憎む者

9節において批判されている人々とは、当時の先端思想（せんたんしきそう）に影響され、教会内において「自分たちこそ光の中にいる」と言っていた人々と思われまゝ。彼らはイエス・キリストにおける罪の贖（あがな）いの教えは、愚（おろ）かな古い教えであると吹聴（ふいちょう）し、信仰の交わりを壊していたのでしょう。ヨハネは動揺する教会に向かって「愛する者たち、わたしがあなたがたに書いているのは、新しい掟ではなく、あなたがたが初めから受けていた古い掟です。この古い掟は、あなたがたがすでに聞いたことのある言葉です。しかし、わたしは、新しい掟として書かれています」（2：7、8）と語ることで、目新しい教えに振り回されず、キリスト者になった初めの頃から聞いてきたことを、今、心新たに聞き直していこうと、告げるのです。

世にある教会への励まし

一方、最初から聞き続けてきた教えのもとに生きようとしている人々を励ますために、ヨハネは「子たちよ」「父たちよ」「若者たちよ」とそれぞれに呼びかけています。

教会のなかに、実際にこのような年齢的な三つの階層、グループがあったのかもしれませんが、よりありえそうなのは、この3種類の呼びかけ方をもって、キリスト者の信仰における成長段階を表現している、というものです。

たとえば、バプテスマを受け、信仰生活を始めたばかりの人々を指して「子ども」と呼び、信仰生活のなかで、互いに愛し合うことを学ぶ成長のプロセスにある信仰の「若者たち」がいて、やがて長老とよばれていく信仰における「父たち」がいるという理解です。

たしかに、12節で「子たちよ、…イエスの名によって、あなたがたの罪が赦されているからである」といわれているのは、最初のバプテスマのことを言っているようにも思えます。また「若者たち」と呼ばれている人々は「悪い者に打ち勝った」といわれています

準備のための聖書日課

7日	㊦	ヨハネ14:15~24	共におられる弁護者
8日	㊧	ヨハネ14:25~31	心を騒がせるな
9日	㊨	ヨハネ13:31~35	新しい掟に生きる
10日	㊩	ヨハネ3:11~18	わたしたちは愛を知っている
11日	㊪	ヨハネ15:1~10	主イエスにつながる
12日	㊫	ヨハネ2:18~27	御子の内にとどまる

が、信仰における誘惑との闘いを経験している人々への呼びかけとも理解できます。そう理解するなら、この世における信仰の闘いについて語る、15節以下の言葉ともつながるのではないのでしょうか。



成人科

● ヨハネの手紙は「たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです」(2:1~2)と、はっきりとイエス・キリストにおける、罪の贖いの教えを語ります。当時の教会が、目新しい教えと出会い、動揺するなか、初めから聞いてきた教えに留まるようにと勧めるこのヨハネの手紙は、現代の多様な価値観の中を生きる私たち、また教会に、今どこに立っているのかと、問いかけているのではないのでしょうか？

● ヨハネが語る「神の内にいる」という抽象的な表現だけでは、正直、捉えどころがありません。「神の内にいる」ということを「イエスが歩まれたように自らも歩むこと」とヨハネは語り直しています。この地上を確かに生き、人々を愛されたイエスさまの姿を、「神の内にいる」キリスト者の生き方と重ねてイメージすることはできるでしょう。しかしそうなると「神の内にいる」ということは、とても難しいことにも思えてきます。「神の内にいる」とは私たちにとって、どのような状態なのでしょう？自由に語り合ってみましょう。

イエスが歩まれたように

聖書 ヨハネの手紙—2章1～17節

暗唱 聖句 神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。
1 ヨハネ 2 : 5

ヨハネは教会の一人ひとりのことを思い起こしながら、手紙を書いています。バプテスマを受けたばかりの人々。誘惑と闘いながら、教えられた教えに生きようとしている人々。信仰の闘いを闘い抜いてきた人々。外から入ってきた新しい教えに心惹かれて、教会から離れていった人々など。ヨハネは一人ひとりをまるで我が子のように大切に思い、それゆえに厳しい口調で、また慰めに満ちた言葉で、諭しつつ語りかけるようにして手紙を書いています。

その昔、主イエスから直接教えを受けた使徒たち。また異邦人の教会にたくさんの手紙を書いたパウロ。彼らから巡り巡って伝えられていった、主イエスこそ全世界の罪を贖うキリストと信じる信仰とその教えを、ヨハネは古い教えとしてではなく、あらためて新しい教えとして、手紙に書き記すことにしました。なぜなら教会のなかに、これこそ新しい教えであると、はやりの思想や哲学を持ち込み、「私たちこそ神を知っている」と、ヨハネにしてみれば偽りを教える人々によって、教会が混乱してしまい、たがいに愛し合うどころか、憎み合ってしまうようなことが、起こっていたからです。

ヨハネはこのつらい状態を思い起こしてしまうと、つつい厳しい言葉で『神を知っている』と言いながら、神の掟を守らないものは、偽り者だ』と書いてしまいました。しかしそれはヨハネが彼らのことを「我が子」のように愛するがゆえでした。



むしろヨハネは、教会の一人ひとりの顔を思い出しつつ、最近バプテスマを受けたばかりの人には「子たちよ」とやさしく呼びかけて「あなたがたの罪はゆるされているのだよ」と語って励ましたいのです。そして誘惑と闘っている人々には「あなたがたは悪い者に打ち勝った」と語りかけ励まし、混乱してしまった教会の中心で、なお人々を支えていた長老たちには、「あなたがたこそ、初めから存在なさる方を知っている」人々ですと、エールを送りたくて、ヨハネは手紙を書いているのです。きっと、イエスさまならそうなさると信じて。

最後にヨハネは、長い間、イエス・キリストを信じる信仰生活を送ってきた信仰者の先輩として、「世も世にあるものも、愛してはいけません」「世も世にある欲も、過ぎ去っていきます」と書き添えます。長い信仰生活を送ってきたヨハネは、今まで何度も「これこそが真理だ」と教えては消えていったこの世の教えのむなしさを知っていたのです。

イエスが歩まれたように

聖書 ヨハネの手紙一2章1～17節

暗唱 聖句 神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。
1 ヨハネ 2：5

聖書から…

私たちは、目新しいものについ心を惹かれてしまうということがあります。さらには、その新しいものについて「知っている」ということに、何か優越感を感じたり、逆に「知らない」という人（たち）は、自分自身を低くしてしまう（自己卑下）ことがあるかもしれません。

ユダヤ人たちの間でも、モーセの「律法」という教えをよく「知っている」ファリサイ派の人々や律法学者たちが、強い立場にいました。イエスさまは、そんな彼らのところに来て「あなたがたに新しい掟を与える」（ヨハネ福音書 13：34）と言われました。しかしそれは決して「新しい」教えではなく、「律法」の中で神さまが繰り返し語られていたことでした。手紙を通してヨハネが人々に伝えようとしたこともまた、「新しい」教えではなかったわけですが、神さまの大切な教えを、愛情を込めてあらためて伝えようとする彼の姿は、「新しい掟を与える」と言われたイエスさまの姿と重なります。

ヨハネがイエスさまを指して使った「弁護士」（1節）という言葉は、彼自身がイエスさまによって罪を赦され、生かされていることを表している言葉であり、彼もまた、そのイエスさまが歩まれたように、彼の愛する人々を励まし生かそうとしているのでしょ

分かち合おう

- 私たちが「新しい」ということ、「知っている」ということに心を惹かれ、それがよいものであると感じるのはどうしてでしょうか。ヨハネが問題視した「神を知っている」（4節）ということと、教会の人々を励まして言った「神を知っている」（3、14節）ということとは、どこが違うのでしょうか（他にも「神の内にいる」「光／闇の中にいる」という言葉が対比されています）。「弁護士、正しい方、イエス・キリストがおられます」（1節）ということが、大切なポイントのように思います。

- ヨハネは、教会にいる様々な人々に対して、その成長のプロセス、教会における立場や経験に応じて、勧めと励ましの言葉を送っています。またそこでは、「神の掟／言葉を守るなら」（3、5節）と厳しい言葉も使われています。その背後には、教会にいる人々を「大切にしたい。守りたい」という彼の強い思いがありました（聖書の学び参照）。教会において「青少年」と呼ばれる世代の皆さんは、教会でそれこそ「若者」として見られ、様々なお勧めや励ましの言葉をかけられることがあるかもしれません。それらの言葉をどのように受け取っておられるでしょうか。うれしかった言葉、厳しかった、辛かった言葉など、話せる範囲で話してみてください。

イエスが歩まれたように

聖書 ヨハネの手紙一2章1～17節

暗唱聖句 神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。
1 ヨハネ 2：5

聖書から…

ずっと昔に贈られたプレゼント。大人から子どもへ、またその子どもへと渡されて、今私たちのところに届きました。さて、プレゼントの中身はどうなっているでしょう。箱は古くなっていても、贈り物は変わらず古くなることなく、私たちのもとに届けられました。その贈り物はイエスさまです。そして、イエスさまを通して知った神さまの愛です。ヨハネは、「イエス・キリストこそ私たちが一番大切にすることだよ」と、もう一度この贈り物を新しい箱に入れてプレゼントするため、手紙を書きました。ずっと昔に贈られたとしても、どんなに遠いところへ届けられたとしても、その贈り物は古くなったり変わったりすることなく、今も大切な教えとして私たちのところに届けられているのです。

一緒に入れても楽しいです。箱に入れた日付を書いておくと良いですね。

③箱を置く場所をみんなで決めて、忘れないようにしましましょう。土の中に埋めるのも楽しいです。

④学年が終わる頃や数年後、良い時期を決めて、その時まで待ちます。

⑤箱を開けた時にみんなで聖書を開いて、紙に書いた聖書の箇所をみんなで読みましょう。時間が経って箱は古くなったとしても、主の教えは変わらず私たちに届けられていることを覚えます。自分が書いた好きなものや気になっていたことは、そのときにはどう変化しているでしょうね。

活動①

「変わらない贈り物」

●準備●箱や缶、紙、鉛筆、消しゴム、メンバーの好きなもの

①今日の暗唱聖句「ヨハネの手紙 1 2:5」を紙に書きます。自分の名前と、今自分が好きなこと、気になっていること等も一緒に書きます。

②書いた紙を箱や缶に入れて、ガムテープなどでしっかりふたを閉めます。メンバーが入れておきたいものも持ち寄って、

活動②

ワークシート

「暗唱聖句めいろ 神の言葉をたどろう！」

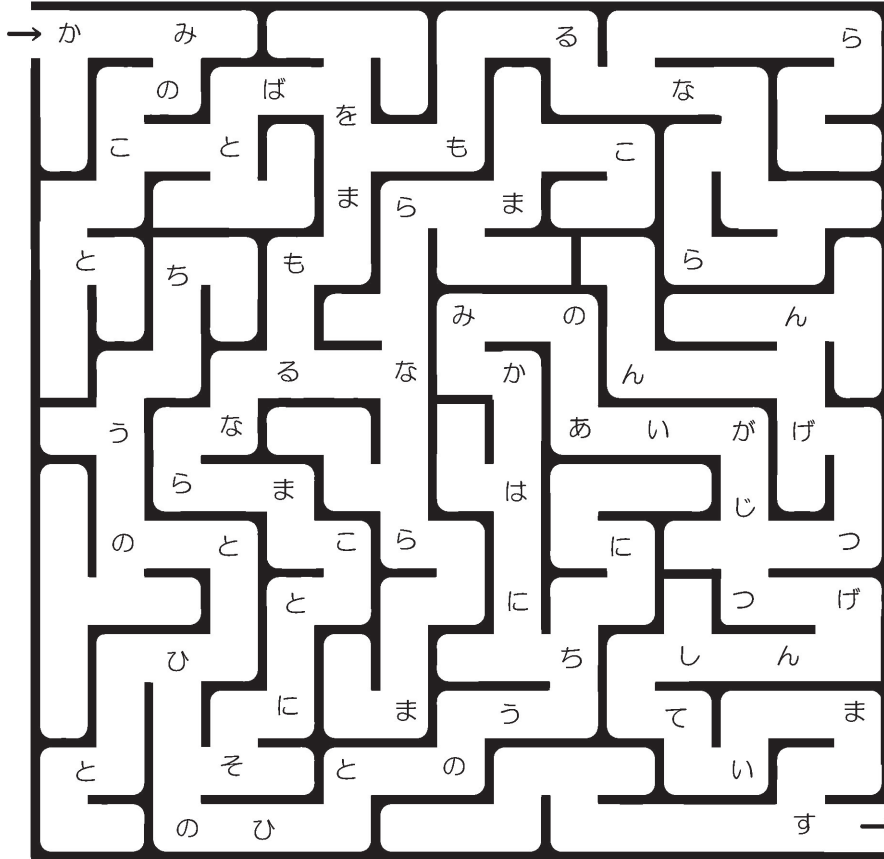
①今日の暗唱聖句を読みます。

②ワークシートのめいろを、スタートから暗唱聖句の言葉をたどってゴールまで進みます。

全員ゴールできたら、みんなで暗唱聖句を言います。み言葉を大切に、神さまの愛が一人ひとりのうちにあることを覚えましょう！



かみのことばをまもるならまことにそのひとのうちにはかみのあいがじつげんしています



11課

6月13日



互いに愛し合う

聖書

ヨハネの手紙一4章7～21節

暗唱
聖句

わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。
1ヨハネ4：19

互いに愛し合いましょう

ヨハネの手紙の著者が教会に手紙を書き送った時、教会では仲間だと思っていた人々が「イエスがメシアであることを否定」(2：22)し、教会から離れて行ってしまうという、つらい経験をしていました。そのように傷ついてしまった教会の人々に、ヨハネはこの手紙の中で何度も「互いに愛し合いましょう」と語りかけ続けます(3：11、23)。ヨハネはまるで螺旋階段を上るようにして、この「互いに愛し合う」というテーマを繰り返し語ってきましたが、ついにこの個所においてその思いは頂点に至ったといえるでしょう。

「神は愛だから」と告げたヨハネは、続いて「神は、独り子を世にお遣わしになりました」(4：9)「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(4：10)と語ることで、「神の愛」とは感情や観念のことではなく、み子イエス・キリストのその生きざまと死において、この歴史のなかに明らかに示されたと告げるのです。このイエス・キリストにおいて示された神の愛を知り、神に愛されているのであるから、「互いに愛し合うべきです」とヨハネは告げるのです。

神は愛だからです

キリスト者同士が互いに愛し合う根拠を、ヨハネは「愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているから」「神は愛だからです」と告げていきます。つまり、キリスト者が互いに愛し合うのは、人間愛や仲間意識にその根拠があるのではなく、神は愛であるからであり、その神から生まれ、神を知るもの同士は、互いに愛し合うことがもはや必然であり、それゆえに「愛することのない者は神を知りません」とさえヨハネは告げるのです。

わたしたちが神を愛したのではなく

ヨハネは「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛した」(4：10)「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」(4：19)と、人間の愛に先行する神の愛について繰り返し語ります。神が人を愛されるのは、人間の側の愛に触発されてではなく、「神は愛」ゆえに、神は無条件に人を愛されるのです。

神の愛がわたしたちの内に示されました

キリスト者同士が互いに愛し合う根拠を、

さらにヨハネは、この無条件の神を「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです」(4：18)と語ります。人間の愛は条件付きであり、条件を満たせば愛され、満たさなければ愛されず、罰を恐れることさえあります。しかし「神の愛」は人間の側がどうであれ「神は愛」ゆ

12課

6月20日

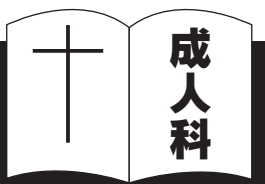
えに変わることはない完全な愛であり、それゆえに恐れは締め出されてしまうのです。

「神を愛している」と 言いながら兄弟を憎むもの

霊肉二元論れいにく に びんろんの教えに影響され、イエス・キリストに表された神の愛を否定しながらなお「我々は神を知っている」「神を愛している」と言っていた人々を意識してヨハネは『「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽りものです。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」(4:20)と告げます。霊肉二元論とは、目に見える肉体より、目に見えない精神を価値あるものとみなすので、目の前の人を憎みながら、目に見えない神を愛することが両立できるのです。しかし今や、

準備のための聖書日課			
14日	㊦	ヨハネー2:28~3:10	神の子と呼ばれて
15日	㊦	ヨハネー3:19~24	神の御前にある安心さ
16日	㊦	ローマ5:1~11	御子の命による救い
17日	㊦	コリントー12:31後半~13:13	愛は忍耐強い
18日	㊦	ヨハネ15:11~17	主の選びを信じて
19日	㊦	ヨハネー4:1~6	世に属する偽預言者

目に見えない神は、肉体をもつみ子イエス・キリストにおいて、この物質世界を愛されました。ゆえに目に見えない神を愛することと、目にみえる兄弟を愛することは、もはや切り離すことはできないのです。



●ヨハネの手紙を受け取った教会では、仲間だと思っていた人々が教会から離れて行くという、つらい経験をしたと思われます。それゆえにヨハネは繰り返し「互いに愛し合しましょう」と告げるのです。人間関係の破れはつらく悲しい体験です。しかしその痛みを経験したからこそ、互いに愛し合うことの大切さに、気付くことができるのかもしれない。今までの教会の関係の中で、互いに愛し合うことの難しさを経験したことはあるでしょうか？そして、そのつらい経験がむしろ、神の愛や、互いに愛し合うことを意識させたことはあるでしょうか？

- ヨハネは『「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽りものです。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」(4:20)と告げます。目に見えない神を熱心に信仰する営みが、目に見える他者を愛し、共に生きる方向に向かわせるのではなく、むしろ他者批判と分離の方向に向かわせることがあるとしたら、その神への信仰は、どこが問題なのでしょう？
- 6月23日「沖縄(命どう宝)の日」をおぼえます。「命こそ宝」という言葉の前に、イエス・キリストによって示された神の愛を、私たちはどのように表すことができるでしょうか。

互いに愛し合う

聖書 ヨハネの手紙一4章7～21節

暗唱
聖句

わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。
1 ヨハネ 4:19

12
課

6
月
20
日

ヨハネは、教会のなかにある仲たがいや争いがあることに心を痛めつつ、さらに手紙を書き進めています。手紙を書き進めていても、いつの間にか同じことを繰り返し書いていることもありました。特にヨハネは教会に向かって「互いに愛し合ひましよう」と繰り返し書き記さずにはいられなかったのです。その思いは手紙を書き進めていくうちに、次第に高まっていき、ついにヨハネは感極まってこう書き記しました。「愛する者たち、互いに愛し合ひましよう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです」。

どうして教会のなかに争いがあり、互いに愛し合えないのか、ヨハネにはある確信がありました。それは「愛は神から出る」のであり、この世の知恵や知識から出るのではないという確信です。この世の知恵や知識からは決して出ることのない驚くべき神の愛。その神の愛とは、わたしたちの罪をゆるすため、神は独り子イエス・キリストをこの世に遣わされたことにあるのだと、ヨハネは心震える思いで、書き始めました。わたしたちが神を愛したから、神はわたしたちを愛してくださるのではなく、神がすでにみ子イエス・キリストを与えてくださるほどに、わたしたちを愛して下さっているのだから、わたしたちも互いに愛し合おうではないか。そのようにして、ヨハネ



はくり返しくり返し、「互いに愛し合おう」と書き記します。なぜなら、目に見えるお互いが、互いに愛し合うからこそ、目に見えない神の愛は、全うされるとヨハネは信じているからなのです。

ヨハネはある人々のことが心にかかっています。その人たちは、「わたしたちは神を愛している」と言い、宗教心に溢れ、新しい知識を学ぶことに熱心であるのに、同時にその人たちは仲間の悪口をいい、憎んでさえいる状態に、ヨハネは心を痛めていたのです。ヨハネはその矛盾に気付いてほしいと願いつつ、『「神を愛している」と言いながら、兄弟を憎むのは偽りではないか』と書きました。目に見えない神が、この世を愛して、形あるものとしてのみ子イエス・キリストを遣わされたのなら、神を愛することと、目の前の仲間を愛することはもはや切り離せないはずだからです。ヨハネは祈りつつ、くり返します。「互いに愛し合いなさい」「神を愛する人は、きょうだいをも愛するべきです」と。

互いに愛し合う



聖書

ヨハネの手紙一4章7～21節

暗唱
聖句

わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。
1 ヨハネ 4：19

聖書から…

「神は愛だから」(8節) 私たちが愛し合うことの何よりの根拠として、そのことを確信をもって語るヨハネの言葉の一つひとつが、力強く響いてきます。それらの言葉は、むしろ強過ぎるようにも思われます。「愛することのない者は神を知りません」(同節)『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」(20節)。そのように言い切ってしまう言葉は、どこか条件付きの価値観のようであり、無条件の神さまの愛とは相反するようにも感じます。しかしヨハネは、そう言い切ってしまうほどのもので、葛藤を目の前にしながら(聖書の学び参照)、切実な思いを訴えるようにして、それらの言葉を書き送ったのでしょう。

ヨハネはここまで手紙の中で繰り返し書いてきたように、彼が具体的に経験した神さまの愛、神の子イエスさまの姿を、ここでも指し示しています。「愛する者たち、互いに愛し合おう！ イエスさまがわたしたちを愛されたように。この愛の内に、一緒にとどまろう！ 大丈夫。神さまが、イエスさまが、わたしたちの内にとどまってくくださるから！」。ヨハネの切実な思いは、彼の愛する者たちに届いたでしょうか。

分かち合おう

- 20節のヨハネの言葉は痛烈です。「愛する」「愛される」という言葉は、私たちが生きている中で経験する、あらゆる人との関係性と結びついている言葉です。このことと向き合うとき、私自身がこれまで経験してきた人間関係、いま現在向き合っている(向き合われている)人との関係を無視することはできないでしょう。「(愛することが)できない」ということに落胆する必要はありません。なぜなら「神がまずわたしたちを愛してくださったからです」(19節)。この神さまの「愛」を安心して実感できるような、「互いに愛し合う」人間関係を、私たちは大切に育んでいきたいと思えます。
- 「互いに愛し合う」という文脈の中で、「恐れ」(18節)という言葉が唐突に出てきたように感じます。「愛する」と「恐れ」の関係について、思うことを分かち合ってみましょう。その際に、この箇所でも繰り返し使われている「(神がわたしたちの／わたしたちが神の)内にとどまっている」という言葉についても、思い巡らしてみてください。お互いの言葉を大切に受け止め合いながら、安心して話ができるように心がけてみてください(何も話さなくてもいい、その安心感も大切に)。

12課

6月20日

互いに愛し合う

聖書 ヨハネの手紙一4章7～21節

暗唱 聖句 わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。
1 ヨハネ 4:19

聖書から…

コップにジュースが注がれて、もう満杯になっています。でもまだまだジュースは注がれ続けます。あ、あふれちゃう！コップにあふれるほどのジュース。そんなコップのように、私たちは神さまの愛でいっぱいになっています。「あなたのその存在が大切だよ」と、あふれるほどの愛が注がれ続けているのです。

コップに注ぎきれないジュースはどうしましょう。残しておくなんてもったいない。隣の人にも注ぎましょう。自分だけでなく他の人にも注げるくらい、私たちはいっぱい神さまから愛をもらっているのです。「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」。神さまの愛であふれている私たちは、隣の人を愛することができる。なんてうれしいことでしょう！

活動①

「あふれる愛」

●準備●コップ人数分、あふれるくらいたくさんのおいしいジュース

おいしいジュースを分け合って、みんなで飲みましょう。誰にでも、神さまの愛がいっぱい注がれていることを喜びます。リーダーはコップ満杯に注いであげてくださいね。おかわりももちろん良いですね！でも、おなかをこわさないくらいにしましょうね！

活動②

ワークシート

「愛がいっぱい」

●準備●ワークシート人数分、ハートスタンプ、スタンプ台

ワークシートの真ん中にいるのは自分です。顔や洋服を描いて色を塗ります。

自分の周りにハートのスタンプをたくさん押し、神さまの愛でいっぱいになっていることを喜びましょう！

他のカードにハートスタンプをたくさん押し、友だちにプレゼントしても良いですね。

〈ハートスタンプを作ってみよう！〉

●発泡スチロール(食品トレー)、油性ペン
油性ペンを発泡スチロールにじっくり当てると、ペンを当てた部分が溶けて凹みます。できたスタンプは、ペットボトルのキャップやコルクに貼ると押しやすいです。

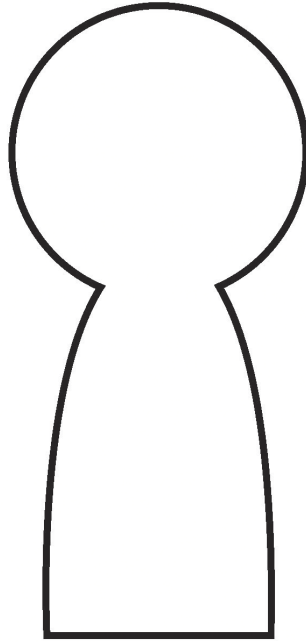
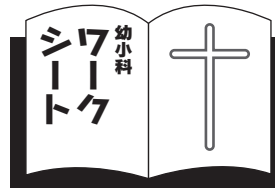
●トイレットペーパーの芯

芯を1箇所内側に折り、反対側をとがらせてハート型に整えます。

●他にも消しゴムスタンプや粘土をハート型にしたものでもスタンプできます。

紙の下に新聞紙や布を置いておくと、スタンプしやすいです。いろんなスタンプの方法や作り方を考えてみると楽しいですね。





12
課

6
月
20
日

「わたしたちが愛するのは、神さまがまず
わたしたちを愛してくださったからです」
ヨハネ I 4:19



永遠の命 イエス・キリスト

聖書 ヨハネの手紙—5章6～15節

暗唱 聖句 この方こそ、真実の神、永遠の命です。
1 ヨハネ 5：20

この方は、水と血を通して 来られた方、 イエス・キリストです

主イエスに対する信仰理解が混乱していた教会に、ヨハネは「だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか」(5：5)と主イエスが神の子メシアであると宣言すると同時に、その方は「水と血を通してこられた」と証しします。「水と血を通して」「水と血によって」と言われている「水」とは、主イエスが受けられた水のバプテスマのことです。「血」とは主イエスの十字架上の死を意味しています。同じ流れの共同体から生まれた書といわれるヨハネの福音書の1章31節以下には、主イエスがバプテスマを受ける記事があり、イエスが水のバプテスマを受けた時、イエスは神の子であるという宣言とともに、聖霊が降った出来事が記されています。しかし同時にその主イエスは「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1：29)と言われ、十字架の死によって世の罪を贖うメシアと理解されているのです。ヨハネの手紙があえて「水だけではなく」と書いているのは、教会のなかにいたある一部の人たちが、神の子としての水のバプテスマは認めても、神の子の死によって、罪の赦しが得られるとは信じなかったからでしょう。ゆえにヨハネは「水と血によって」という表現で、主イエスの死が、世の罪を赦すための、神の子の死であったことを証しするのです。

神を偽り者にしてしまっています

ヨハネはこの手紙を受け取る教会に「わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです」(1：2)と語り始めました。つまりヨハネが伝えようとしていることは、独自の宗教思想などではなく、彼自身も受け取ったイエス・キリストについての証しを、彼もまた伝えようとしているのです。み子イエス・キリストの本質について語るができることすれば、それは神のみであり、その「神が御子についてなされた証し」(5：9、10)を受け取って信じたヨハネもまた、この手紙においてそれを証ししているのです。ゆえにヨハネが証ししている「神が御子についてなされた証し」を信じないということは、み子について証ししておられる神ご自身を「偽り者」にしてしまっているとさえ、ヨハネは言ったのでしょ。

永遠の命を得ていることを 悟らせたいからです

ヨハネはこの手紙の冒頭をこう始めています。「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです」(1：1～2)。

この「命の言」、「永遠の命」と表現される

13課

6月27日

み子イエス・キリストの証しを伝えるために書き始められたこの手紙は、その目的通り「この方こそ、真実の神、永遠の命です」(5:20)と宣言して終わります。この「永遠の命」とは、肉体は滅びるが、魂は永遠であるという、**靈魂不滅**を意味しているのではなく、十字架上で確かに死に、その絶望の死から神によって復活させられた、み子イエス・キリストにある命であり、このお方と愛の関係のなかに生かされている、わたしたちの内にある命そのものです。

最後にヨハネは、分裂の痛みを感じていた教会に対して「御子と結ばれている人にはこの命がある」(5:12)「これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいからです」(5:13)「神に願ったことは既にかなえられている」(5:15)と語りかけ、

準備のための聖書日課

21日	㊦	ヨハネ5:1~5	世に打ち勝つ信仰
22日	㊧	ヨハネ16:25~33	主の勝利にあずかる
23日	㊨	ヨハネ1:29~34	世の罪を取り除く神の小羊
24日	㊩	ヨハネ19:31~37	流れ出た血と水
25日	㊪	ヨハネ14:7~14	主の名によって願う
26日	㊫	ヨハネ5:16~21	主こそ真実の神、永遠の命

あなた方が信じているみ子イエス・キリストにある永遠の命の喜びに、今まさに生きていくようと、教会を励ましつつ、この手紙を閉じるのです。



成人科

●ヨハネの手紙は一貫して、人として生きたイエスの死が、世の罪を赦すための、神の子の死であったことを証します。これは教会が作り出したものではなく、「わたしたちは見て、あなたがたに証し、伝えるのです」(1:2)と、**徹頭徹尾**「証し」として語られるのです。そして、この「証し」を信じるべきであるとか、信じるようにと命じるようなことはしません。だれもが信じやすい教えだから伝えようとするのではなく、受け取った神の「証し」を、そのまま伝えようとするこの手紙のあり方から思うことを、分かち合ってみましょう。

●「肉体は滅びるが、魂は永遠であり、人は死ねば魂だけが天国に行く」という靈魂不滅の教えを信じている人は、たくさんおられるでしょう。キリスト者においても、そのような意味で「永遠の命」を理解している方もいるかもしれません。ですから、神学の学びは大切です。今週は神学校週間を覚えています。「牧師や伝道者になる人が神学校で勉強するもので、自分たちには関係ない」と思われがちですが、「神学する」とは、神を信じ、永遠の命に生きるとはどういうことなのか、聖書から考え続ける営みではないでしょうか？神学することの大切さについて、語り合ってみましょう。

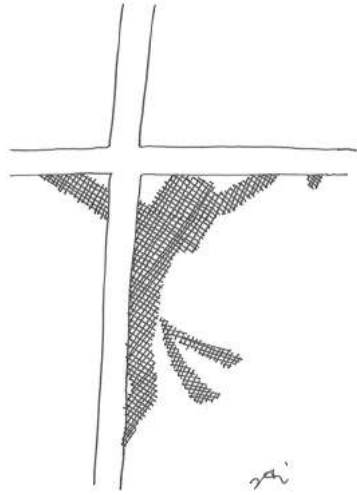
永遠の命 イエス・キリスト

聖書 ヨハネの手紙一5章6～15節

暗唱 聖句 この方こそ、真実の神、永遠の命です。
1 ヨハネ 5：20

ヨハネはこの手紙を書き終えるにあたって、その昔、イエスさまが地上で活動を始められた時のことを思い起こしていました。神から遣わされたバプテスマのヨハネのところに、主イエスがバプテスマを受けにこられたとき、バプテスマのヨハネは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と証しました。そして主イエスがバプテスマを受けた後には、「この方こそ神の子である」と証しました。

この証しは、教会のなかで大切に伝えられてきました。主イエスは神の子メシアであること。そして世の罪を取り除く神の小羊として、わたしたちのためにその命を捧げてくださったこと。この主イエスについての証しは、神からの証しとして教会の中で大切にされてきたことを思い起こして、手紙の最後に「この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによって来られたのです」と告げるのです。「水」とは主イエスが受けられたバプテスマのことです。また「血」とは、十字架の上で血を流し、死なれたことを表しています。この証しをヨハネがここに書いたのは、教会の中に「イエスは人となられた神の子だから、十字架につけられても死ななかった」「イエスは死んだように見えただけだ」と言う人がいたからです。ヨハネはそれは違うと確信していました。なぜなら教会が受け取り、伝えてきた証しは、人が考え出したものではなく、神が人を通して証ししてきた、神の



み子についてのものだからです。

ヨハネはこの手紙を書き始めた時、「命の言ことば」、「永遠の命」であるみ子イエス・キリストを証しするために書きました。そして手紙の最後は「この方こそ、真実の神、永遠の命です」（5：20）と宣言して終わろうとしています。

最後に、ヨハネは、教会の人たちに語りかけます。「十字架につけられたキリストと結ばれているあなたたちには、永遠の命があるのです。この手紙を書いているのは、あなたたちがその永遠の命を得ていることに気付いてほしいからなのです。神さまのみ心にかなうことを願うなら、神さまは私たちの祈りを聞いてくださるのですよ」と。主はどれほど教会を愛して、素晴らしい宝をすでに与えてくださっていることでしょうか。ヨハネはそのことを教会にちゃんと悟ってほしいのです。人間の知恵によるのではなく、主が与えてくださる「永遠の命」に生かされてほしいと教会を励ましつつ、ヨハネは手紙を書き終えたのでした。

永遠の命 イエス・キリスト

青少年科



聖書

ヨハネの手紙—5章6～15節

暗唱
聖句

この方こそ、真実の神、永遠の命です。
1 ヨハネ 5：20

聖書から…

「十字架につけられて死なれたイエスこそが、神の子メシアである」、これこそ、イエスさまの弟子たちによって、使徒たちによって、そして教会のなかで大切に伝えられてきた「証し」です。そして「その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということ」（11節）と書かれている通り、教会の中で大切に「証し」されてきたこのイエスさまの内にこそ、「永遠の命」という希望があるのだとヨハネは語るのです。

ただ、このことはそう簡単に信じられることではないでしょう。「この方は、水と血を通して来られた」（6節）「神の証し」（9節）「永遠の命」（11、13節）などと言われても、「どういうことなのかよくわからない」、むしろ「そのようには思えない」という人いるかもしれません。当時の教会の人々の中にも、違いはあるにせよ、似たような思いがあったのではないのでしょうか。ヨハネはこの手紙の初めから、彼自身が聞き、見、触れた経験（1章1節）、彼自身の「証し」の言葉を伝えていました。私は、また私たち・教会は、それらの言葉をどのように聞き、受け取り、また私（たち）自身の「証し」として伝えることができるのでしょうか。

分かち合おう

- ヨハネは「わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます」（1章1節）と言って「証し」をしています。私たちは、イエスさまの声を聞くことも、その姿を見ることも、手で触れることも実際にはできません。その点で、ヨハネやイエスさまと一緒に過ごした弟子たちと同じように伝えること、「証し」することはできない、とも言えるかもしれません。では、私（たち）にできる「証し」とは何でしょうか。私（たち）が「イエスさまを証しする」とは、一体どういうことなのでしょう。改めて考えてみましょう。
- ヨハネの手紙に限らず、聖書の中には「水と血」「（永遠の）命」などの特別な言葉がたくさん使われています。それらの言葉について説明することができるのでしょうか。その際、辞書に書かれているようなその言葉の意味を説明できることも大切ですが、それ以上に大切なのは、それらの言葉が私（たち）とどのような関係があるのか、ということではないのでしょうか。イエス・キリストというお方についても同じだと思えます。単に歴史・宗教上の人物としてではなく、その方が私（たち）とどのような関係があるのか、という視点で語り始めるとき、そこに「証し」が始まります。イエスさまと自分との関係を、自由に分かち合ってみてください。

13課

6月27日

永遠の命 イエス・キリスト

聖書 ヨハネの手紙—5章6～15節

暗唱 聖句 この方こそ、真実の神、永遠の命です。
1 ヨハネ 5：20

聖書から…

今、私たちは離れた場所にいる友だちに大切なことを伝えようと思った時、どうやって伝えているのでしょうか？ 電話やメールを使う人が多いと思います。手紙で伝えることもできます。切手を貼ってポストに投函すると、郵便屋さんが届けてくれます。

ヨハネが手紙を書いたころ、手紙はどうやって届けられたのでしょうか。もちろん電話もメールもありません。書いた手紙はきっと、人から人へ手渡されて届けられたのでしょうか。とっても大変なことですが、それでもヨハネは教会の人たちを励まし、「真実の神、永遠の命」であるイエス・キリストを伝えるため、手紙を書きました。その手紙は人から人へ手渡され、教会の人たちに届けられました。そして今も、こうやって大切なみことばが私たちに届けられているのです。

活動①

ワークシート

「手紙を書こう！」

●準備●ワークシート人数分、色鉛筆、封筒、紙（自分で聖句を書く場合）

ヨハネは教会に向けて、大切なみ言葉を手紙に書いて伝えました。私たちは6月の間、ヨハネの手紙の話を聞いて、聖書の言葉を覚えてきました。

①ワークシートの聖句を塗ったり、周りに絵を描いたりして飾って手紙を作ります。

シールやマスキングテープで飾っても楽しいですね（白い紙に、暗唱聖句を自分で書いても良いでしょう）。

できあがったら封筒に入れ、リーダーに渡します。リーダーは手紙を添え切手を貼って、それぞれのメンバーの家に送ってみましょう（送れない場合は、良い時期に手渡ししましょう）。

②ヨハネの手紙のみことばが、いつ自分の家に届くか楽しみに待ちましょう！

活動②

「伝えよう！」

手紙がない時代はきっと、口伝えで大切なことを伝えてきたことでしょう。

①紙に書いてある言葉を覚えて、次の人に伝えます。

②伝えられた人は、また次の人に伝えます。

③最後の人は、伝わってきた言葉を書きまします。最初に伝えた言葉と合っていたら成功！

次の人に聞こえないようにひそひそ声で伝えてくださいね。

年齢に合わせて、伝える言葉を単語にしたり長い文章にしたりして楽しみましょう。今まで暗唱した聖句を伝えても良いですね。

主イエスを



左手の平に右手
中指で釘の跡を指す



右手の平に左手
中指で釘の跡を指す



左手の平の上に立てた
右親指をのせる

信じなさい。



親指そのままに
左手の中に



親指を包み込むように
(主を受け入れ信じる)



「時」
左手の平に右親指をあて

あなたも



前に伸ばした
人差指を下におろす



「あなた」
(やや左寄りに)
人差指で相手を指す



「家」
(やや右よりで)
両手指先を合わせる

家族も



「家族」
片方の屋根形の横に
もう片方の親指と小指を立て



揺らす



「同じ」(=同様)
両手の親・人差指の先を
上に向け

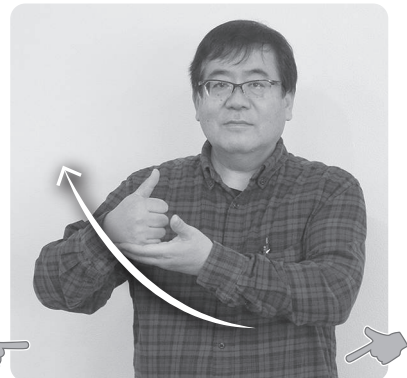
救われます。



左右に置き、同時に閉じる



「救い」
左手親指を
右手(神の手)にのせ



右上に引き上げる



「頂く」
両手を自分に引寄せ



「大丈夫」(=できる)
右手指先を左胸に当て



右胸に当てる

暗唱聖句 カード

新共同訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- <http://www.bapren.com/>

1課 4月4日



イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われた
マタイ 28 : 9

2課 4月11日



わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。
マタイ 28 : 20

3課 4月18日



こころの貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。
マタイ 5 : 3

4課 4月25日



ふたり二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。
マタイ 18 : 20

5課 5月2日



「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。
使徒 9 : 5

6課 5月9日



このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。
使徒 11 : 26

7課 5月16日



わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのです
使徒 15 : 11

8課 5月23日



主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。
使徒 16 : 14

9課 5月30日



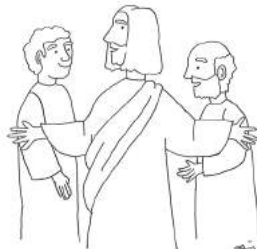
主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。
使徒 16 : 31

10課 6月6日



言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。
ヨハネ福音書 1 : 4

11課 6月13日



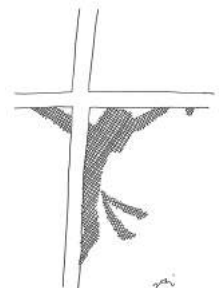
神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。
1ヨハネ 2 : 5

12課 6月20日



わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。
1ヨハネ 4 : 19

13課 6月27日



この方こそ、真実の神、永遠の命です。
1ヨハネ 5 : 20

暗唱聖句 カード

口語訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- <http://www.bapren.com/>

1課 4月4日



イエスが彼女たちに出会って、「おはよう。」と言われた。
マタイ 28 : 9

2課 4月11日



見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。 マタイ 28 : 20

3課 4月18日



心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。 マタイ 5 : 3

4課 4月25日



ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。 マタイ 18 : 20

5課 5月2日



「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。 使徒 9 : 5

6課 5月9日



弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。 使徒 11 : 26

7課 5月16日



私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じます 使徒 15 : 11

8課 5月23日



主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。 使徒 16 : 14

9課 5月30日



主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。 使徒 16 : 31

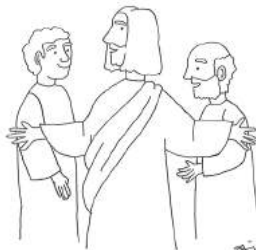
10課 6月6日



この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。

ヨハネ福音書 1 : 4

11課 6月13日



みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。

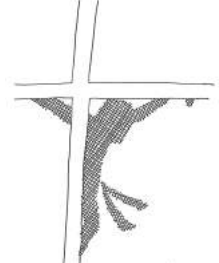
1ヨハネ 2 : 5

12課 6月20日



私たちは愛しています。神がまず私たちが愛してくださったからです。 1ヨハネ 4 : 19

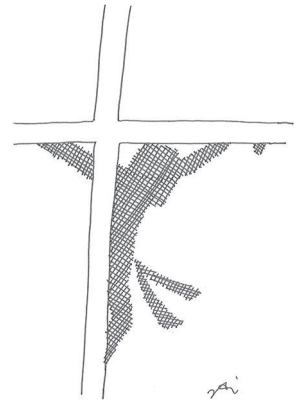
13課 6月27日



この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。

1ヨハネ 5 : 20

聖書教育



特集

平和メッセージ

杉山 望

コロナ危機のなかの移民たち

～外国にルーツをもつ移民・難民の子どもたち～

佐藤信行

連載

教会学校月間をおぼえて

矢野由美

ともに分かち、ともに生きる

森 淳一

ご意見、ご感想をお待ちしております。

FAX ● 048-883-1092 Eメール ● seishokyouiku@bapren.jp (編集担当)

聖書教育

● 2021年2月20日発行・発売 ● 定価 1,200円 (税込)

発行人 中田 義直

発行 日本バプテスト連盟

〒 336-0017 埼玉県さいたま市南区南浦和 1-2-4

TEL : 048-883-1091 FAX : 048-883-1092

日本バプテスト連盟 HP <https://www.bapren.jp/>

聖書教育 HP <https://www.bapren.com/>

ご注文は連盟販売管理室まで hanbai-kanri@bapren.jp

郵便振替口座 00150-9-192579

印刷 ニューライフミニストリーズ (新生宣教団)

● 内容についての編集責任は日本バプテスト連盟にあります。

● ワーク・教材以外の複製はご遠慮ください。

● 聖書は日本聖書協会新共同訳を使用しています。

©2021 日本バプテスト連盟

● 乱丁落丁はお取り替えいたします。日本バプテスト連盟販売管理室までご連絡ください。

● 表紙 三浦あや

● みんなで聴く聖書のおはなしカット 香月 藍

● レイアウト JC ユニット

● 幼小科ワークシート 吉崎 愛



表紙「永遠の命にむすばれて」